

Princess Principal ～Gearing BUILD and CROSS—Z～

ポロシカマン

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ついに新世界を創造し、再び巡り合えた桐生戦兎と万丈龍我!!しかし並行世界研究中の事故で、歴史とは異なる、『壁』によって国が引き裂かれた世界にある19世紀ロンドン——『アルビオン王国』に飛ばされてしまう!!

そして壁を隔てた王国と共和国、二国の戦争を阻止すべく動き出した二人の前に共和国のスパイ、『チーム白鳩』が現れる!!

仮面ライダービルドとプリンセス・プリンシパルのクロス小説です。何でも許せる人向け。両作品の全話視聴を推奨します。

目次

2	2	2	2	2	2	2	2	t h i s	c a s e	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	e	c a s e	
⑧	⑦	⑥	⑤	④	③	②	①	t e a r	X	⑫	⑪	⑩	⑨	⑧	⑦	⑥	⑤	④	③	②	①	b e s t	X
								d r o p .	2													”	l
								m e	T e l l													E n c o u n t e r i n g	E n c o u n t e r i n g
								t h e	m e													”	l
								m e a n i n g	t h e													m u c h	”
								o f	m e a n i n g													t h	”
244	233	219	210	196	184	170	158		o f	144	129	114	102	89	76	58	48	36	23	13	1		t h

2

⑨

253

caseX—l Encountering  
much the best”

1—①

——『うさぎとかめ』という物語をご存じだろうか。

足は速いが怠け者な兎と足は遅いがマジメな亀が競争し、能力に慢心し眠ってしまった兎を堅実に歩を進めていた亀が負かすという、あの話である。

この物語が読み手に伝えようとしている教訓とは、まあズバリ、『真面目にコツコツ頑張れるヤツが偉い』ということだろう。もちろん、そんなことは当たり前の話なのだが、この亀のような生き方を日々の生活で実践できていない人間なんてきつと一握りだろう。ほとんどの人間はどこかで怠けや油断が入り、兎のような失敗を経験しながらも、それを糧として自分に合った頑張り方を構築していくものだ。

この持論を踏まえるなら、世の中の人間は「兎」と「亀」、大きく2種類の頑張り方をしていると言えるだろう。

そしてこの俺……『桐生戦兎』は、ここでいうところの「亀」の方だと自認している。名前は兎だけだな。

物理学を修め、数々の発明品を創造し、かけがえのない仲間たちと共に愛する地球を救うことが出来たのは、ひとえに自分が積み上げてきた努力が一つの要因だと思っている。

……もつとも、その努力の大半は記憶を失う前の俺、『葛城巧』が行ったものであるという自覚を忘れてはいない。

彼のおかげで今の俺があるのも事実で、感謝もしている。

自分で自分に感謝するっていうのも変に聞こえるかもしれないが、これが俺の素直な気持ちなのだ。

彼が俺の中から消えてからここ数ヶ月、特にそう思うようになってた。

自分の中の大切な物がすっぽりと消えてしまうようなあの時の感

覚は、まだこの胸に残っている。

だからこそ俺は、万丈と共に彼の生き様をきちんと『記録』に収録した。

いつか多くの人に彼の苦悩と、『亀』のような努力を俺たちが父さんから受け継いだ『ラブ&ピース』の精神をもとに伝えていきたい。

そして、俺は『桐生戦兎』という一人の人間として、『仮面ライダービルド』としてだけじゃない新しい自分を、これから地道にコツコツ創り上げていきたいと、そう心に誓ったのだ。

誓った、のだが。

「——いたぞ!! 『セント・キリユー』だ!」

「追え!!……絶対に逃がすなよ!!」

「ああもう! どうしてこうなるんだよおおお!!」

19世紀イギリスに似たどこかで見たとような『壁』のある、歯車と霧の都。

——『アルビオン王国』。

この国はそんな自分が生きるには、今は厳しすぎた。

新世界にて、最上魁星の研究の手伝いをしていた俺と万丈は実験中の事故でこの摩訶不思議な世界に迷い込んでしまったのだった……。

——数時間前。

「ほら見ろよ戦兎これ!! 今日もちゃあんと、稼いできたぜ!!」

「はあ……」

大通りから少し歩いた脇の道に、ひっそりと居を構えている大衆食堂がある。

そこでイマイチ味がぼやけている紅茶をしばきながら、俺は万丈がボクシングで稼いできたファイトマネーを見せびらかすのを横目に、街を行きかう人々を眺めていた。

「なあんだよ、テンション低いな…ほらパン食えよ。うめえぞ」

「ありがとう」

味が無い癖にやたら固いパンをちぎって口に放り込む。

この世界に迷い込んでから数日、俺達はいかに現代日本の食文化が恵まれていたのかという気付きをこのパンと共に噛み締める日々を過ごしていた。万丈はもうとつくに慣れたのかバクバク食べて紅茶で流し込んでいる。

しかしこれでも迷い込んだ当初よりは幾分かマシな生活ができている。暴漢に襲われたり物を投げつけられたりと正直あの時のことは思い出したくもない。まあ見慣れない格好の日本人がこのいかにも治安と衛生が悪そうな街で歩いていたらこうなるだろうとは思わなかった。

運がいいことに、襲いかかって来た酔っぱらいの一人が近々試合を控えていた人気ボクサーで、出場できなくなった埋め合わせにそれをK・O・した万丈が急遽代理選手として出場することになったのだ。

『大丈夫だつて!!元格闘家のボクシング、見とけよ戦鬼!!』

そして、試合当日…まさかの日本人ボクサー登場の噂を聞きつけた住人たちによって会場は空前の大盛況(始めて来たので普段の客入りなど知らないが)。

しかも万丈が繰り出す現代ボクシングテクニクの数々と、見事なK・O・フィニッシュに観客は大盛り上がり、万丈は一夜でこの街のスターとなってしまった。

このレストランも万丈のファンになった店主が格安で料理を提供

してくれるし、倉庫だが部屋として貸してくれていた。

因みに『マケルキガシネエゼ!!』は今や街の住人たちのホットワードとなっている。

「いやあ、言葉が通じなくてもよ！気持ちつてのは拳で分かるもんだな!!どいつも色んな事情でリングに上がってるけどよ、拳を交わす間はそのなこと忘れて純粋に楽しんでんだよな……デビューしたての頃みてえなこの気持ちも色々あつて忘れちまつてたけどよ、こうして戦つてると今すっげえ充実してるって感じなんだよな……おい聞いてんのか戦鬼?」

「ごめん、今グルタミン酸のこと考えてた」

「いや聞いとけよ!!」

だってその話昨日も聞いたし、なんなら一昨日もその前の日も聞いた。

多少単語は異なつていても内容は全く変わってないので、聞くだけ損した気分になる。なつてる。

ああ、今すっごくアジの開きが食べたい。それとほかほかの白米。どこかに日本食を食べられるところはないものだろうか。

「なんか、お前なら身一つでアマゾンの奥地でもやってけそうな気がするよ……」

「いやいや流石に無……あ、でもピラニアとかワニとか食えるもんだくさんありそうだし、意外といけっかもな!!」

……なぜかその気になつて笑っているこの筋肉バカと日本食は置いといて、俺は今後の生活について思案することにした。

今は万丈のファイトマネーでなんとか食いつなげているが、それも恐らく長くは持たないだろう。

現代日本でさえ格闘家の、特にトップクラスではないマニアでなければ名前も聞かないような者たちの金銭のやりくりはとても厳しい物があると聞いていたし、この短い期間で万丈の付き人と言う名の通



訳をしている中でも（英語が通じてマジ助かった）選手が何時の間にかいなくなっていたというのは何度かあった。

長い目で見れば、より安定した食い扶持を見つめる必要があると言えるだろう。

そんな山積みの問題を想うと気が滅入るし、ありもしない日本食に現実逃避するのも許してほしい。

それに何より、

「なあ戦兎……」

「……なんだよ」

「別に焦んなくても俺が稼いでやっからさ。ゆっくり探そうぜ？お前の仕事！」

現在、天才物理学者桐生戦兎が『無職』という重大事件の真ただ中にあるのだった。

「わーかってるつての!!…あー、もうお前に心配されると凹むんだよこっちは!!」

それに加え、本来は自分の方が社会的優位性が高いはずの自分が、格闘家の稼ぎを頼っている実質『ヒモ』状態であるという現実だった。自分でも今更これまでの万丈との関係を踏まえても、いささか驕っているとは思う。でもこれはプライドの問題なのだ。自分だけが仕事をしていないというこの状況に、万丈だけを働かせている今の自分に耐えられない。

「そっか…わりい。焦らすようなこと言って」

「……………」

しかも、そんな自分の感情を万丈が慮ってくれているということが……とても、とても悔しいのだ。

本当は逆の立場でありたいという、そんな自分の勝手な感情を自覚してしまう。

頑張ってる万丈の前で、そんなことは絶対に口にしたくなかった。

「……外出て来る」

気分を変えたい。それに、ここにいても心にもないことを言っ  
てしまいたい。まいそんな気がした。

「ほお、ひいふへへな（おう、気いつけてな）」

「ああ」

ワイルドにパンをかじる万丈の声を背中に感じながら店を出る。  
無職は仕事を求めて大通りへと繰り出した。

「見つかんねえなあ……」

結局、身元不明の日本人を働かせてくれる優しい仕事場は無く、俺  
は公園の原っぱで寝そべり途方に暮れていた。

まあよく考えなくても、自分のようなヤツを働かせてくれるような  
職場など、明日の命もあるかどうか分からないような危険なものしか  
ないだろう。

でも、一つくらい、一つくらいはそんなことない、迷い込んできた  
異世界人を手厚く迎えてくれるような仕事があってもいいと思うの  
だ。

しかし現実には非情である。そんな都合のいいものはなかった。ち  
くしょう。

「最上さんってめっちゃくちゃいい人だったんだなあ…」

俺と万丈が創った『新世界』で、色々あつて頼ることとなつたかつての敵、『最上魁星』……その別の可能性。

新世界での彼はあの事件で出会った二人とは似ても似つかない、温厚だがどこか人とズレた思考をするしがない大学教授で、身元の分からない、しかも有名人にそっくりな自分たちを受け入れてくれるほどのお人好しだった。

初めて会った時の彼が淹れてくれたコーヒーの味は、今でもはつきりと覚えている。

彼と過ごした時間は俺にとつても有意義で、万丈と論文の推敲に徹夜で付き合わされたり（万丈は飯炊き係）、そのお礼にと自分たちの『記録』の構成を手伝ってくれたりもした。

……だからこそ、あの日の事故が悔やまれる。

『エニグマ』による並行世界の自分との融合とは違う、特殊な装置が付いた大きなリング：『並行世界接続装置（仮）』により並行世界からそのエネルギーを取り出し、エネルギー問題を一途に解決するための、人のための正しい研究だった。

理論上完璧だった装置は何故か暴走し、謎の『緑の光』に吸い込まれ、俺と万丈は何時の間にかこの世界に倒れていた。

最上さんにさよならも言えないまま……俺と万丈は何もお返しが出来ていない。

だからこそ、俺たちはできるだけ早くあの『新世界』に帰らなくちゃいけない。

それに『記録』だつてまだあらすじの録音を録り終えてない人が残ってるし、マスターや美空、他のみんなも俺たちの『記録』：『仮

面ライダービルド』の完成を心待ちにしてくれているのだ。

「こんな形で裏切るなんてことは、絶対にしちゃいけない。」

日々の生活費を稼ぐ中で、仕事のない俺は元の世界へと帰る方法を模索するために、今いるこの世界について調べていた。

それで分かったのは、この国は元々重力を操ることのできる力を持った物質、『ケイバーライト』を用いた空中艦隊を保有していた『アルビオン国』という一つの国で、それが10年前の革命により、今自分たちがいる『王国』と壁の向こうにある『共和国』に分けられ、二つの国を隔てる『壁』の周辺地域は各国の工作員が暗躍する『影の戦争』の最前線と化しているということだった。

「ちよつとどころか、結構似てるよな……あの日本と。」

10年目に起きた事件により国が分かれてしまったこと。

軍事産業が国家資金の多くを使っている事。

それに……街を行き交う人々の目が、戦争中の東都の人々のそれによく似ていた。

「……この国は、きつと近いうちに戦争を起こす。」

科学の発展はいつだって戦いを齎した。

しかしこの国はなんとかその火種を抑え込んでいる。

しかしそれもきつと時間の問題だ。この国の人たちがどれだけ不満をため込んでいるのか、少し周りを見渡しただけでもよく分かる。

幸せそうに笑ってるのは立派なレンガ造りの家に住む瀟洒な服を着た一部の上流階級の人間だけ。

彼らは道の端でうづくまる者たちのことになど目もくれない……

自分たちが殺意の乗った視線に曝されているとも知らずに。

もう限界なんだろう。この国は。

——戦争なんて止めたい。

……しかし今の自分たちじゃとてもじゃないが戦争の開始を止められるような力も立場もない。

でももし、今ここにいる街や俺達に優しくしてくれる人たちが戦火に巻き込まれるようなことがあれば、俺は……

「俺たちは……その時こそ、この力を使う。」

俺は懐から『ラビットフルボトル』を取り出して、そう強く思う。

今持ち歩いているのはこのボトルだけ。『ビルドドライバー』や『ハザードトリガー』、万丈が持つ『ドラゴンフルボトル』以外のその他のボトルやマシンビルダーのようなアイテムは、今の仮住まいに厳重に保管してある。

何故なら『ネビュラガス』に連なる技術が存在しないこの世界で、何かの拍子でこれらの技術が渡るようなことは何としても阻止しなければならぬからだ。

物理学を冒読するかのようなこの国の巨大な飛行船は、今もどこかの国の空を飛んでいるのだろう。

ボトルの力がこの国の軍人や政治家に知られたらどうなるか、容易に想像できる。

『パンドラボックス』が無くとも人は強く争いを求めることができる。と、難波重工との戦いで俺たちは嫌と言う程思い知った。

だからこそ、安易に強い力を入れることがどれだけ危険な事か、そして強い力を得た者の考え方と責任の重さを、俺と万丈は『記録』の中で自らの体験に添えて強く、メッセージとして届けたいと考えていたのだ。

「……………メッセージを、届ける?」

今、何かが閃きそうな気がした。  
ビルドのアイテムの開発三昧だったあの頃ではよく覚えた、あの感  
覚。

『フルフルビットタンクボトル』の構想を思いついた時にも似た、あ  
の感覚。

メッセージを届ける……………伝える。  
自分たちの感じた思いを、体験を……………

『体験』。

「……………そうか、そうだよーあー!!この手があつたんだ!!」  
やっと見つけた!!俺の仕事!!  
戦争を止められそうな方法!!  
早く、万丈にも教え……………

「——ほう、なんの手だ?」

立ち上がっていた俺の方に、黒い手が乗っていた。

「え……………誰?」

背後に目を向けると、そこには黒いスーツに同じ色の帽子を被った  
体格のいい男がいた。

さらに周りを見渡すと、似たような男たちが自分を取り囲んでい  
る。

『セント・キリユー』だな?強盗殺人容疑で逮捕する。」

そう言うと同時に、男は俺の腕を掴んだ。

「……………は？」

「抵抗は無意味だ。来い!!」

「いや……………いやいや、え、ちよ、離しなさいよ!!」

俺は男の手を振り払い、

「貴様ア!!……………捕縛しろ!!」

一目散にその場から全力で走り出した。

「……………なんつでこうなるのおーー!!??」

ハザードレベルのおかげで身体能力が上がっていた影響か、意外にも追跡のプロである警察?から捕まらずに走り、壁をよじ登り、屋根の上を飛んだり『ビルド』の力無しでこうも想像以上の動きができる自分に若干驚きながら、俺は1年とちよつと前の、あの日のアイツを思い出していた。

「ハアアア……………嘘だろ……………?」

「ハア……………今度は、ハアツ、俺が殺人犯かよ……………」

あの時のような二人じゃくて、俺だけの逃避行。しかも着の身着のまま、『ビルド』無しのマジの自分だけ。

「……………万丈」

アイツの顔が否応なしに浮かんでくる。

「——おい！いたぞ！！」

「うおやっべ！！」

銃声が鳴り響く中、狭い路地を俺は走った。

そして、意識したわけでもないのに、あのセリフが口からこぼれる。

「俺は！！誰も！！殺してねええええええー！！！！」

「始めさせないわ戦争なんて。絶対に——」

走る戦兔を見つめる視線があった。

黒いマントがはためいて、緑の光が淡く揺らめく。

銀髪の少女は金の望遠鏡から視線を外し、夜のロンドンの町を翔けた。



——時間は戻る。

「くっそ……どうすりゃいいんだよ……」

警察の包囲網を掻い潜りながらロンドンの街をネズミのように逃げ回っていた俺は、何時の間にか警察の検問に囲まれ逃げるように平民街の家と家の細い隙間に隠れ潜んでいた。

気付けばとつくに太陽は西に隠れ、街灯の光だけが街を照らしている。

夜闇に紛れて警察を撒こうにも、まだ土地勘の薄いこの街ではどこに逃げればいいのかも分からずにこの小汚い道とも呼べない空間で途方に暮れていた。

「はあ……まさか現実でアレをやることになるなんて……」

ロンドンで警察といえば、過去に俺は美空と万丈、そして『石動惣一』とともに興じた『スコットランドヤード』というゲームを思い出す。一人が犯人役、残りが警察役として制限時間内にロンドンのどこかに隠れた犯人をその足取りを頼りに見つけ出すというボードゲームだった。

……そういや一度も捕まえられなかったな、あの野郎。

「ってそんなの今思い出してどうすんだよ」

ていうか状況的に考えて『ブラッド』の事件の方が近いだろ。

『奴』との最終決戦の前に勃発した、三人のブラッド族との戦い。

奪われた万丈を巡っての伊能との対決。

その時に万丈と変身した『クローズビルドフォーム』。それに、

『仮面ライダー』として戦い続けることが出来たのは、あの姉弟みたいな人たちのおかげだ。」

『スマッシュ』に襲われていた姉弟、あの事件の後俺にお礼を言ってくれた時はとても嬉しかった。

見返りが欲しくて助けたわけじゃなかった。

助けてもスマッシュの仲間だと勘違いされて俺から逃げる人だつて少なくなかった。

感謝なんて期待していなかった。

それでも……やっぱりお礼を言われた時は、嬉しかったのだ。

応援されたのは、嬉しかったのだ。

幻さんが最後まで『仮面ライダーローグ』として戦えたのも、きつと国民の思いを背負う喜びがあつたからだ、俺は思う。

でも、この世界にその人たちはいない……『新世界』以上に面影の無い、俺と万丈が完全に孤立した世界。

俺たちを応援してくれた人たちに感謝を伝えることもできない完全な『別世界』なのだ。

「会いてえな……みんなに……」

『新世界』で『記録』を創っていくなかで親交を深めていた、かつての世界とは別の人生を歩んだ俺の仲間たち。

美空、マスター、紗羽さん、一海、幻さん、内海さん、勝、聖吉、修也さん……

修也さん……青羽。

そうだ

「俺は誰も殺してない……わけねえだろ。」

東都と北都の戦争の中で、俺が初めて『ハザードトリガー』を押し  
た日、

俺は確かに、彼の『命』を奪った。

それは紛れもなく……殺人だったじゃないか。

彼は、兵器じゃない。仲間と故郷の為にその身を捧げて戦つてい  
た、紛れもない心ある人間だったじゃないか。

この国で俺は確かに誰かを殺したわけじゃない、冤罪だ。

それに抗うことは当然だ。

それに、俺はまだ彼の命を奪った罪を償いきれたとは到底思つてい  
ない。

二度と彼や他の三羽鳥、西都の兄弟、内海さんのような人間を生ま  
ない為にも、俺たちはあの『記録』を完成させないといけない。

そして、この国の人たちにも伝えるんだ。俺たちの思いを響かせる  
んだ。

「だからこそ……こんな所で足止めを食らつてる場合じゃない!!」

立ち上がり、屋根と屋根の間から覗く赤い月を見上げ、俺はその明  
かりを頼りに壁に足を掛けた。

「いたぞ!!脚を狙え!!ヤツにこれ以上走らせるな!!」

「うおおおお……おおい!街のど真ん中でドンドン撃つんじゃない  
よ!!あんたらそれでも市民の味方か!」

「黙れ殺人犯!大人しく捕まれ!!」

「だーかーらー!!冤罪なんですう!!今日の昼過ぎまでのアリバイを証  
明できる人がいるから!!そいつ連れて来るま……うおわ!!…連れて来

るまではちよつと待つてなさいよお!!」

俺はその証人……万丈とレストランの店主のいるあの店に向かって走っていた。

だがその旨を懇切丁寧に（弾を避けながら）説明するも、頭に血が上ったポリスマンはまるで聞く耳を持つてくれないなかった。

おかげでまたしたくもない逃亡劇を繰り広げてしまっている。

でも今の俺は至って冷静だ。これからやるべきこと、その道のりがはつきりと見えているからだ。

どんな困難にも決してめげたりしない夢が、俺の全身を動かす原動力となり、この足を走らせる。

——待つてろよ万丈!!今の俺には、お前が絶対必要なんだ!!

あと十数メートル、もう少しであの店にたどり着く。

俺の夢を守ってくれ、万丈!!!

前方に差し込める街の光を見つめ、俺はこの長く暗い路をついに抜けた——。

「残念だったな。ここが終点だ」

街の明かりだと思っていた光は、昔の刑事ドラマで見たような大きな照明だった。

「もうどこにも逃げられんぞイエローモンキー……フツ。屋根の上にも武装警官を配置してある。お得意のアクロバチックもこれで役立たずだなあ。おっと、下手な動きを試してみろ……お前が凶器を取り出すよりも早く、ワインセラーにしてやっからよ。」

顔の厳ついこの場のリーダーらしき男が、拳銃を俺に向けながらペラペラと喋る。

その後方には数十人の棒状の武器を構えた警官がにじり寄ってきている。

背中からも、追ってきていた警官たちが俺を取り囲んでいた。

「これでめえは終わりだ。…ハハッ、運が無かったなあ東洋人!! バカやった分、この国の為に文字通り馬車馬になってもらおうか!!」

男が下卑た笑みを浮かべながら、銃を手で弄びながら近づいてくる。

コイツだけじゃない、周りの警官たちも、まるで賞金付きの害獣を見つけたかのように、舌舐めずりしながら俺に近づいてくる。

俺はマングースやアライグマじゃない。

桐生戦兎だ。

「——嫌だ。」

俺には、まだやるべきことがたくさんあるんだ。

この世界で生き抜くための仕事を見つけたばかりなんだ。

「俺は、俺たちはまだ戦わなきゃいけないんだ——」。

『おはようセント！朝飯出来てるぞ!!今日のバンジョーの試合絶対見に行くからな!』

『セントー！なおしてもらったこのひこうきすごいよ！あーんなどこまで飛んでったんだぜ!』

『ほら、このシャツ私が仕立てたの！よかつたら着てみてよ！ハンサムだからきつと似合うわ!』

『…東洋の人はまだ色々大変だと思うけど、きつと今にいい国になるわ。…だから、この国の事まだ嫌いにならないでね?』

何も分からないこの世界でも、俺たちを迎えてくれた人たちがいた

んだ。

『なんか……思ってたよりいとこだよな、ここ。結構寒いけど』

『まあまだ春先だしな。なあ万丈……この国の人たちは苦労しながら日々の楽しみを大切にしている。だから見せてくれる笑顔が凄く温かいのかもな。』

『それな!! そうだよなあ!! ……ずっと、笑っててほしいよな。あいつら』

『ああ。』

本当に、心からそう思えるんだ。

だから。

——だから俺は!!

「この世界の人たちも、守りたいんだああああ!!」

「ならまずは、私があなを守らせてもらおうわ。」

緑の光が、突然空から舞い降りる。

「な、何者——ぐあぁッ!？」

その次の瞬間、俺の視界は煙の灰色に包まれた。

「げっほ!!え、煙幕!？」

「なんだ何があつ……ぐへぁッ!？」

「お、おい!?!何がどうし……ぶはッ!？」

俺を囲んでいた警官たちのものだろうか、男達が次々と何者かに倒されていく様子が煙のスクリーンに映し出されている。

「あれは………」

眼をこらし、警官たちを伸していく謎の黒いシルエツトを注視する。

まるでアスリートのような身のこなしでバツタバツタと武装した警官たちを地面とキスさせていくその存在。

やがてそれ以外動くものが見えなくなると、徐々にこちらに近づいて、そいつは俺にその異様な姿を見せた。

「……………えっ?…」

黒いシルクハットに、同じ色のマントと口を覆う布。そして少しの銀髪と綺麗な青い瞳が覗く。

自分より頭一つ分くらい低い等身、まるで映画や小説の中でしか出会えないような出で立ちをした少女が、目の前に立っていた。その姿は、まるで……………

「まさか……………怪盗!？」

「泥棒と一緒にしないで」

顔に布を被せられた。

「ソーツ!!？」

「はしゃがないで。」

真っ暗になった視界が、ほのかに緑色を帯びる。ついさつき見た物と同じ光だった。

いや、この光は……………ずっと前にも、見たような……………

「!？」

思考を砕く圧迫感が、腹部を襲う。

そしてかつての戦いの中で何度も味わった、空中に吹っ飛ばされた時の、脳が揺さぶられるあの感覚。

まさか…………『飛んでる』のか？

それに、担がれてる!？」

「……………撒けたようね。」

少女の声が聞こえる。凜とした、美しいがどこか超然とした、まるで遠くの人間に話しかけているような声。

でも、確かな信念を感じるような熱い声だ。

「手荒な真似をしてごめんなさい、こちらもちよっと立て込んでいるの。…………そのまま聞いていて。先ずはあなたに知っていて欲しいことがあるから。」

「……………」



「あなたの顔と名前を使って、悪事を働いた輩がいる。それも今回が初めてじゃない。今まで何人もあなたのような身元不明の人間に化けて逃げおおせてきた、凶悪犯罪者よ。」

……………そして彼女は語り始めた。

そいつは没落貴族の元子弟で、一部の上流階級に顔が利くこと。

貴族と繋っているある政治家の汚職の証拠を盗み出し、それを脅しの材料にして自分の悪事の数々を見逃させている事。

自分はその汚職の証拠を取り戻すために、件の犯罪者の居場所の手掛かりが必要だったこと。

「その手掛かりがあなたよ……『桐生戦兎』。」

緑が視界から消え、腹部の圧迫感も消える。その代わりに足に地面の感触が戻った。

そして被せられた布も、最後に俺から離れた。

「……は……」

すぐに今俺がいる地点の周りを見渡す。

強い光を感じた右方を見ると、そこはガレージのような場所で、その中に綺麗なこげ茶色とミルクティー色のクラシックカーが鎮座している。さらには用途不明だが洗練されたデザインの何かのアイテムの数々が目に付く。

まるで何かの組織の秘密基地のようだった。

……………いや、それよりも

「ええっと……………怪盗じゃないなら、君は何者なんだ？」

シルクハットの少女に問いかける。

少女は俺を一瞥した後、ハットと口の布を取って、こちらに向き

直った。

「私の名は『アンジェ』、見ての通りスパイよ。今日からあなたの護衛をさせてもらう。」

「……はい？」

「そしてこの国の……プリンセスの為に、力を貸してもらうわ。」

——俺たちの新たな戦いの日々は今日この夜、始まった。

「ハア—ツツ……ハア—ツツ……」

深い霧に包まれている夜のロンドン郊外、黒いコートの男は大きく口を開け息を荒くしのろりのろりと歩いていった。

深緑色の鍔付き帽子を前よりに被り、襟元を立たせて顔を隠している。

しかしそれが逆に、彼の真つ赤に充血した双眸を大きく目立たせていた。

時折彼とすれ違う通行人には、まるで血に飢えた吸血鬼のように見えているのか、見なかったことにして足を早める。

「クソツツ!!……『ヤツ』に逃げられた!! 一体、あ、なんだったんだアイツはア!!」

勿論彼は吸血鬼ではないし、れっきとした人間である。

だが、実は彼には吸血鬼と共通するものがある。

彼は『鬼』である。

厳密には『殺人鬼』である。

自らの欲望を満たすため、何十人も無辜の命を奪って来た『連続殺人鬼』である。

「それに……」あ、だ足りねえ……この程度の『力』じゃあ、僕は満足できねえ……『ヤツ』を思い通りに刻めねえ!!」

人は殺人鬼と聞いて、まず誰を思い浮かべるだろうか。

ジャック・ザ・リップパー？

ソニー・ビーン？

H・H・ホームズ？

彼らの猟奇的な殺人は有名過ぎる程に有名である。その手口を知る者も多いだろう。

鋭い刃物や毒ガスを、彼らのような殺人鬼たちは好んで凶器として活用した。

だがそれらは、言ってしまうえば所詮外付けの道具でしかない。

殺人的なまでに高められた武術や話術のような、殺人者自身が習得した能力とは別に用意しなくてはならない物だ。故に、それらは彼らの凶行の証拠品として、時に彼ら自身を追い詰める諸刃の剣となることもあっただろう。

だが、彼の場合は少し特殊だった。

彼の凶器の一つは、『人の顔』であった。

自分と背格好の近い男を見繕い、その顔を観察し複製し、『仮面』を作る技術があった。

その仮面は彼を完全な他人へと『変身』させるのだ。

変身された者に罪を押し付け自らの生贄とするために彼が磨いた『凶器』である。

彼に唇は無かった。

鼻も耳も無かった。

眼球はあつても瞼がなかった。

吸血鬼ではなくとも。仮面を外した彼の本当の顔は正しく『怪物』と呼ぶにふさわしかった。

しかしその顔とも呼べぬ顔を、彼はあらゆる人間に変身するのに最適だとし、むしろ歓迎していた。

多くの顔になることが出来る彼にとっては、本当の自分の顔になどまるで興味はなかった。

しかし、『仮面』はあくまでも彼の殺人の準備とその後始末のための

『凶器』である。

肝心の、彼が人を殺すための凶器は別にあつた。  
それは――。

「――よお、お勤めご苦労じゃな。」

「ハハアーツ：探したぞ、『博士』！」

博士と呼ばれた、トランクを脇に下げた『老人』はにやにやと気色の悪い笑みを浮かべながら、殺人鬼の前に現れる。

その豊かに蓄えられた顎髭を手で弄りながら、博士は殺人鬼を頭の先からつま先までをじつと観察する。

「んんん……ほっほ、だあいぶ馴染んできたようじゃないか。どれ、見せてみい」

「ああ……」

右腕の袖を肘まで捲り、上腕に力を込める。  
すると――、

ズウオン!!

右腕から噴出した蒸気圧により、土埃が舞い上がる。

そして彼の右腕に、ある変化が起きていた。

「んんん……やはり見事なり我が『業』。儂特製の『鋸鎌』よ。」

鋸鎌……そう、鎌。

彼の右腕に、大きな鎌が生えているのだ。

カマキリのように、刃に鋸状の突起が無数に付いた大きな鎌が彼の右腕から生えているだ。

「――シッ」

殺人鬼はおもむろに右腕を振るう。

音もなく、彼のそばに立っていた街路樹が伐採された。

「ほっほ、素晴らしい！もうここまで使いこなせるとはの！流石に『彼』が紹介してきただけの事はある。」

「どうだ……」お”っと『改造』してくれるのか？」

「無論！そのつもりでお前さんと呼んだのじゃ……ここまで仕上がったのなら、もうその子を完成させてもいい頃合いじやろうて。」

「ハハア——ッ!!助かるぞ!!」

殺人鬼は手首をスナップさせて鎌を収納すると、興奮した大型犬のように息を荒くして歓喜する。

「これで……これで僕は”お”っと多くの人間を刻”ん”ことが出来る!!僕は”お””っと幸せになれる!!アツハツハ……ア——ッハツハツハツハ!!」

——夜のロンドンに、怪物の笑い声が隅々まで木霊した。

~~~~~

「万丈………?」

アンジエと名乗った自称スパイを問い詰めようとしたのを無理やり止められ、ほとんど力づくで連れて来られた部屋で俺の目に最初に映ったのは、なんと万丈だった。

「よう！遅かったな戦兔！」

しかも畳(!?)の上で胡坐をかきながら……何故かきゅうりを齧っている。

「いや……いやいやいや!!……え、何!?え、なんでいんの?ていうか何できゅうり!?!」

「あ、これ?ぬか漬けだよぬか漬け。おめえも食え!うめえぞ!!」

そう言っただけに、ちやぶ台の上の皿に乗っているきゅうりのぬか漬けを渡して来る万丈。

「うわ臭ツ!!」

「んだよそんな臭くねえよ!いいからほら!食ってみろって!おめえの大好きな日本食だぞ?」

いや好きだけどき日本食……でも俺はアジの開きが特別大好物なだけで、他はまあそこまで大好きじゃないっていうか……うくんでもこの臭みなんかすっごい懐かしい。なんか、故郷ふるさとの匂いがするっていうか……ボリつと。

「あ、うまあい!!」

「だろオ!?!」

「あー、すっごい美味い……この絶妙な塩分量がこう、ミネラルとして疲れた肉体の隅々まで伝わってきて最っ高の癒しを齎して……って和んでる場合かよ!!」

すかさず自分自身にツツコミを入れる。きゅうりが美味すぎて我を忘れるところだった。

「だからなんでいんの!？」

「あー……いや何かな?…このやつらがお前を助けんのに俺が必要だったって突然車でここまで連れてきたんだよ。それでお前を待ってる間腹空してたらこれくれてよ。あ、くれたのはそこにいる『ちせ』って髪に花付けてるやつな。」

『藤堂ちせ』という。よろしく頼む」

「うおわあ!?!あ…すみません、お邪魔してます…」

万丈が手で示した方を見ると、そこにちよこんと和服を着た黒髪の女の子が座っていた。

泰然とした雰囲気纏い、綺麗な姿勢で湯呑を口に行っている。

俺はそんな彼女が急にちやぶ台の向かいに出現したものだから、ビックリして思わず叫んでしまった。

「お主が『桐生戦兎』か。」

「あ、はい。てんさ、んんっ……桐生戦兎です。よろしくお願いします。」

幼げに見える容姿とは真逆に、まるで武士のような…いや、奥に立ってかけてある日本刀のことを考慮すれば、もしかしたら本当に武士の家系の者なのかもしれない彼女の言葉遣いに、俺は思わず堅苦しく敬語で応対してしまう。

それだけ物々しい、一般人とは大きく異なる雰囲気醸し出していた。

「これ(きゅうり)勝手に頂いちゃってよかったですか…?」

「構わんぞ。それはこの者には口に合わぬのか、漬けてもよく余ってしまうのだ…お主らで良ければ、あるだけ食してくれてよい、同郷のよしみだ。」

「同郷……」

少女は小さくにこりと笑みを浮かべ、そしてまた湯呑に口を付け



た。

そうか……やはり、彼女は日本人なのか。

「……ありがとうございますー！いただきます!!」

家主の許可も出て、俺は久々の日本料理を堪能した。

美味しい。本当に美味しい。

そこまでぬか漬けに詳しくない自分にも、これがどれだけの手間をかけて漬けられたものか、味覚で理解できた。

万丈も無心でボリボリと小気味良い咀嚼音を響かせている。

ふと、これがジャガイモ以外で久々に口にした野菜だと思いつく。

それが関係したかは知れないが、目尻に温かい感触を覚えた。

「す……すごい……泣きながらアレを食べちゃってますよあの人たち……」

「ハハハ、ほんとだ……いや、日本人にしちやちよつと態度がこつちよりすぎて若干疑ってたけど、あの舌は間違いなく日本人だな。ん……ぷはっ」

「あらドロシーそのお酒、結構高価なものじゃなかったかしら?」

「ふっふ。いやあ、今回の報酬結構凄じやないですか。だからまずは景気づけにパーっと呑んじゃおうかなあ?と思ひまして。」

「はあ……発想がオジサンのそれね。」

「ああん!?あたしのどこがオジサンだつてえ!?!」

と、咀嚼音に混じって部屋のどこからか女の子たちの話声が聞こえる。

「んん………?」

その方向へ首を動かすと、そこに丸テーブルを囲むように座る四人の少女がいた。

「お、漬物はもういいのかい?」

「あんたは……?」

「あたしは『ドロシー』。『セント・キリユー』でいいよね? 短い間だけ  
どよろしく」

四人の内、初めに俺に声を掛けた少女は自らをそう名乗った。おひらひらと手を揺らしながら酒らしき物をぐびぐびと飲みつつの挨拶。確かに『オジサン』然とした陽気な雰囲気だが、気のせいだろうか、俺は彼女のその姿にどこか哀愁を感じた。

「あ……えっと、初めまして『ベアトリス』です! よろしくお願いします!!」

間髪入れず、次に声を上げた少女は突然の自己紹介タイムの開始に慌てふためいたのか、勢いよく立ち上がって大きくお辞儀をした。彼女は髪を大きく二つのお団子に纏め、また、くりくりとした大きなブラウンの瞳が特徴的でありまるで愛くるしい小動物を思わせる容姿をしている。……だが気のせいだろうか? 彼女のよく通る少女特有の高い声に、なぜか機械的なノイズが混じっていたように聞こえた。

「……………ああ! 俺は桐生戦兎。天っ才物理学者だ! 二人ともよろしく!」

思考に埋没しかけるのを寸で押しとどまる。

そうだ、今はまず彼女らと新しい関係を構築にするのに専念しよう。詳しいことはそれからだ。

そして俺もいつものように、元気に初対面の挨拶を決める。

これには俺が『科学に与る者』であると同時に、『科学を預かる者』であるということの自己アピールと、俺はその道を決して違いませんよという思いを込めている。

そしてこれは、いついかなる時も俺の科学は人の為にあるという意思表示なのだ。

ちせの時は彼女の雰囲気気圧されてしまったが、今度はバツチリ決まっ……

「ふうん……ちよつと意外」

「失礼ですけど、あまりそんな風には……あはは……」

「……………がーん。」

てなかつた。スベつてた。

何でだ……やはりこの顔のせいか？葛城巧の顔をしていればもつとちやんとしたのか？

……つて駄目よ周りのせいにしちゃ。きつとまだまだ俺に天才物理学者としてのオーラのアレが足りてないってことだろう。そうに違いない。もつと実績を積まなきゃなあ……日々是精進、しないと。

……………つとそうだ。いかんいかん

「えー、君は……………」

「『アンジエ』よ。さつき名乗ったばかりでもうお忘れかしら、天才物理学者さん？」

「いやいや、これからよろしくお願ひしますって言いたかっただけよ。護衛まもつてくれるんでしょ？俺を。」

「ええ。それが今回の私の任務だから」

そう言つて彼女は俺から目を離れた。

……ありやま、そういう感じで来ちゃいますか。

なんというか……あからさまにこつちと『壁』を作りに来てる感じがビンビンしている。

まだ見た目年若いくせに、このどこか達観したような雰囲気と視線はこちらに向いているのにここじゃないどこかを見ている瞳の少女、アンジエ。

きつと彼女には人の創造の及ばない暗い境遇があるのかもしれない

いが、今俺がそれを聞きだそうとは思わない。人には人の事情があるのだし。

「ごめんなさいミスター・キリユー。この子こんな風に素っ気ないけど、ホントは誰よりも思慮深いとつてもいい子なのよ。誤解しないであげて？」

「あ、そうなんですか？」

「ちよつ、プリンセス!？」

「あ、マジなんですか!？」

「黙りなさい!!」

「オー、ソーリー……」

めつちやキレられた。なんかネジのついた変な球体？まで出してきたし、なんだろう、スパイの秘密アイテム的な奴だろうか。

スパイ…そうか、もしかしてここにいる女の子みんなアンジェと同じスパイなのか？

色々と込み入った事情がありそうな少女たちが集まっているのもこれで少し納得……

!!……いや、その前に……

「ええつとあの、あなたさつきその、『プリンセス』って、呼ばれてまし……た？」

肝心なところを聞き逃すところだった。

ある意味では、スパイよりも重要かもしれないその肩書。

普通ならただの女の子同士で冗談で使われるようなニツクネームだが、この場でそう呼ばれた彼女は、そう呼ばれる説得力が異常なまでに高かったのだ。

「ああ、そうでした……申し遅れましたご無礼をお許しください。ミ

スター・キリユー」

その浮世離れた声色に、俺は思わず背筋を伸ばしていた。

「私の名は『シャールロット』。このアルビオン王国で王女をしております。気軽に、『プリンセス』とお呼びくださいね。」

——ドンピシャ。

天才物理学者、王族とお近づきになったつてよ。

「マ……マジ?」

「なんと大マジ。どう?新聞で見たより美人だった?」

「いや新聞取ってないっす。」

「ええー!?!?!ま、まさ、まさかあなた、姫様のご尊顔を今の今までし、知らなかったんですか?」

「……………知らなくてすみませんでした!!」

プリンセスに心からDOGGEZA奉る。

俺だって『今の日本の首相もちろん知ってるよな?』『知りましえー!?!?!』されたらキレるに決まってる。

心からのDOGGEZAだった。

「ゆ、許されませんか?!?幾らちせさんと同じ日本人とはいえ、仮にもこの国で暮らす者が姫様のご尊顔すら知らないなんて!!」

「本当にすみません!!」

「落ち着いてベアト?ミスター・キリユーはこの国にいらしてからまだ本の10日余りでこの国のことをよくご存じないのは致し方ないことだわ。……それに生活にも少し困っていらしたようすし。」

「え、なんでそんなこと知ってるんですか?」

「姫様とのお話で口を挟まないで!」

「すみません!」

「い、いえ構いませんよ？ベアトも、ね？……こほん、実は今回の件に関しまして、誠に勝手ながらミスター・キリユー、ミスター・バンジョー御二人の事をそのドロシーと共に一通り調べさせていただきました。」

「え……ええ!？」

まさかの事実には驚きを隠せなかった。

いや、正直この流れだと不敬罪で首チョンパされるんじゃないかと思っていた。

が、まさかのプリンセス側からこっちのプライベート侵害のカミングアウト。

ドロシーの方へ疑いの目を向ければ、そこにはわかりやすく口笛を吹く彼女の姿が。

マジですか……

「あなた方がこの国に来てから少なくとも今日で10日。御二人がこのロンドンで暮らしていたのはこちらの御店ですね？」

そう言つて、プリンセスは俺と万丈が倉庫を貸してもらっている店の写真を見せてきた。

紛れもない、俺と万丈が好意で倉庫を貸してもらっているあの店である。

「そうです……けど。」

自分でもどうかと思う程に掠れた声に、プリンセスは力強く頷く。そういえば、彼女たちが万丈をここまで連れて来るのにどうしたのかと考えると、自然とこの店の存在に行きつく。そういうことだったのか。

その傍らでベアトリスが心配そうな眼差しで俺とプリンセスを交互に見つめているのが視界の端に映った。

……一体、彼女は俺に何を伝えようというのだろうか。

「では、次にこの男についてご存じありませんか？」

二枚目に見せてきた写真には、深緑色の鍔付き帽子を被ったどこにでもいそうな男が写っている。

だがその男は——

「あれ……この人、前に絵のモデルになってくれて言われたような……」

数日前、戦兔はロンドンのとある広場で仕事探しの息抜きに散歩したことを思い出す。その時、その写真の男とそっくりな男に声を掛けられ、ハンサムだなんだと持てはやされ気を良くして小一時間時間を共にした記憶があった。

「……繋がりましたね。」

「……はい？」

「ミスター・キリユー、この男は絵の練習の為にあなたの顔を写し取ったではありません。あなたの顔を使って、あなたに殺人の罪を着せるために写し取ったのです。」

「——じゃあまさか!!」

「はい。」

「この男こそ件の連続強盗殺人鬼——『マスクメイカー』です。」

『マスクメイカー』……………」

こいつが、俺の顔と名前を使って強盗殺人をしたっていうのか？  
こいつが、俺を死んでも足が付かない使い捨ての道具として利用した、張本人なのか……………？

「はあ……………最悪だ」

まさか一度絵のモデルになっただけでこんな事態を引き起こすとは思わないだろ。

しかも殺人鬼相手にノリノリでカッコいいポーズなんか取ってしまった。…過去の自分に嫌悪しかない。

こんなことならもっと早めに『仕事』を思い付いとくんだった……………

「心中お察しします……………でもどうか気を落とさないでください。これからは私たちがあなたを全力でお助けいたしますわ」

「そうそう。過ぎちまったことはしょうがないってことで、今は明日からの事を考えな」

「そうですよ！何の失敗もしない人なんていませんし、これからまた頑張ればいいんですよ！ね？」

「アツハハハ！ベアトが言うと言説力が違うね!!」

「…ドロシーさん!?!」

「いやあこいつもさあ？最初の頃は姫様姫様〜！ってプリンセスにべったりで、よくアンジェの足引っ張っては……………」

「わ————?!?わ————!!!」

スパイ少女たちが俺を慰めてくれる。嬉しいけど、途中からベアト



リス弄りに方向転換していったは何故だろう…

でもなんだろうな、彼女らの和気藹々とした賑やかな会話を聞いていると、かつての戦いを共にした仲間たちとの日常を思い出す。俺たちも傍から見たらこんな感じでバカみたいに楽し気で、かけがえのない物として映っていたのだろうか……。

そうだな。彼らとのことを思えば、やはりくよくよしてても仕方がない。前を向いて進み続けてこそその俺、桐生戦兎なのだから。

「——あーはいはいはい！ユーたち落ち着いて！で、で……：：：：：そういや思ったんだけど、俺にこの写真を見せただけで真犯人が分かったなら……：：：：：なんで俺たちはここに連れて来られたんだ？」

収集が付かなくなりそうなドタバタを終了させ、新たに沸いた疑問の解決に取り掛かる。

さっきの簡単な質問で俺への用が済むなら、もう俺たちをここに置いておく理由も、ましてやアンジエが俺の護衛をする必要も無い。……もしかしたらまだこの殺人鬼についてなにか事情があるのではないかと俺は踏んだ。

「勿論それには理由があるわ」

沈黙を貫いていたアンジエが口を開く。

そして何枚かの新聞の切り抜きを俺に見せた。

「マスクメイカーには、殺人の際にあるルールを設けている。それは『強盗殺人を起こしてから48時間以内に、自分が顔をコピーした人間も殺している』というものよ」

見せられた新聞記事には、どれも『逃走中の殺人犯が怪死』といった内容のものだった。

「じゃあ、俺も殺されるかもしれないってことか？」

「事実そうなりかけてたのよ。……あの時、あなたを追っていた警官隊の一人が殺されていたという情報が、さっきここに入って来た」

「……なんだって!？」

「あの場所にいたわね、間違いなく。あなたを捕まえて自分で殺すために」

アンジエが俺の前に降り立ったあの場所に、マスクメイカーが……

「じゃあ俺は、俺を殺人鬼だと思っている警察だけじゃなくその殺人鬼そのものにも狙われてたってことか……」

「流石に同情するわ……するだけだけど」

フォローになってないフォローをしてきたアンジエは用は済んだとばかりに再び椅子に腰を落ち着ける。

「……………万丈を連れてきたのは、アイツも、殺人鬼に狙われてるから？」

「彼があなたを釣るためのエサとして、彼を利用する可能性はかなり高いから」

「……………ありがとう」

「礼を言われる筋合いはないわ。……目的の為に彼を囮として利用しようとしているのは、私たちも同じよ」

「それでも構わない。…守って、くれるんだろ？」

「彼の場合はちせがね」

「なら俺からも彼女によろしく言つとかないとな！」

「……………そう、でも私たちがスパイ。嘘つきなの。あまり信用しない方がいい」

「ふうーん……」

「何よ？」

「本当の嘘つきは、自分の事を嘘つきだなんて言わない。……だって

そうだろう？嘘つきが嘘になるんだから、つまりそいつは正直者ってことだ」

「……つまらない言葉遊びだわ」

「でもホントのことだろう？」

俺はアンジエの方へ歩み寄り、そして右手を差し出す。

「……俺は君を、君たちを信用する。これはその証拠だ」

その手をアンジエはじっと見つめ、

「そこまで言うなら……」

ゆっくりと、その右手を重ねた。

「改めまして、天っ才物理学者の桐生戦兎だ！よろしく、アンジエ！」

「……よろしく」

少し、ほんの少しだがアンジエの顔に笑みが広がったように見えた。

俺も釣られて笑えば、ぷいっとすぐにそっぽを向いて紅茶らしきものを飲み始めてしまったが。

……でも、ちゃんと通じたようで安心した。

この国でもやはり、握手はグローバルな挨拶なようだ。

「おっと、あたしらも忘れんなよ？よろしくな、セント！」

「もちろん、よろしくー！」

「ふふん！よろしくお願いしますー！」

「ああ、よろしくー！」

「フフフ、では私も……」

「はい！よろし……あれこれ普通にやつちやマズいパターンじゃな

い?」

ドロシーとベアトリスがずっこけた。

「おいおい……」

「いや、その通りですね! いい機会ですからここできちんとお作法を……」

「よろしくお願いいたします♪」

「姫様あ!」

なんとプリンセス直々に先制されてしまった。しかも両の手で。

「こういうの、ちよつと憧れだったんです♪私も公務以外で殿方と触れ合うのは久しぶりなので…あら、なんだか胸の辺りがドキドキと…」

「ブふおっ!」

「うわアンジェ!」

いやいやいやお転婆が過ぎますってあなた……

ベアトリス石になつてるしアンジェが何故か某探偵張りの吹き芸を披露してるし……

こつちももう冷や汗が止まらないっす…

「……は?! い、いけません!! いけませんのですよ姫様!」

あ、戻った。

「ほら! もう挨拶は済んだんだからさっさとあっち行っててくださいよ!!」

「御意。」

触らぬ髪：じゃなかった。神に祟りなしとも言おうし。もうこころで女の子は女の子同士でワイワイしてもらいましょう。部外者は部外者同士でつるんできます。

「あ、と：：そうそう。あんたら二人とも、今日はここで寝な」

「え、いいの？」

「当然さ。護衛対象の世話も任務の内だからな」

「万が一のことがあると考えて、私とちせで就寝中も周辺を見張っておくから安心するといいわ」

「仕方ないのでこのお部屋を貸してあげます。：：：汚さないでくださいよ？」

「そりや勿論。ホントに色々、ありがとな」

そうかそうだった。今はあの店に帰れないのだから別の眠る場所を探す必要があるのだった。

ここは彼女らの厚意に甘えるでしょう。

「と言いましても、もうミスターバンジョーはとっくにお休みになられてましたね」

「え!?!……うわマジじゃん!!」

畳の方に首を向けると、なんとそこには和敷布団に包まれてすやすやと眠る万丈の姿が。

うわ、めっちゃいい寝顔……ってちせさんそれ何弾いてるの？三味線？安眠効果がある三味線なの？

「かあー……かあー……」

「ていうかアイツ：：シャワーとか浴びてました？」

「うむ。そこは安心せい、こやつには身も心も清めてから床に就かせた。今宵はお主も疲れたであろう、ゆるりと過ぐすとよい」

「はあー……優しすぎるう」

あ、やばい、泣きそう。

つていかんいかん、気を抜きすぎちゃダメだ桐生戦兎！ここは大人の男として、毅然とした態度で…

「……朝食は、何がいい？」

「は!?……アンジエ、さん？」

『『さん』はいらない……オムレツなら自信あるんだけど、良かったら、食べる?』

「……いただきます!!」

決意が籠っていた箸の俺の涙腺は秒で決壊した。

そうしてプリンセスとドロシー、ベアトは女子寮に一旦帰ると言うつて出ていき、残る俺たちはこの部屋で夜を共にした。

~~~~~

「ああー……っ!!」

朝食後、アンジエの作ってくれたオムレツによる心地いい満腹感を  
楽しみながら新聞を読んでいたら、突然万丈が叫びだした。

「何だい万丈くん、そんな推しアイドルの生放送を見逃したドルオタ  
のような声を上げて…」

「いやそれ一海じゃねーか……つてそれどころじゃねえよ!!俺今日午  
後から試合だったんだよ!!」

「え?……ああーっ!!?」

そうだった!!

今回のドタバタですっかり忘れてた!!

昨日と今日は万丈と別の町のチャンピオンとの交流試合だったのだ!

「あら……あなた達まさか自分の予定も忘れてたの?」

「あ……そ、そーなりますね、はい」

うわめちやくちやハズいなこれ……うう、そんな可哀想なものを見るような目で見ないでくれ

あれ、でも今の状況で外に出るのはマズいんじゃない……

「まあ、そんなことだろうとは思っていたが。……これを使い」

「お……え?」

と、突然ちせから手渡されたのは、時代劇でよく見る虚無僧が被る編笠のような物だった。

「おい、何だそれ?」

「何だろう……覆面か?」

「そのような物だ。……まさか桐生、お主外を出歩くのにその顔を隠す気が無かったなどとは言えないな?」

「え……外出ていいの!?!」

まるで最初から俺たちの行動を把握していたかのように、準備万端と言った体で話を進め始めるちせとアンジエ。

この俺の顔による殺人が起きてからのこの短い間にそこまで調べ上げていたのか……。

「変にあなた達を長く引きこもらせたら、逆にヤツを刺激させて、無差別に人を殺し始めるかもしれない。ならいつそ、こちらから先に撃つ

て出る方が得策じゃないかしら?」

「それにヤツの殺しは今までの傾向からして、必ず夜に行われていた。万丈を狙い、白昼堂々人目の多い『ぼくしんぐ』の試合会場で動く可能性は低い」

「確かに、俺としてもこんな事件はさっさと終わらせて日の当たる場所をこのままの顔で歩けるようになりたい……でも」

「ああ、折角応援に来てくれる町のやつらを危険に巻き込むようなことはできねえ」

俺たちのせいで誰かが傷つくなんてことは、もう金輪際ごめんだ。

「……気持ちは分かる、だが今日の試合を中止させるのはできぬ」

「悪いけどこつちも忙しいの。私たちもこの事件をできるだけ早く終わらせることを優先している。妥協は無しにね」

「妥協じゃねえ!!」

「危険に曝されるのは俺たちだけで充分だ。俺たちは何も知らない人たちを態々事件に巻き込むのは……!」

「巻き込ませないわ」

そう言つてアンジエが懐から取り出したのは、あの時も見た、ネジのついた球体だった

「あん?」

「それって……」

『Cボール』……国家の重大機密だから詳しいことは言えないけれど、これがあれば私は重力から解放され、そして対象を開放させることができる。桐生戦兎、あなたは実際にそれを体感したことがあるでしょう?」

「重力……そうか、そういうことだったのか!!」

だからあんな人の限界を超えたような動きや、空を飛ぶような跳躍



ができたのか！

確かに、あの跳躍が宇宙飛行士が月面でやる高いジャンプのような動きの延長だったとすれば、納得がいく。

まさかこんな所で新しい科学技術に出会えるなんて!!

「それちよつと詳しく」

「絶対ダメ」

「お願い!!せめて見るだけ!!見るだけだから!!!」

「だからダメだったら…『好奇心は猫を殺す』という言葉を知ってる?下手な事するとあなた、死ぬわよ」

「あ、死……」

「こんな形で任務失敗なんて絶対ごめんよ」

「はい……」

仕方ない、今は諦めよう。これから自力で調べればいいことだしな。

「あの目……なるほど、確かに学の者の目じゃ」

「あ、わかる?ああなるとめんどくせえんだよな…」

いや、それよりも

「なんで今それを見せてきた?」

「これを使えば、あなた達の心配をほとんど解消できる。私たちはプロよ。無駄な犠牲者を出すことなく、任務は遂行する」

「我らは護衛じゃ。護衛とは対象の安全は勿論、その生活や大切な物も同時に護り通すもの。決して、お主らの悪いようにはせぬ、安心せい」

「信用、してくれるんでしょう?なら、私たちに任せて。あなた達は、普段通りに過ごせばいい」

……そこまで言われてしまうと、俺も弱い。

彼女たちを信用すると言ったのに、俺からそれを破ることを言ってしまうっていた。

でも俺は危険に曝されるのは俺たちだけでいいとも言った。

だがその危険を彼女らはそれが任務だと言って、代わりに背負おうとしてくれている。

強い瞳で、俺たちも町の人も護ると言ってくれる。

俺は……

「そうか……わかった。頼む」

「万丈!？」

「俺たちはここにきてまだ日も浅えしこのことを何も知らねえ、できることも少ねえ。ならここはコイツらに任せてみてもいいんじゃないか？何もかもしよいこもうとすんのはたまにはやめてみるよ、戦兔」

「……………そうか」

俺たちは護衛されるんだ。その自覚が、俺には全くと言っていいほど足りてなかったじゃないか。

「そうだよな」

俺は懐の『ラビットフルボトル』を握りながら、万丈の言葉を噛み締める。

この国での俺たちは『仮面ライダー』じゃない。

護る側じゃなく、護られる側だったのだ。

彼女たちを頼ることに、俺を何を躊躇していたのだ。俺がきちんと信じ切らないで、彼女たちが俺たちを真に護ってくれるはずがない。俺たちの大切なものを護ってくれるはずがない。

「アンジエ、ちせ……改めて、俺たちの護衛をお願いします」

「護り通すわ。絶対に」

「ああ！」

「頼むぜ!!」

アンジエとちせの瞳の輝きが、また一段と強くなる。

万丈も大きく笑いながら『あ、そういやグローブもねえ!!』と自分の心配を始めた。

俺はそんな万丈に『会場で借りればいいだろ?』と提案して、渡された編笠を装着する。

「——じゃあ、行こうか！」

そして俺は彼女たちに向かって、できるだけ気安く呼びかけた。

「行くぞお前らアアアアア!!! 『負ける気が』アア!？」

「「シネエゼエエエエエエエエエエ!!!」」

事件開始から翌日の今日、昼下がり、今まさに我らがスター”Dr agon☆Banjo⇒”（命名：万丈）と隣町からやって来た同じくスターボクサー、”ベンジヤミン・ザ・バッドニユース”の試合開始のゴングが鳴った!!

「調子づいてんじゃねえぞガキヤア!!! テメエ人間の言葉でしゃべりやがれチビザルア!!!」

「そっちこそ日本語喋れやデカゴリラア!! オラいくぞオラアア!!!」

「「ワアアアアアアアアア!!!」」

「うおお!? なんとという轟音!!! 『ぼくしんぐ』とはここまで人を熱に狂わせるものなのか!？」

「ほらちせ、私たちも応援しましょう。静かにしてたら逆に浮くわよ」  
「うむ、しからば。……すう」

「頑張「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!  
!!!」  
!!!」

折角来たんだ。編笠がなんぼのもの、自分の声が耳に埋まり切るほどの声量で、万丈にエールを届ける!

勝て!! 勝つんだ万丈!!!

お前の拳に、俺たちの未来が懸かってる!!

お前のライダー魂を見せてやれ!!!

「オオルアアア!!!」

「フンヌ!?……オラ全然効いてねえぞアン!!そんなもんかドラゴンつてのはよお!?オオラア!!」

「——シユツ」

「(消えた)!?」

「——ツリヤア!!」

「ツツツグウウ!!」

(なんだ今の動きは!?まるで見えなかっただど!?……俺が!?)

「ツツラア!!」

「ヌウオ!?……ツチイ!!」

(どうなってやがる……俺あ一瞬だってアイツから目を離さなかった……だのに、何時の間にか俺の視界から消え、顎を狙える体制に入つてやがった!!)

「オラどうした来いよビビってんじやねえぞオ!!」

(『避ける』と『狙い澄ます』——まさかコイツは、あの一瞬でそれを同時にやってのけたつてのか!?)

「なんと!万丈め、あやつ無刀で居合の型を繰り出してきおつた!」

「……どういうこと?」

「万丈は相手の拳が放たれた刹那、左足を後ろに引くことにより自らの重さに任せて腰を落とし、さらに、それを発条ばねとすることで拳に気を集中させたのじゃ」

「なるほど……その後は左骨盤を前に突き出すように上体を捻り、発条とした左足で地面を蹴ることで力を貯めた拳にさらに加速力を乗せることで、攻撃直後の隙をついた効果的な一撃を放てた。そういうことね」

「うむ……正しく居合、見事じゃ。」

(流水のように滑らかで無駄のない脚運びと拳筋、それに戦闘における的確な判断力とスピード……普段のどこかふわふわした雰囲気からは想像できないこの類まれな戦闘力……万丈龍我、万が一彼がプリンスの作り直す新たなアルビオンの障害となるか、逆に大きな助けとなるかは……今はまだ判断できないけど、この任務が終わっても注意しておく必要があるそうね)

「いいぞ万丈オオ!!ファイジックス!!今超ファイジックスだった!!もつといけフオオオオオ!!」

「って何の応援よそれは…」

(クソ!!だがごちやごちや考えても仕方ねえ!!ボクシングは殴ってぶつ倒す!それが全て!!そんな手品なんざ押し切ってくれるわ!!)

「オリヤオリヤオリヤオリヤアアア!!」

「む、ベンジャミンもまだあれだけの動きができたか!なんという気骨!あの気迫と動き、まるで歴戦の力士のようじゃ!!」

(ちせ、楽しんでるわね……流石は日本人、サムライの血が騒ぐのかしら)

「ほらほらアンジェもいい所なんだから盛り上げて盛り上げて!!ほら!!ほおら!!」

「分かった、分かったから!はあ…」

(桐生戦兎は……どうなのかしら。彼とつるんでる以上、ただの自称天才物理学者とは思いにくいけど……)

『本当の嘘つきは、自分の事を嘘つきだなんて言わない。……だってそうだろう?嘘つきが嘘になるんだから、つまりそいつは正直者ってことだ』

(でも、今はまだ信じてみてもいいかもしれない)

「きやあー!!バンジョー逃げてえー!!」

(疑うだけじゃない、信じることだって大切だって、あの子が脚を痛めてまで教えてくれたんだもの。)

「うおはえ!?!へっ!でもそんな連撃はア」

「オツル……ブア!?!」

「大抵脇ががら空きになるんだよオ!!ツラアアア!!」

「グウオアアアアアア!?!」

(なんで、おれのパンチが当たらねえ!?!なんでこいつは避けられる!!なんで……そこまで拳を恐れず、俺の懐に近づけやがる!?!)

【ベンジャミン……おめえにはあるか?守りたいもんが】

(!?)

【俺にはあるぜ、たくさん。両手で数え切れねえほどにな。】

(これは……まさか、バンジョーの拳から伝わってきている、のか?)  
【おめえのパンチの重さは半端ねえ。でもそれは自分の金の為、お前のためだけのパンチだ。それだけの拳じゃ、俺は倒れねえ。】

(バンジョーの心が言葉じゃねえ、感情で理解できる……そうか、この小せえ拳がこんなに重てえのは、きつと、いつもこんな気持ちを含めて撃ってやがったからなのか……!!)

【この世で一番強い拳ってのはな、『誰かの為に振るった拳』なんだよ。誰かを守るために、見返りすら求めずひたすら精一杯戦って振るった拳なんだよ!!お前からこの国の格闘家にも、そんな拳を振るってほしいんだ。】

(チクシヨウ……勝てねえわけだぜ……)

【よろしく頼むぜ!!】

「ウオリアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

「ブアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

(かっこよすぎだぜ……ドラゴン……バン……ジヨー……)

万丈の拳に、ついにベンジヤミンは沈んだ。

「ウイナアア!!バン、ジヨオオオオー!!」

「ツシヤアアアアアアアアアア!!」

「ニツワアアアアアアアア!!」

会場は笑顔と歓声に包まれた。

ベンジヤミンも、そのサポーター達までもが笑顔で両者の健闘を讃える。

そして万丈とベンジヤミンが固い握手と抱擁を重ねた。

「お前と戦えたことは俺の一生の誇りだバンジョー、お前ならもつとスゲエボクサーになれる!」

「俺もお前みたいが強えボクサーと戦えて最高だった!!へへっ、おめえのパンチすっげえ速ええし重かったぞ!!」

「へっへ、お前ほどじゃねえさ」

「お、そうか？」

「ああ！つたくチビのクセに何食ったらそんなに強くなれたんだよ？」

「おう！やっぱプロテインだな!!」

「タンパク質？……おお肉とか魚のことか!!いやあやっぱそれしかない!!ガツハハハハ」

「うおやった！プロテインで通じちゃったよ!!わっははははは!!…あれ？この時代にプロテインあったっけ？」

バカがバカなことを言ってる間も歓声は鳴り響き、様々なプレゼントが両雄に投げ渡される。

二人はそれらを丁寧に取り上げながら笑い合い、腕を固く組み合う。

今日の興行も、大成功のままにその幕を閉じた。

「どおーだ戦鬼!!今日も勝って来たぜえ!!」

「おう、お疲れさん。ほら水」

「はあ、相変わらずドライだねえ、つたく……つかーっ!!水うめえ!!」

(こ、この男、試合中はあんなに盛り上がりつつといっていざ帰ってきたらこの態度……)

(面と向かって喜びを見せるのが恥ずかしいんじゃないやろう、ほっといってやれ)

タオルで全身の汗を拭きながらがぶ飲みする万丈を横目に、俺は諸々の手続きを済ませて帰り支度を始める。

今日のファイトマネーはいつもよりも大分厚く、これなら向こう2週間は特に金に困ることなく生活できるだろう。

……そうだな、これを元手にタイプライターなどの俺の仕事道具を買い揃えられるかもしれない。

この一件が終わったら、万丈に相談してみよう。



「あー…戦兎お、なんか腹減らね？」

「お、確かに…：うん、そろそろいい時間だな。ちよつと早いけど夕食にするか。アンジエたちはどうする？」

「毒を入れられる可能性も考えて、私たちが用意する食事以外摂らないでほしいところだけど…：まあどこか食べに行くならそれでもいいわよ」

「うむ、我らが毒見すればよい話だしな」

「ど、毒見い!？」

「ああ、そういうこともあるのか…」

そこまでの発想はできなかつた…：やつぱりこの時代でスパイをやってるアンジエたちはそういう経験をたくさん積んでいるのだろう。俺たちの価値観で勝手に行動するのは慎んだ方がいいな。アンジエたちの提案に乗っておくのが賢明だろう。

「んじやあの部屋に戻ってからにすつか？」

「そうだな、そっちの方がいい」

うん、万丈も大体俺と同じ考えのようだ。こいつは確かに普段は大が付くほどの筋肉バカだけど、こういう生命に関わる真面目な状況では驚くほどに頭のキレが良くなるのだ。そこには全幅の信頼が置ける。

「あ、そうだ！その前にあの店寄つとかねえと！俺たちの『荷物』もあつちに移動させねえと!!」

「!!」

そうだ!!ボトルとドライバーがまだあそこに置いたままだった!!!

マズい…：この町じや盗難なんて日常茶飯事だ！もしかしたら無くなつてるかもしれない!!

「悪い、一旦俺たちが住んでたところに戻っていいか？」  
「何か忘れ物？大した物じゃないならこちらで用意しておくけど」  
「いや、どうしても俺たちで取りに行かなきゃいけない物なんだ。代えなんてきかない色々と事情がある物なんだよ……頼む」

二人に頭を下げる。アンジエは少し見つめた後、懐中時計で時間を確認してまた俺の方を向く。

「いいわよ。」

「……ホント!?!」

「私も電話交換局に行つてドロシー達と一度連絡を取ろうと思つてたところだし、あの店の辺りなら確か近くにあつただろうから、あなた達に荷物を運び出す時間程度なら作ることはできるわ。」

「ありがとう!」

「ただし、その間はちせの目の届くところにおいてもらう。それが条件よ」

「もうそろそろ日も沈む。ヤツが活動を始めるころ合いじゃからな」

「十分だ!助かる!」

「そう、ならいいけど」

やった!これでライダーシステムを俺たちの手元に置いておける!

「話が終わったなら、さっさと移動しましょう。ここだと万丈くんのファンに囲まれて身動きが取れなくなる」

「ああ!行けるか万丈?」

「おう!」

「うむ、では行こう」

そして町の人たちの笑い声の中を通り過ぎ、俺たちは住まわせても

らっていたあの店に向かった。

「しかしお主、一体どこであのような技を身に着けたのだ？」

店へと向かう道すがら、ちせが万丈に問いかける。

剣の達人らしい彼女は万丈のテクニクに興味を持ったのだろうか、訝しげにじつとこいつを見つめる。

「え？普通のジムだけど」

「鬺武じむとな？ううむ、初めて聞く流派じゃ」

「ああ違って！えっと…流派とかじゃなくて、道場の名前なんだよ！」  
「ほう、道場か！なるほど、国に帰ることがあれば一度探してみるか。  
あのような実践的な武術を修められる場所は日ノ本では今日日少ないからな…」

いやないから明治の日本に！……とは流石に言えないのか万丈は口をまごつかせる。

ボクシングの歴史に詳しいわけでは無し、日本に伝わった次期は分からないがタイムパラドックス的なヤツが起きるとも限らないな。これ以上この話題を続けるのは危険かもしれない。

「お、あそこじゃないか？電話交換局」

「そうね。じゃあ私は行ってくるから、あの店で待ち合せましょうか」  
「了解した。……む、店が見えたな」

ホントだ、この道からも行けたんだな。

「じゃあまたな！」

「ええ、気を付けて」

「んじゃ！」

アンジェが別の道へ進み、俺たちは店の入り口に向かった。  
昨日の昼までいた筈なのに、何だかすごく久しぶりに感じる。色々  
あったからだろうか。

あ、そうだ。店長にも色々説明しないと！

きっと目え丸くして驚くだろうけど、人のいいあの人の事だし、  
笑って済ませちゃいそうな気もするな。

「ただいま……店長いる〜？」

ドアのベルが鳴る、しかし

「……………あれ？」

『いらつしやいませ』が聞こえない。

それどころか、普段のこの時間は賑わっているはずの店内に、  
客が一人もいなかった。

「おい何でこんな静かなんだ？今日って定休日じゃねえよな？」

「ああ……そうだけど……」

「！——妙な気を感じる。二人とも、私の後ろへ」

「……何？」

刀の鍔に親指を乗せながら、ちせが真剣な面持ちでそう告げる。  
確かにおかしな気配だ……こんな雰囲気は、普通は有り得ない。

……普通じゃないってことなのか。これは

「なあ、なんか聞こえねえか？」

「……………え？」

「いや聞こえんだよ！なんかこう……鉄かなんかを物に擦りつけたよ  
うな……」

「私にも聞こえたぞ。これは……」大きな刀を研いでいるのか？」

まだ聞こえていない俺は目を閉じ、耳を澄まして脳的感覺処理を聴覚に集中させた。

——キュイイイイ……キュイイイイ……

「聞こえた………厨房の方からだ!!」

「早まるな!!私が殿を務める、お主らは後に続け」

「………わかった」

ちせの言葉に従い、俺たちは厨房へとゆつくり歩を進める。

俺は脳裏に浮かんでくる最悪の想像を懸命に払拭しながらただ厨房への注意を続けた。

——厨房に、着いた。

「おお、やっと来たか。遅かったじゃないか——『俺』？」

全身に殴打痕を付けて厨房の床に横たわる店長。

そこら中に散らばった調理道具と食材たち。

そして——それらの中心に立っていたのは、紛れもなく『桐生戦兔』だった。

「………マスク、メイカー………!!」

「さあ、”僕”に刻まれてくれ」

死神の鎌が、首筋に向け走った。

「させるものか!!」

首筋に迫った凶刃を、ちせが刀で受け止めた。衝撃で被っていた編笠が何処かへと飛んでいく。

鈍い金属音をかき鳴らしながら、紅い火花が二人の間に飛び散った。

「ハハア、硬い!!いい刀だなア!」

「…ツ、ヌウ!!」

上げ受けていた大鎌を上方へ飛ばし、マスクメイカーに蹴りを入れて下がらせる。

「ちせ!!店長が!!」

「わかっておる!!しかし、この間合いでは…!」

「グウ…フフ、まさかボディガードを雇ってたとはなあ『俺』?」

「俺って言うな!!殺人鬼のくせに!!こっちはお前のせいで腸煮えくり返ってんだよ!!」

「こんのパクリ野郎が!!戦兎はここにいるコイツだけだ!!てめえなんぞが『桐生戦兎』を名乗るんじゃないやねえ!!」

「ハ!ブチギレちゃってえ…ま、それも今の内さ。自分の顔したヤツに刻まれる恐怖つてのを、たっぷり味合わせてやるよオ!そら!!」

マスクメイカーが満身創痍で横たわっていた店長をこちらに投げた。

「ぐわッ!?」

「ぐ!まずい!!」

「ハア—ッ!!」

店長で視界をさえぎられた一瞬、マスクメイカーが大きく距離を詰めていた。

……ダメだ！避けられない！！

「…させぬと言ったアアア！！」

「ぐおあ！！」

が、ちせが床に転がった大鍋をヤツに向かって投げる。

それがクリーンヒットしてヤツを転がせることに成功した！

「今じゃ逃げろ！！」

「ああ！！」

「助かる！！」

ヤツがひるんでいる隙を突き、店長を抱えてすぐさま厨房から離脱する。

「早く、医者に診せねえと！！」

「くそ！！何処だ病院！！」

「あー！！時間がねえ！！」

「……………バン、ジョー……………セント…？」

「店長!?今はしゃべんな!!」

「ハッハ……………無事、だったのか、セント……………もしかしたら……………お前もアイツに、やられたんじゃないかと……………」

「しゃべんなって!!!話はあとでたくさんするから!!」

「お前が……………殺しなんか……………するわきやねえって……………信じてたぞ……………きつと、よく似た誰かの、仕事だって……………いつも誰かが困ってるのを助けてるお前が……………強盗なんて……………するわきやねえって……………」

「そんなこといいから!!」

「町のみんなど……………ポリ公の所に行って……………何かの間違いだって、言ったんだけども……………ハハ、悪い、信じてもらえなかった……………」

「頼むから……静かにしててくれよ!!」

涙が、溢れてくる。止まらなかった。

俺の知らない所で、色んな人が、俺の為に動いてくれていた。

それが、俺には……

「泣くなセント……俺の事はいいから……もっと遠くに、逃げ……」

「店長?……店長オオオオ!!」

「いや!!まだ脈はある……痛み ショックで気絶しただけだ……」

「クツソ……なんで……!!」

万丈の全身が怒りで震えているのが伝わる。

俺も同じ気持ちだ。もう誰も、俺たちのせいで危険に巻き込まないと誓ったのに……結局大切なものを傷つけさせてしまった。その自分への怒りが俺の中でも燃え滾っている。

「病院を探そう!きつと近くにある筈だ!!」

「オオ!!」

「——待って!!」

声が出した方へ目を向けると、そこにアンジェがいた。

「迂闊に動かないで。その人なら私が知ってる病院へ連れて行く。私の目の届かない所で勝手な行動はしないで」

「んなこと言ってる場合かよ!!」

「万丈!!……わかった。俺たちも行く」

「当然よ。……その人、マスクメイカーにやられたのね」

「ああ、今ちせが足止めしてくれてる……あんまり時間ねえぞ」

「わかったわ。ちせならきつと大丈夫……こつちよ」



アンジェの案内に従ってたどり着いたのは、町はずれにある小さな診療所だった。

「ここならワケアリの急患も融通が効くわ」

「手続きは任せていいか？」

「大丈夫」

そして店長をベッドに寝かせ、俺は今日のファイトマネーのほとんどを受付の人に渡す。

「この人を、よろしくお願いします」

「あ、ちよつとお兄さん!?いきなりこんなに…!」

「戻ろう。今度は俺たちがあの店を護る番だ」

「……オオ!!」

万丈が拳を鳴らして走り出す。俺たちもそれに続き、ちせがいる俺たちの“家”に向かった。

「フン!!」

「ふツ、やあ!!」

「おおつと！ハァー、しつぶといなあ…早く『俺』を刻みたいのに…」

「黙れ下郎!!貴様のようなヤツがいるから…!!」

「——ちせ!!」

「お前たちなぜ戻って…アンジェ!」

店に到着すると、店内は客席も含めてすべからく荒れ放題だった。戦闘による被害で椅子やテーブルは原型を留めている物は片手で数えられるほどしかない。

「おお！どこに行ったかと思ったぞ『俺』！さあこつちに来て！一緒に

楽しい時間を過ごそう！」

「万丈……」

「おう、倉庫は……くそ、アイツに邪魔されて通れねえ」

マスクメイカーを無視し、俺たちは『アレ』がある倉庫への道筋を算段したが、どうしても進行ルート上でヤツの妨害に遭ってしまう位置だった。このままでは動けない。

「私も戦うわ。その様子だと、相当手強い相手なようね」

「ドロシー達と連絡はついたのか？」

「こういう時のためにこの店に合流するよう言っておいたけど……すぐには来れないでしょうね」

「そうか……」

ちせは再び剣を構え、マスクメイカーをその鋭い瞳で見据えた。

「上等よ。こうしてお主と再び共に戦えるだけでも、この身、力が漲るぞ。」

「そう……恥ずかしいけど、私もよ」

アンジエはメガネを外して俺に預ける。……彼女の瞳もまた、闘志で燃えていた。

下手に動いて二人の足を引っ張るわけにはいかない……ここはヤツから目を離さずに、ヤツから攻撃されない位置で身をひそめるしかない……!!

「ここに隠れるぞ」

「ちくしよお、それしかねえか……」

(ちせ、ヤツの鎌は脅威だけど、逆にそれが弱点でもある……あの大きさの刃物をこのレストランの客席で無暗に振るえばどうなるか……あとは分かるわね?)

(そういうことか、了解した。)

「お、作戦会議は終わったかい？それじゃあ…」

「!!…行くわよ!」

「応!」

「真っ赤な”お花”にしてやるよオ!!」

マスクメイカーが跳躍、アンジエの方向へ鎌を振るった。

「くッ!」

アンジエは懐から取り出したCボールを操作、緑光に包まれ右方向への回避と同時に半分に割れている床の木製テーブル片をヤツに投げつける。

「同じ手を通じるかア!」

しかしマスクメイカーはテーブル片をそのまま切断、機械音が響く中を大量の大鋸屑が舞う。

「せえやつ!!」

「づおッ!!」

視界が削がれたヤツの死角へ、ちせが刃を振るう。だがヤツの鋼でできた右腕に弾かれ、脇腹を切りつけたものの致命傷とはならなかった。

「おおー痛え…流石に二対一じゃ分が悪いなあ…」

「仲間でも呼ぶ気?」

「いやあそれほどじゃない…どうした、これで終わりか?」

「は!!」

「うお!!ハハア、なんだよ!折角人も増えて盛り上がってるんだし楽しんでまないのか?」

「あなたと違ってこっちは仕事なの。さっさと倒されてくれるかしら…人のまねしかできない、おさるさん?」

「…『俺』を刻む前に、まず君の悲鳴を聞きたくなった…な!!」

「ふッ!!」

「大人しく刻まれろお!!」

「ほらこつちよ。ほら、ほら」

キレたマスクメイカーの攻撃をサーカスの曲芸師もビツクリな身のこなしで避け、拳銃で動きを牽制しながらヤツの視界前方の位置を保ちながら店内を移動するアンジエ。

アンジエらしくない煽り文句とこの何処かへと誘導するような動き方…まさか、

「うおら……あ!?!」

「ふ……」

マスクメイカーの鎌が、店内の席を区切る囲い柱に深く食い込む。ヤツの動きを、拘束した!

「今よ、ちせ!!」

「——ちえすとおおお!!」

ちせが原型を残していた数少ないテーブルを台にして跳躍、唐竹割りの構えだ!

これでヤツの右腕を切断——

「…そんな!?!」

「マジかよ……」

「おいおい——誰が鎌は一つしかないって言った?」

できていなかった。

ヤツの左腕から生えたもう一つの『鋸鎌』が、振り下ろされたちせの刀を受け止めていた。

「フン!!」

「ぬわ!？」

「ちせ!!…ぐう!!」

ちせはアンジエの方へ向け投げ飛ばされ、それを受け止めたアンジエも大きく距離を取らされる。

「色々と小細工を弄して僕を無力化しようとしたみたいだけど…残念、無意味だ。それと…」

食い込んでいた方の鎌も大きな駆動音を鳴らして柱を切断した。

「この程度で封じられるほどこっちの鎌もヤワじゃない、重ねて残念。これで分かったろう!君たちは僕に勝て…」

「最初から勝負なんてしてないわ」

アンジエがそう言った瞬間、店内は煙に包まれた。

ヤツの姿もまた包まれ、アンジエとちせがこちらに戻って来た。

「いつこんな仕掛けを!？」

「さつきちせを受け止めた時に。それよりまずはヤツの鎌をどうにかする手立てを練り直さないと」

「うむ、あれは生半な物で止められないからな。何か分厚い鉄板のような硬い物であればあるいは…」

「そんな切れ味ヤベエのかよ!？」

「硬い物か…」

硬い物といえぱつとすぐに思いつくのは……

「ダイヤモンド…?」

「ちよつと、こんな時につまらない冗談はやめて」  
「ああいや…」

ダイヤモンドなら用意できる。でも……

「戦兎」

「わかってる……使わない」

どんなに人間離れしていた力を持っているとしても、マスクメイカーは生身の人間だ。『アレ』を使うには危険すぎる。下手をすれば命を奪ってしまうかもしれない。……たとえ憎い相手だとしても、その一線だけは越えてはならない。

「お主ら、一体なんの話を……」

「ああクソ、しやらくせええええええええええ!!」

その時、俺たちの頭上でガラスの破碎音が鳴り響いた。

「——ヤベエ!!」

「危ない!!」

咄嗟に俺と万丈はアンジェたち二人に覆いかぶさって落ちてきた大量のガラス片から身を呈して庇う。

落下物が無くなった感触を感じると同時、アンジェたちの無事を確かめる。

「大丈夫か!？」

「バカ!! 護衛あなされる側が護衛私たちを護ってどうするの!？」

「うるせえ！体が勝手に動いたんだよ!!…よし、ケガねえな!？」

「!!……ええい重い！助かったがどいてくれ!!」

「あ！悪い……」

「何だったんだ今のは……ん？」

ふと横の道の方を見ると、何故か地面に刃だけの『小さい鎌』が刺さっていた。

それも一枚や二枚ではなく、何枚も。

「まさか……」

あれが店内からガラスを突き破ってあそこまで飛んでったから、こっちにガラス片が飛び散って来たのか？

店内：マズい!!

「ヴアアアアアアアアアア!!!」

煙幕が晴れ、店内の様子が見えた。そこにいたのは、

「もうゲンカイだ……もう『オレ』じゃなくてもいい……おマエらゼンイン、このチカラでキザんでやるウウウウウウ!!!」

両腕だけでなく、上半身全てを酸性雨で溶けた銅像のような色の鋼で鎧覆ったマスクメイカー。俺をコピーしていた顔はカマキリに似た仮面で覆われ、両肩にも鎌が生え、胸部はミサイルハッチのように空洞になっている（丸鋸はあそこから発射された?）。……いや、上半身だけじゃない!下半身も今まさに金属がアメーバのような動きで体表面を這い、鎧になってヤツを包んでいつている。そして……

「そんな……全身、金属に……」

「あれは……」

その姿は、

『スマツシユ』…?』

”同胞”に、よく似ていた。

「ちらばれえエエエエエエエエエエ!!!」

マスクメイカーの胸部から、再び小鎌が発射された。

「くう、さつきのはあれの仕業か!？」

「こんな…!!あれはもう、殺人鬼で収まるようなちやちなものじゃない!…まるで」

まるで——王国の新兵器か何かみたいじゃない!

「兵器……」

スマツシユ…ネビュラガスを注入されたがハザードレベルが足りずに肉体が変異して理性を失ってしまった悲しい怪物。兵器以上の価値を認められないまま報われずにいる、科学の発展の犠牲者の象徴。

——なら、あいつはどうなんだ?

スマツシユではないとしても、あの両腕に鎌を移植した技術は間違はなく外道の科学。

重ねた罪を抜きにして言えば、あいつも”科学の犠牲者”の一人と言えるのではないか?

「もしそうなら——俺が、アイツを止めないと」

破壊に狂ったアイツを止められるのは、きっと——

「——何ですって?」



「俺がアイツを止める」

「阿保を抜かせ!!お主に何ができる!?!」

「できるよ、戦兔なら」

「万丈まで!?!」

「……やるんだな?」

「ああ」

万丈の問いかけに笑って答える。

「なら仕方ねえ!俺らが足止めすつから取って来いよ」

「ああ、助かる」

気付けば小鎌はもう飛んで来ていなかった。弾切れだろうか。

なら、最早ヤツに俺たちを止められる手段はほぼなくなったということだ。

「あそこ…ガラス割れて近道出来てるから行けそうだな…倉庫」

「ちよつと……さつきから勝手に話を進めないで」

「なあアンジエ、お前は俺を護ってくれるんだろ?」

「ええ勿論。で、何?」

「あそこに見える倉庫に、アイツを止められる道具がある。俺ならそれが使いこなせる。でも今あそこに行くにはちよつと危険だろ?だから、あそこに着くまで俺を護って!ください!」

できる限り、お気楽な雰囲気頼む。こういう時こそ笑いを忘れちゃいけないって、そう思うからだ。

アンジエなら、多分――

「……いいいわよ」

「助かる!」

「任務だからよ……任務じゃなかったら絶対許可しないわ、そんな無

謀な提案」

「ホントにく?」

「引っ叩くわよ?」

「すいません」

ほら、俺を信じてくれた。そういう女の子だって、俺は信じてたからな。

「いいのか、アンジエ?お主らしくもない」

「こんな日もあるわ。臨機応変がスパイの鉄則、でしょ?」

「そうか、ならよい。……万丈、お主の腕が立つのはよくわかっておる。私もお主を全力で護る。それでも…完璧な命の保証は出来かねる。この足止め、命がけじゃぞ」

「わかってるよ!お前こそ”約束”忘れてねえよな?死んだら、許さねえからな」

「ふ、誰に言っておる。この程度の修羅場、飽きるほどくぐって来たわ!」

万丈とちせが互いを励まし合うのを横目に、俺は倉庫へと走り抜ける体制に入る。

「頼んだぞ、万丈」

「おう、任せとけ!」

ドラゴンボトルを見せ、笑う万丈。頼もしい笑顔だ。

今度は俺がお前達を護る。アイツも含めて!

「…ドコだア、ドコにいるウウウウ!!!」

「アイツも限界みたいだな…」

「よし…3、2、1の後に俺とアンジエが『ゴー』でスタートするから、万丈とちせはそれと同時にアイツの足止めに行ってくれ」

「おう！」「了解した。」

「んじや行くぞ3、2、1……ゴー!!」

俺とアンジエはマスクメイカーの咆哮と万丈の雄たけびを聞きながら、倉庫に向け走りだした。

そしてテーブルや椅子、窓ガラスだったもので散らばる道を進み、たどり着く。

「——ここだ」

俺と万丈が住まわせてもらっていた物置小屋、倉庫。

その木箱の一つに何重にもして隠していた、『それ』。

「行こうアンジエ。俺達で、この事件を終わらせるんだ」

俺はそれらの中から今回マスクメイカーを止めるのに最適なものを選択し、取り出した。

「——ウオリヤアアア!!」

「グウウウ：ヴァアアアアア!!」

「ハアア!!」

「おマエ、ウザいんだよオ!!」

「ぐああ!!」

「ちせエ!!」

倉庫から出れば、万丈とちせがボロボロになって戦っていた。

全身をあざ塗れにしながら、大事そうにしていた刀をひび割れさせながら、

俺とアンジエに近づけないために、必死に。

——ありがとう。

今はそれだけを思い、手にした『それ』を握りしめた。

「…………ぐおツ!？」

アンジエがマスクメイカーの背中を撃ち、俺たちに注意を向かせる。

「へ、来たか…………行けエ！戦兔オ!!」

「ハアアア…………『オレ』エ…………『オレ』エエエエ!!」

「もう”お前”から逃げたりしない。」

笑いながら力を振るうお前から。

それを見逃し逃げ続けた自分自身から!

「そして、救ってみせる!」

そして俺は『それ』を――

『ビルドドライバー』を腰に巻き付けた。

「…………アア?なんだソレはア…」

”俺達”の発明品さ。お前みたいな道を間違っちゃまった奴等のため  
のな!」

懐から取り出した紅と青、二つのボトルを”振る”。

「な…なな、なんじゃ!? 宙にあるふあべつとがたくさん出てきおつたぞ!？」

「ハハ! 久々だつてのにちつとも変わんねえな」

「万丈、これは一体!？」

「ああこれ? なんかよくわかんねえ式」

「答えになつとらん!!」

これは凝縮されている成分エレメントの力を最大限フルにまで高めるために必要なシーケンスだ。

故にそのボトルは、『フルボトル』と名付けられた。

ボトルは栓を開放しドライバーに装填されることでその真価を発揮する。

これらは遠き宇宙より齎された禁忌の力を、かつてある男のイメージした『愛とそれを破壊するモノ』の形に固定したものであり、そして、争いのない平和な世界への懸け橋となったモノだった。

《ラビット！》

「覚えとけマスクメイカー……本当の桐生戦兎は——」

《タンク！》

「ラブ&ピースの人々を護るために戦う——」

——《ベストマッチ!!》

「正義のヒーロー仮面ライダーだ!!」

ボルテックレバーを回し、プラモデルのランナーに似た変身フィールド『スナツプライドビルダー』を展開させる。その中をボトルから抽出された成分が流れ、そしてスーツへと変換される。

「兎と、タンク水槽？ベストマッチって相性もなにも」

《Are you ready?》

傍らにいるアンジエのぽかんとした顔に、俺は笑顔でこう答える。

「ベストマッチは……ベストマッチだ！」

「ええ………ええ？」

そして両腕を、構えた。

「――変身!!」

「ナンだ……ナンナンだそれはアアアアアア!!」

マスクメイカーが突進し、右腕の鎌を放つ。  
しかし、

「……………ナ、ニ……?」

直撃するはずだった鎌は”青い左手”に掴まれていた。そして、

「おお……りやああああ!!!」

”紅い左脚”が膝でそれを根元から打ち砕き、

「カマが……ボクのカムブワアアアア!?」

仮面を割るように、”紅い右拳”がマスクメイカーの頬を殴りぬけた。

《鋼のムーンサルト!”ラビットタンク!!”イエエエエエイ!!!》

舞い上がる煙の中より現れたる紅と青の戦士。その名は、

「さあ、久々の実験を始めようか!」

『仮面ライダービルド』

第49＋1話 ベストマッチする世界

「勝利の法則は……決まった!」

舞い上がる土煙が晴れたと同時に、ぶち折った鎌を足で踏んでおきながら久々のビルドの感触を確かめるべくいつものあれ…右複眼の一部である砲塔を模したアンテナ部をなぞり、閃きの象徴、電球が光る様をイメージしたジェスチャーを決めてみる。

おお、これこれ! いや、やっぱこれがないと始まらない!

…でもまああれだ、今回は純粹な人助けのための変身だ。戦争阻止のためとか地球を守るとか複雑な事は抜きにして今は初心に帰って目の前にいる人たちの為に戦おう。それが、今の俺にできるただ一つのことだからな!

「——ねえ、さっきから聞こえる変な声はな………は?!?!?!?!」

おおすっごい驚き顔………ってあら? 中々そんな、可愛い顔でできるじゃないのアンジエさん?

もしやそっちが素だったりするのかな? 喋り方がどこか演技っぽいとは思ってたけど。

「誰?!」

「あ、どうも。改めまして桐生戦兎です」

いやいやあなたさっきバツチり俺の変身みてたでしょ。うーん、仕方ない。ここはきちんとペコリと腰を曲げてお辞儀して、天才物理学者っぽくアピッとかないといけないか。

「………あ……兎」

「ああうん。そう兎兎、これね複眼ね。よくできてるでしょ?」

「………そう、ね……そうなのね」



俺ビルドの全身をまじまじと観察しながらうんうん、と額に汗を滲ませ頷くアンジエ。

そして一頻り見終わった後、顔の方を見つめて強かな笑みを浮かべる。

「——姿は変わっても、どうやら…」

「……………」

「私がさっきまで共にいた桐生戦兎で間違いないようね。だって…あなたの優しい雰囲気はそのままだもの」

なんだよ、

「へへ……………」

嬉しいこと言ってくれんじゃん。

「な…………ナン、ナンなんだおマエはアアアアア!!?」

「!?!」

おっと、いけない。肝心のマスクメイカーがほったらかしだった。あつちもあつちで俺の変身に滅茶苦茶混乱してるようだな。元々混乱気味だったのが更に顕著になってるし。よし、今の内に…

「——き、桐生は兎ではなく狐であつたのかあ!?!」

ってそつちも混乱してるしい!!

何だよみんな驚きすぎだろ!!そんなに仮面ライダーが珍し…:ああ、いや珍しいのは当然か。人が人の姿じゃなくなるなんてこつちの世界じゃそうあることではないし、そもそもさっきのマスクメイカーが全身金属になった時だってアンジエもちせもびっくりしたもん…:ああいけない、まだ前の世界の常識でモノを考えてるよ俺…:気を付けないと…:

「あー……おい戦兎オ!! さつさとソイツどうにかしてくれー!! こつちは何とかすつからー!」

「あ、おう!! 任せた!!」

「…シツモンにイ…コタえろオオオオオ!!」

「今の俺は『ビルド』、『仮面ライダービルド』だ。そしてそれが、今からお前を”救う”、正義のヒーローの名前だ!…覚えとけ!」

ビシッ!と指さしマスクメイカーに名乗りを上げた後、俺は踏んづけていたマスクメイカーの鎌を持ち上げる。

「いよお〜……おい、しよっ!とお!」

それを鼻をかんだティッシュを丸めるように、刃の部分を潰す形でボール状に圧縮。これで一先ずは誰が触っても安心だ。

「…僕の鎌アアアアア!」

「危険物をそのままにしておくわけがないでしょうが! 刃物を捨てる時はこんな感じに人を傷つけないようにしておく…常識だぞ?」

「ツ……アアアアア!!」

激昂したマスクメイカーが突進してくる。

それを感知した俺は持っていた鎌だったものをアンジエに投げ渡した。

「あー、これ! 持っといて!」

「あ…ちよつと!」

「ツアア!!」

「ほっ」

「ア!」

飛んできた左腕の鎌を左手で受け止める。そして、

「力を借りるぞ…一海！」

《ロボット！》——《Are you ready?》

「ビルドアップ！」

レバーを回転、そして軽快な音楽がドライバーから流れ、青かった半身は金属的な黒色へと置換。

『ラビット』と『ロボット』…ベストマッチでないボトルの組み合わせにより形成される『トライアルフォーム』が一つ、仮面ライダービルド”ラビットロボットフォーム”へと変身した。

「おお、さらに化けたぞ!!」

「——だからスゲエだろビルドは！ああやってボトル変えて、色んな姿にフォームチェンジできんだよ！」

「ほおほお…あの奇々怪々な姿はさながら狐狸妖怪のようではあるが、実際の所は透波すつぱの使うような変化の類であったか。いやお主とい一体のどこの……」

「あー…(やべえ、ちせの日本語が古すぎてわかんねえ…まあ取りあえずは納得したみてえだしだまつとこ)」

「——よっ！」

そして左腕の鎌も、ロボットアーム型の拳…『ディストラクティブアーム』へと変化した左手の強靱な握力により根元から紙のように千切り取る。

「ああ?…アアアアアアアアアアアアアアアアアア!?」

「万丈!ドラゴンを!」

「…おお!受け取れエ、戦兔オ!」

万丈から投げ渡されたドラゴンボトルをキャッチ、装填。

《ドラゴン!》《ロボット!》——《Are you ready?》  
「ビルドアップ!」

かけがえのない仲間たち、『二人のライダー』の力の一部を合わせた力、仮面ライダービルド”ドラゴンロボットフォーム”へと変身する。

「この手で変われ…悪しき科学の象徴よ!」

『ドラゴン』の成分の力の一端、あらゆる物を燃やし尽くす蒼炎を右拳に纏い、マスクメイカーの残るもう一本の大鎌を融解させながら、デイストラクティブアームにより安全性が高いボール状に固め直す。ハザードレベルが上がっていたおかげか何度かドラゴンの成分が入ったアイテムで変身したからか、以前のようなドラゴンボール特有の暴走状態になるような感覚はない。キードラゴンじゃなくてもいけそうだ。

そして、二個目の今度は完全なボール状になった鎌を空中へ投げ、仕上げに別のボトルを取り出す。

《ダイヤモンド!》——《Are you ready?》  
「ビルドアップ!」

トリアルル、”ドラゴンダイヤモンドフォーム”となって高温で落下してくる鎌ボールを『ダイヤモンドボトル』の能力によって、大粒のダイヤモンドへと変えた。

「ほい、ビルド印の大玉ダイヤ…一丁上がり!」

「は……はあああ!!?」

「ナンでだアアアアアアア!!?」

スパイ二人とマスクメイカーが揃って大驚き。こんなことだつてできちやうんだからスゴイでしょう、ビルド。

「(考察どころか、もう驚くのさえ無意味と思わせるほど由来不明で理解不能なデタラメなまでの能力!…なんで、なんであなたがそんな力を使えるの、桐生戦兎!!)」

「よ、よくも…ボクのカマを…アア…アア…」

「えー、気に入らないこれ? ああんな物騒な物よりこっちの方がよっぽど世のため人のためになるのになあ…あ! そうそう! ダイヤモンドってえ、硬いから歯医者や虫歯の治療に使うドリルの」

「——なぜだ!? なぜそんなことをする!?!」

はあ……やつと聞いてきたか

「戦兎…そうかお前…」

「万丈、これが今の俺にとっての”勝利の法則”だ…待つてくれ」

「…おう」

「コタえろオ!!」

「ああ…何故って、まずはお前に教えようと思つてき。強い力に溺れるってことがどれだけ空しいことかをな」

「……ならどうしてダイヤなんかツクってみせた!? さっきのロボット? やらそのドラゴンの力で! ボクをイタめつけることだつてヨウイにできたはずだろう!?!…どうしてだ!!」

「確かに、お前の言う通りそうした方が簡単にお前に言うことを聞かせられたかもしれない。でも俺は敢えてそれをしなかった。何故だか分かるか?……人を傷つけることだけが、力の使い道じゃないからだ。」

「ナニ……?…」

——戦いが力の全てではない。

俺があああの戦いを通して、仮面ライダーとして戦い抜いて導き出した、『力を得た者の心得』の一つだった。

「桐生戦兎……ちよつとあなたまさか」

「頼むアンジエ、時間をくれ。これが俺の、ビルドのやるべきことなんだ。」

「こいつに説得なんて無意味よ」

「無意味かどうかはやってみなきゃわからないだろう？それに一々行動に意味を求めてたら科学者は務まらない」

「……勝手にしなさい。」

「させていただきます」

「フン……」

マスクメイカーから政治家の汚職の証拠の在りかを聞き出したアンジエ側の目的を阻害するわけではない。むしろ説得により彼の心を開くことが出来ればそれを円滑にできるかもしれない。それをアンジエも理解してくれたようだ。

「なあマスクメイカー……お前の鎌だって、破壊以外のずっと誰かの役に立つ使い道があった。例えば……伐採するのに人も時間も掛かるような大木を一瞬で伐<sup>き</sup>つたりとかな」

「フザケるな……そんなことシるか！ボクにとってはヒトをキザンでカネをウバうことだけがチカラのズベテなんだよ!!!」

「そつちこそふざけんな!!……そんなわけねえだろ!!人を傷つけることだけが、お前の全てなわけねえだろ!!」

「……ダメれえエエエエ!!」

俺の言葉に耳を貸さず、マスクメイカーは両肩の鎌を鎖鎌として射出、俺に叩きつけようとする。

それを、

《ドラゴン！ロック！ベストマッチ!!》——《Are you rea

d y?》

「ビルドアップ……」

《封印のファンタジスタ……キードラゴン……イエイ!!》

「…ハア!!」

左腕の巨大な鍵を模した装置、『バインドマスターキー』から鎖を射出して封じた。

ドラゴンボトルとのベストマッチによる効果でその拘束力は通常よりも向上し、マスクメイカーの鎌と絡ませて鎌の挙動を完全に掌握した。

「ハナせ!!ハナせえええええ!!」

「あの日、あの公園で、お前は俺の顔をコピーするのに俺に絵のモデルになってくれて頼んできただろ?そして俺はそれに応じてお前と時間を共にした。…さつきまではそれを後悔してた。でも、今は違う!」

「ナニい!?!」

「人を傷つける以外のお前を知ることが出来たからだ!!…あの時、一心に絵を描いてたお前は、優しそうに笑ってただろ!!絵を描くことを、純粹に楽しんでただろ!!」

「!!」

マスクメイカーの動きに乱れが生じ始める。

やっぱりそうだよ。闘争や破壊、それだけが人間の全てじゃない。

こいつにだって、人並みの喜びを感じる心があるんだ。それをここで証明して見せる!

「お前の描いた絵はすごく上手で…俺、見せてもらった時すごく嬉しかった!!お前は、人を笑顔にできるすごいヤツになれるんだよ!!」

「あ……………」

|| || || || || || || ||

『ねえ、シヨーン。あなたの絵は、きつと世界中の人に感動を与えられるわ。』

|| || || || || || || ||

|| || || || || || || ||

『だからいつか、私の他にもあなたの顔も、他の全部も受け入れてくれる人がきつと現れる。』

|| || || || || || || ||

|| || || || || || || ||

『その人にも、絵を描いてあげてね? ……私の分も、あなたはその人と幸せに ……生きて。』

|| || || || || || || ||

僕は、姉様の分も幸せにならなくちや。

——ぶちっ

お金を、画材を買うお金を、稼がなきや。

——ぶちゅ、ぐちゅ、

父様も母様も死んじやつて、お屋敷から追い出されて何も無い僕でも、きつとお金を稼ぐ方法はあるよね? ねえ、姉様。

——ぶじゅじゅじゅじゅじゅじゅ。

……あれ? 僕は何で絵を描いてたんだっけ?

——初めて人の顔を剥いだ時、僕の顔はみんなと同じ顔をしていた





「お……お……お……!!?」

代わりに、そこにいたのは

「おいおいマジか…」

四本の鎖の絡まった『肢』、

腕の部分には一対の巨大なチェーンソーのような『鎌』、

ステンドグラスのように輝き、美しい女性のような意匠が見られる

『翅』、

四つの大きな昆虫的『複眼』。

側面から紅い蒸気を噴き出す『腹部』

全長6メートルはあろうかという巨大な黒鉄くろがねの『カマキリ』が、ロンドンの町に出現したのだ。

「ぼくは、幸せにならなきゃいけないんだああああああ!!」

「ねえ」

「どうした?」

「力を貸して。あれを……撃滅する」

「…いや、説得する」

「いい加減にして!!もうそんなこと言ってられる状況じゃないでしょう!!」

「いや、まだ言っただけの状況。アイツへの対処法はすでにこっちは確立済だ。あとはお前達がそれに乗るかどうかだけど……」

「やめて」

「——信じて、くれるよな?」

「それを言わないで!」

「うむ!やるぞ!!」

「…ちせ!」

「まさか異国の地で妖怪退治の機会が巡って来るとは…!! 武士の誉れを前に剣を抜かずいつ抜く? 私は桐生に乗るぞアンジエ!」

「そんな…ダメよ…」

「アンジエよお…多分今すっげえ気乗りしてねえと思うけど、まあ気持ちは分かるぜ? 俺も最初はこのハチャメチャに振り回されてたからな」

「おい万丈、それだと俺が危ないヤツみたいに聞こえるんですけど?」  
「実際そうだろうが。この期に及んで知らばつくてんじやねえぞこの天才バカ!!」

「なんだとこの筋…真性バカ!」

「いや筋肉バカじゃねえのかよ!!」

「——ああもう! ううるさあああああああいい!!!」

「うおおおう!!」

「わかったわよもう! やればいいんでしよう!? やれば!? やってやるわよスパイだものね!」

「おお、アンジエがいつにもましてえらく饒舌に…嬉しいやら悲しいやら…」

「ちせ…?」

「ひい!」

「すううー…はああー…ふう…で、どんな対処法なのかしら、天才『バカ』物理学者さん?」

「ああまず…つておい!」

「!…戦兔オ!!」

「!…みんな避ける!!」

突如放たれた巨大カマキリの横薙ぎを全員咄嗟に屈んで躲す。危なかつたあ!

「ぼくを、ぼくを幸せにしてくれよおおおおお!!」

「仕方ねえ…動きながら話す! 万丈!」

「お…おお!」

「ドラゴンボトルと『クローズマグマナツクル』…今はそれで何とかし

「てくれ！」

「…上等だ!!何すりゃいい!？」

「肢全部折れ!以上!!…ちせもそれを頼んでいいか？」

「おっしや!やってくるぜ!」

「むう…:不承不承ながら、了解した」

「アンジエはCボールで俺をアイツの顔に!」

「了解、行くわよ」

「頼む!」

差し出されたアンジエの手を取ると、全身が淡い緑光に包まれる。

やはりあの時と同じだ。Cボールには使用者が触れた相手も重力から解放されるはずだからな。

「よし…:待ってるマスクメイカー!」

幸せになりたい…:それがお前の、本当の願いなら。

《ラビット!タンク!ベストマッチ!!》

《ラビットタンク!!イエエエイ!!》

「お前の、本当の夢を…:お前が幸せになるための道を、俺たちが!創ってみせる!!」

——ロンドンの空に、月が輝いた。

——ドロシー視点——

「おいおいおい、どういう状況だこれ……!?!」

警察からマスクメイカーの捜査情報をすっぱ抜いたりなどの仕事も一段落し、ようやくと例の二人が住んでいた店に合流しようってプリンセス、ベアトを乗せて車を飛ばして来てみたものの……

「ほっ……ハッ!!」

「…左から来るわ!」

「…うおっと!助かる!」

人語を喋るバカデカイ黒いカマキリとこれまた妙ちくりんな格好をした怪人がアンジエと協力して戦っているというあまりにも現実離れた光景が広がって……ああホントに何がどうしたってんだよ!

「うおりやああああああ!!」

「はああああああああ!!」

んでしかもその下でちせとバンジョーがデカ物の肢を執拗に攻撃して……いやいや下手したら死ぬって!!!何やってんだあいつら!!

「あ、あわわ、あわわわわわわ…」

「これは……マズい……」

「やめろ…僕の大切な物を…壊すなあああ!!」

「違う!お前が本当に大切に思ってたものはそんな人を傷つけるものなんかじゃない!それを全部取り除くまで我慢してくれ、マスクメイカー!!」

「え…ます、マスクメイカー!?!…あれがですかあ!?!」

『『殺人鬼の正体は実は人間じゃなかった』…とかどつかの小説にありそうだなおい…』

「アンジエ、ちせさん、ミスター・バンジヨー…あれ、ミスター・キリユーがいない…?」

「あ…あの姫様、アンジエさんに掴まってるシマシマ怪人の声が…その、似てませんでしたか?」

「じゃあ、あの人が…!」

はははそんな…いや、ベアトが言うんだからそうなのかもな…

ちせといいあの時のジョーイローニンとかいうテロリスト共といい、日本人が分かんなくなってくるよ全く…

まあそんなことはさておき、

「しようがない、今は私たちにできることをしよう。」

「…はい!もちろんです!」

「ううううう…(すっごく怖いけどこれも姫様のため姫様のため…)!」

「ドロシーさん!近隣の住民の方々の避難と誘導をお願いします!ベアトは私と人が立ち入らないようにバリケードを設置!!行きますよ!!」

「了解!!」

「は、はいいいい!!」

流石いい指示だよプリンセス!一皮むけたかな!

…あれ、でもこれスパイの仕事か?いや、んなもん気にしたってどうしようもないけどさ!!

——さて、もう一仕事頑張りますかね…!

——戦兎視点——

「来るな…よって来るなああああ!!」

「よっ……ハアアッ!!」

「くっ……ヤツの動きが速くなつてきてる……!」

彼との対話のため、まず俺たちが行動に移したのは巨大鋸鎌や鎖付きの肢など、武装の破壊だった。

肢は万丈とちせが、それより上方の武装は過度な構造体の破壊を抑えるために俺のドリルクラッシャーとアンジエの銃撃で各部破壊する分担任である。

今のマスクメイカーは合体状態の『ガーディアン』よりかは気持ちばかり小さいがそれでも巨大、しかも小ぶりでカマキリっぽい分小回りが利いてしまっているのもあって、『ホークガトリング』などの高速飛行形態で応戦すると不意な移動で彼の攻撃を誘発して市街地を危険に巻き込んでしまう可能性が大いにあるからだ。

だから俺はアンジエのCボールによる空中移動に頼つたのだ。彼女の操作なら無駄な移動をせずとも武装を破壊しながら最短ルートで彼の頭部に近づくことができる。

「よし、最後だ!!アンジエ!」

「……ええ!!」

そしてドリルクラッシャーで破碎しておいた大鎌の装甲部の亀裂の中心をアンジエに銃弾で狙い撃ってもらうことで、過度な衝撃を出さずに彼の武装を解除させることができる!ビルドの力は強すぎて構造上おそらく存在するだろう彼の本体までをも攻撃してしまいかねないからな。これがベストの攻撃だ。

「ああああー!うわああああ!!」

泣きわめく子供のようなこの声が、マスクメイカーのありのままの言動だったのだろうか、今は分からないがこれが彼の悲痛と苦しみを埋まってしまった心を表しているのは確かだろう。

「……まずい、これ以上はボールが持たない！一旦下りるわよ！」  
「え……あ、おい！」

なんてことだ……それ制限付きだったのか！  
「また使えるようになるのは!？」

「……早くて三分。それが限度よ」

……長時間使用すると赤熱化し、そうになったら冷却しなければならず再度使えるようになるまでタイムラグができてしまう……まだまだ発展途上の技術なんだな。

近くの屋根に下り、アンジェはすぐに懐から液体窒素を入れるような容器にCボールを収納する。

さて腕の鋸鎌は破壊したし次は……

そうだ、万丈の方はどうなってるんだ？  
ここからでも見えそうだな。どれ……

「ほ………はあ!!」

「——いよし、あと2本！ちせエ！そつちはア!？」

お、順調みたいだな。スゴいなあの二人、息ピッタリじゃん。

この調子なら………いやまずい!!

「こちらも………!?! 屈め万丈!!」

「お? うおお!?!」

折れたちせの刀の先端が飛ぶ！それを間一髪で避けた万丈が驚愕の声を上げた。

「つぶねえく……」

「すまぬ!!………くお!?!」

「!……やべえ！オルア!!」

ちせを突き刺そうとした脚を万丈がナツクルで受け止め、逸らした。

「大丈夫か!?!」

「うむ、済まなんだ万丈………はあっ!!」

「おおい!?そんなボロいので無理すんじゃないやねえよ!!」

「無理ではない!………たとえ剣が折れ果てようこの身屈つすること



なく最後まで戦い抜く！その心意気こそが武士なのじゃ!!……私は……私は!!」

折れた剣を支えに立ち上がり、万丈が受け止めていた肢を登る。そして付け根の関節へと昇り切ったちせは

——強くなったな……ちせ

「父上<sup>武士</sup>の、娘じゃああああああああああ!!」

一刀両断！ちせの放った一閃は見事マスクメイカーの肢を巻きついた鎖ごと根元から斬り取った。

「ああああああああああああああ!!」

そしてちせが着地すると同時、彼女の剣は、

はらりはらりと桜が散るが如くその身を崩れさせた。

(友よ、今までありがとう……)

「よっしやああ！あと一本！」

だが、

その残る一本から黒い鎖が射出され、ちせを捕縛してしまう。

「ぬあ!？」

「ちせエ!!」

「くっ……ここまでか。最後はお主に任せるぞ、万丈！」

「……分かった。そこで待ってる！」

ちせの言葉に応え、怒りうねる最後の肢を見据えた万丈はナツクルからドラゴンボトルを取り外し、

「(アイツを一発で倒すには、ちせみてえに剣でいった方がいいかもな……剣ならあるぜ、俺にもよ！来い!)」

祈るように両拳を握り、気を集中させる。

……そうだ！今のお前なら、生身でもアレを使える！

——《ビートクローザー!》

「……っしやきたあ!!」

ドラゴンボトルから青と金のチューブが伸び、万丈の剣、『ビートクローザー』がその手に現れる。

《Special tune!》

「今の俺は……」

万丈はそれにドラゴンボトルを装填。柄のグリップエンドを一回引き、パワーを充填させた。

《Hit parade!!》

「最ツ高にー!」

するとビートクローザーはドラゴンブレスの意匠が入った警告音のような待機音を鳴らしながら、蒼炎を纏わせ、東洋の龍の形として固定させ万丈の周りを旋回しながら現出した。

「負ける気がしねえええええええ!!」

万丈の決め台詞と共に龍が剣身から放れ万丈を乗せる。そして浮き上がり最後の肢に向け飛び、

「うおりやああああああああ!!」

万丈が肢の根元を叩き斬った!!

「あああ、そんな、足が、足がああああ!!」

「へっへ、いやったぜえ!!」

「おお：見事だったぞ万丈：龍が見えるほどに：」

「あー、あれ幻とかじゃなくてマジで出てたんだぜ?」

「なんと!」

「：よっ！ほら立てるか?」

「う、うむ……（幻でない??）」

龍は既に消失し、降り立った万丈はちせの鎖を解いて肩を貸す。

「大きいケガとかしてねえよな?」

「あ：いや！ふふ、大事無い。それよりよくやったぞ万丈よ。とにかく見事じゃった」

「いやお前こそ！よくあんなとこまで跳べたなおい！こうズバーー！ズバーー!!ってよ!」

「あっはっは！なんじゃその動きは！そんなへっぴり腰で斬つたらんわ!!」

「いや、お前ちびっこいのにあんなバンバン動けてマジすげえよホント!」

「ち…!?!」

「あ?…うおお!何すんだよ!?!」

「ゆ、許さん!…さっきの誉め言葉ごと、叩き斬ってくれる!!」

「あ、おい!…ビートクローザー返…うわやめろ悪かった!ガチで危ねえつてうおおおおお!!」

おいおい…つたく何やってんだよあいつら…ちよつと仲良くなるの早すぎない?

筋肉バカとひたむきな侍系女子、ああ体育会系だから?

…いや単純すぎんだろ!

「ちよつと、いつまで遊んでるの…よ!」

「おお悪…何してんの?」

声に耳を傾け振り向くと、アンジェが近くにあつた煙突に何やらワイヤーの様な物を括りつけている所だった。それによく見ると括りつけられた束から延びている一本のワイヤーが道を挟んだ向かいの家の煙突に繋がっているのが分かる(鉤か何かで固定してあるのだろうか)。

「さっきの『ロック』だからあなたがアイツの鎖鎌を防いでいたのを思い出して、ならアイツを『檻』に閉じ込めてやればいいと気付いたのよ…今、その下ごしらえが完了したわ」

「ああ、なるほど!…ワイヤーガンかあ、それすごいスパイっぽいな」  
「…ほらこれ持って、あっちの屋根に飛んであいつをワイヤーの円の中に入れてなさい。兔ラビットならそれくらい簡単でしょ?」

「よし分かった!…いい、よつと!」

幸いマスクメイカーの視線が最早一本もない肢を動かそうと躍起になって下に集中している今がチャンスだった。左足に力を込めロンドンの空を走り跳び、マスクメイカーを囲む形でワイヤーを何重にも巻き付かせてグルグル巻きに。そしてワイヤーガンの持ち手を既に煙突の巻き付いてる方とは対角線上にある屋根の煙突に巻き付かせた。これですいにマスクメイカーを完全に拘束できた!

「あれ?う、腕も動かせない?な…なんだ、なんだこの糸はあああああ!?!」

「四つも大きな複眼があるのに私たちの動きに全く付いてこれないなんて…皮肉ね」

「それだけ周りが見えない程に錯乱してるってことだろ！大人しくなった今の内に説得する！」

「もう他に使える道具は、弾があと数発つてところね…私が協力できるのはここまでよ」

「十分助かったよ。あとは俺が何とかする！」

「……（こんな事態になってしまった以上、今のマスクメイカーから汚職の証拠を得るには未知の力を秘めている『仮面ライダービルド』に頼るしかない…本意だけど任務完了まで頼らせてもらおうわ、桐生戦兔）……頼んだわよ」

「ああ…アンジエは万丈たちを避難させておいてくれ！」

「了解」

「……よし。マスクメイカー!!」

アンジエが万丈たちの方へ向かったのを見届けて、俺は狼狽しているマスクメイカーに声を掛ける。

「!!……おい!!これを外せ!!ぼくを、自由にしろお!!」

「その前に、君に聞きたいことがある！」

「ああ!?!」

そしてまず彼の心の裡うちを知るべく俺は…いくつかの問いかけをすることにした。

「君はどうして、強盗殺人を犯してしまったんだ？」

「……覚えて、ない」

よかった…答えようとする気はあるみたいだ。

今の彼は恐らく『子供』なのだ。素直で周囲の景色に興味をあまり示さないが、その分掛けられる声に特に敏感なのだ。

優しい言葉で話しかければ、どんな形であれ反応を示してくれるとは思っていた。読みは間違ってたなかったようだ。

「何が君を、そこまで人を傷つけることに悦びを感じさせるようにしてしまったんだ？」

「そんなの……わからない……」

「…………質問を変えよう。」

「うう…………」

「どうして、君はそうまで強く幸せになりたいと願ったんだ？」

「わからない…………わからない！ぼくも知りたい！！知りたいけど！！

…………その前に！」

「！！」

「もっと刻んで、刻んで…同じだと感じたい！みんな僕と同じ…『カオ』なんてないんだって！！そう、カンジタインダヨオオオオオ！！」

マスクメイカーの咆哮と急激な動きでワイヤーを固定してある煙突に亀裂が入ったのが見えた。

「まずい！！あんなに上体を揺らしたら拘束が…………！！」

「……………マスクメイカー！！教えてくれ！！君の……………本当の名前を！！」

「！！」

動きが止まる。

『『マスクメイカー』ってのは殺人鬼である君の呼び名として周囲が勝手につけた名前だろう？…君の本当の気持ちを知るのに、それが要なんだ！！本名は本当の『君』の大事な要素なんだ！！』

「ボクノ……………ナマエ？」

「そうだ！頼む、教えてくれ！！」

僕の名前。

そうだ、僕の……………名前は…………

……………

——ねえ\*\*\*\*、どう？描けた？

あ……………あれ？あの人、誰だっけ。刻まれてるから見えないよ。

——わあ、ちゃんと私だわ！本当に上手なのね、\*\*\*\*<sup>スク</sup>\*\*\*\*<sup>カー</sup>。

僕の名前……そうだ、それが僕の名前なのに、なんで聞こえないんだ

——将来は大画家さんね。今の内にもっといろんな人に知ってもらいましょうよ。その方がマス\*ス\*メイ\*ー\*にとつてもきつといい。幸せの第一歩なのよ。

教えてよ、『マスクメイカー』じゃない僕を。ねえ。

——どんな人にも幸せになる方法があるの。あなたの場合は絵がそうなの。だから……

教えて

教えて

ああ

行かないで

消えないで

僕の大事だったはずの人

ああ

いない

僕の名前

わからないまま

僕は

誰なの

ねえ

真っ暗で

何も

見えないよ

~~~~~

「戦兔オオオオオオ!!避けるオオオオオ!」

最後の質問の後がくがくと震えていた『彼』は、突如急激な動きで上体を揺らしワイヤーを引きちぎってしまった。

「いや、受け止める。」

こちらに倒れようとする彼の大きな体を、俺は立つたまま両腕でその頭を支える。

「俺は言った……お前を救うって!だから!」

彼の両腕で抱えられるほどの頭部を、抱きしめるように支える。

「君も、自分で自分を救え!!そうじゃないと君が本当の意味で救われない!!他の誰も君を救ってくれない!!君の未来は……君自身の力ではないと、創りはじめられない!!」

その時だ。

「!!」

俺と『彼』の間で紅と青の光が……溢れて、そして――

「(ハハ)は……」

目を覚ますと、俺の変身は解除されていた。

「!?……夕方じゃない……」

景色は快晴で身の回りには色とりどりの薔薇が咲き誇り、遠方には小さな池とそこに橋が架かっているのが見えた。

「まるで金持ちの庭みたいだ……あれ?」

そしてその池の畔に、一人の防災頭巾の様な物を被った奇妙な子供が、スケッチブックだろうか、それに絵を描いている。

「あ……ねえ君！」

「……………」

近づいて声を掛けてみたが返事はない。それどころか、

「俺が……映ってない？」

池の水鏡に、俺の姿がなかった。

「一体、何がどうなって……」

「——シヨーン！探したわよー！」

「!!」

後ろから女の子の声。見えたのは綺麗な金髪に、左手薬指に大きな青い指輪を嵌めている少女だった。

……もしかしたら『シヨーン』というのはこの頭巾の少年の事だろうか。

「また来たの？いい加減にしてよ」

「ねえ、絵を見せてったら。いいでしょう？お願い！」

「やだ…絶対やだ!!」

「なんでよ！こんなに頼んでるのに！」

「どうせ笑いに来たんだらう!!そんな人に見せたくない！」

少年は胸にスケッチブックを少女に見せないようにして抱える。

強い拒絶の意思が感じられた。

「アルバート兄様も、ベラドンナも！みんな笑った！僕みたいなのが描いた絵なんてしようもないって！一生飼い殺しのくせに、無駄な紙を使うなって!!!」

「そんなことない！」

「え……うわ!？」

「死んだお父様が言ってたわ…『この世に無駄なことなんてない。どんな経験も人生の大切な宝物だ』って。つまり、あなたの今描いている絵はあなたにとっての大切な宝物ってことよ。そして……」

「あ……返してよ！」

『弟のものは姉の物。姉の物は姉の物』ってね！あ、これはお母様の言葉ね」

「……弟？何それ…君僕の兄弟の誰かの友達か何かじゃないの？」



「あら、聞いてなかったの？しょうがないわねえ…」

少女は少年の手を取り、太陽のような笑顔でこう言った。

「ちよつと前にこの家に越してきたの。『ユーシェ・シユタインヴァルト』よ。そしてあなたは私の弟になったの。よろしくね!!」

「…………『シヨーン』です。よ、よろしく」

「わ、カッコいい名前ねえ。その顔もカッコいいし！」

「え…………ええええ!!」

「何驚いてるのよ、だってそうでしょう。」

俺は、ここでようやくその可能性に思い当たった。

「——顔が『ない』なんて、これ以上ないくらい個性的でカッコいいじゃない?」

この庭は、マスクメイカーの『記憶』の世界なのだ——。

「なんだよそれ……カッコいいわけないだろ！」

「カッコいいわよお！」

彼の記憶の世界、心の中の世界……今俺が立っているこの場所が、そうだといいのか？

『この世に醜い物は存在しない、存在してはいけない』!! このアホミ  
たいな家訓のせいだ!! 僕はもう一生この”ギプス”を外すことが  
許されないんだぞ!? 僕の顔は存在しなかったことにされたんだぞ  
!! こんな僕の、どこがカッコいいっていうんだよ!?’

『短所は長所にできる』! ほら、海賊さんや軍人さんは眼帯や鉤爪  
の手になってもそれが勲章だぞ! って感じでカッコいいじゃない?

あなたもそんな風に思われるような人間になればいいのよ!'

あまりにも現実離れた目の前のこの”事実”に、俺は開いた口が  
塞がらないまま後ろ髪を掻き巻く。

『……なんだよ、これ……』

俺の声が自分たちすぐそばで発せられたというのにも関わらず、  
シヨーンとユーシエはこちらを見向きもせず会話を続けている。  
明らかに俺の存在に気付いている様子はなかった。まるで俺は空気  
だったのかと思うほどに。

いや、でもそうか……

『ここがマスクメイカーの……いや、『シヨーン』の記憶の中なら、きつ  
と彼があんな姿になってしまった経緯もこの”記憶の世界”を辿る  
ことで分かるはずだ』

今は『どうして自分がこうなってしまったか』よりも、『今この状  
況で自分に何ができるか何をすべきか』を考えるのだ。

正直前者が気にならないわけではないが、それは今は置いておこ  
う。

「そんな怖そうなのになりたくない！ 僕が、僕がなりたいのは…」  
「画家さんでしょ？」

「そう！どこか静かな場所ですつと絵を描いていられるような…?!  
なっ、何で分かるんだよ!？」

「分からないわけじゃないでしょう！こんなに素晴らしい絵を描いちゃう  
んだから。…あ、ごめんなさい。返すわ」

「あっさり返すくらいなら最初から取る…取らないでください。ユー  
シエ姉様」

「姉様はいらないわ。ユーシエでいいわよ固っ苦しいから」  
「ええ……」

「あ、嫌そうな顔」

「……何ですかそれ。 ”顔なし” に、表情なんてないのに」

「あら、あるわよ？私には判るわ！だって…」  
「……………」

「シヨーンは、私の弟だもの」

ユーシエがそう言った瞬間、世界の全てが静止した。

『えっ!?!』

どういうことだ？どうして何も動かなくなった？

なんの前触れもなかったのに!？」

『人も、風も、池の水の波紋すら止まってる……まさか』

現実のシヨーンが思い出せる記憶が、ここまで  
だから……そういうことなのか？

『そんな……なにか、続きに行ける仕掛けはないのか!?!』

どこかに、どこかにあるはずだ。

別の記憶へとアクセスできる方法が。

人の記憶、特に自らの”思い出”に関するものは一つを想起すれば  
また別の関連した記憶が甦る、そういうものだど何時かどこかで聞いた  
気がする。

そうだ、俺だって辛いとき投げ出したときいつも踏ん張ってこ

れたのは、仲間たちとの大切な他愛もない思い出があったからじゃないか。あの日々が、紛れもない”桐生戦兎”として過ごしてきた記憶があったからこそ、立ち上がってこれたじゃないか！

大切な思い出ってのは、そう簡単に忘れられるものじゃない。きつと、シヨーンの記憶も心のどこか深いところにあるはずなんだ！

『どこだ……どこにあるー！』

探せ、行けるところの全部を。

見つけ出せ、それは必ずあるのだから――。

――数十分程経っただろうか。

『見つからない……』

いくら探してもそれらしいものは皆目見つからなかった。

『最悪だ……』

折角いい所までこれたというのに、この始末。

奇跡か偶然かもわからないまま、今の状況をほったらかしたまま先に進もうとした弊害か。とうとう先に前進することすらできなくなった。

『いや……諦めるのはまだ早い。』

まだやれることがある筈だ。

まだなにか、目を付けてない場所が…

『そうだあの二人！ まだ調べてないぞー！』

会話の途中で静止しているシヨーンとユーシエ。

二人にはまだ声を掛けてはいたが触れてはいなかった。

俺が倒れてきた彼を抱き留めたあの時の光りが、俺をこの世界へと誘ったのだとしたら……

『シヨーンの背中に……花？』

探索から元居た場所に戻ると、奇妙な変化が起きていた。

真っ白の、キク科だろうか？

一輪の花がシヨーンの背中にくっついている。

『仮説に仮説を重ねまくるのはホントはご法度だけど…今はこれしか

ない。頼むぞ』

その花を取る。

『うおっ!』

ばつくりと、成虫が抜け出した後の蛹のような亀裂がシヨーンの背中が開いた。

その中は何も見えず、吸い込まれそうな黒が広がっている。

『……行ってみるか』

シヨーンを救う。その強い決意を胸に燃やして、俺はその穴に右手を差し込んでみた。

直後、あの時と同じ紅と青の光が穴から溢れだし……

『………やった…進めた!!』

穴をくぐった先、景色はさっきの庭から別の場所へと変わっていた。

不確定要素ばかりの行動だったが、これが正解だったようだ。

今度は何処に来たのだろうか？

『見た感じ……公園か?』

遊びまわる子供たちや風景画に勤しむ大人たちなど、現実の公園でも見たような景色が眼前にあった。

大きく時代が変わっている訳ではないだろうし、そう断定していいはずだ。

『近くにシヨーンがいる筈だ』

また周りを見渡すと、左方の木の陰に頭部が特徴的な少年の姿が見える、シヨーンだ。さっきの記憶よりも若干背は高くなっているがきつとそうだ。

『絵を描いてる、間違いない』

彼は何度も何度も群衆とキャンバスの間で視線を変えながら、黙々と描画に勤しんでいる。

かなり集中力が高いのだろう。目の前で走る子供に目もくれず一心不乱に筆を走らせていた。

「——シヨーン!! もう、勝手にいなくならないで!」

「姉様。もう用事は済んだの？」

「あ、こちら！　また姉様って呼んだ！　いい加減名前で呼びなさいつたらー！」

シヨーンの後ろの林から聞こえる甲高い声は、ユーシエだろうか。ドレスを持ち上げ、大きな帽子を押さえながら走って来た。

この子も外見的に成長して、大人っぽい出で立ちになっていた。身長はドロシーより少し高くくらいだろうか。

「でも…姉様はやっぱ僕にとつてたった一人の本当の家族だから。だから、”姉様”がいいんです。」

「……………く〜!!」

「わぷっ！ね、姉様!？」

「ホントいい子ね〜!!ああ、シヨーン!!」

顔を真っ赤にさせてシヨーンを抱きしめるユーシエ。嬉し恥ずかしい気持ちが表れての行動なのだろう。二人の距離は大きく縮まっているようだった。

「ごんな、ごんない子に嫌な思えばかりさせて！神様って本当に不公平だわ！他の家族たちに爪の垢を煎じて飲ませてやりたい!!」

「く…苦ひいでふよお！」

「ふふ、ごめんね…あら、また一段と上手くなってるわね！　人が一杯なのにみんな丁寧で…」

「そんなことないですよ。奥の方の人はそれっぽい線で誤魔化してますし。その分近くの人は陰影を付けてハッキリさせてあげて全体のメリハリを……」

「う〜ん…いや、とにかくすごい考えられてる絵なのね!!　シヨーンすごい!!」

「いやお姉ちゃんもうちよつと聞いてあげて！」

「早いんだよ褒めるのが!!」

「へへ……」

「うんうん、頑張って父様たちを説得して外に出させてあげた甲斐があつたわ」

まあ多少雑でもめそんな風にちやくちやいい笑顔で褒められちゃ

うと、不思議と褒められた方はすげえ嬉しかったりするんだよな。わかるわかる。

「あ、そうだ。シヨーン、いつも風景画ばかり描いてるけど人物画とかは描かないの？」

「人間は……好きじゃないです。題材にしようとは思えません」

「そっか……ごめんなさい」

「でも！　でも……一人だけ、描きたい人はいます」

「！　…誰なの!? 教えて!？」

「…内緒です」

「ええ〜!？」

「いつか完成したら、一番に姉様に見せますね」

「あら……そういうことなら、楽しみに待つてるわね」

「はい!……あ、そういうえば姉様の用事ってなんだったんですか？」

「ふふん、内緒♪」

「あ、真似しないでくださいよ!」

「なーいしよないしよー♪ふふんふふーん♪」

「あ、ちよつとお!! 置いてかないでくださいよおー!!」

シヨーンの声を最後に、記憶の再生は終わった。

『シヨーンが誰かの人物画を描こうとしていること、ユーシエの謎の用事……それと、彼女の前で絵を描いている間だけはとても楽しげだったこと……か』

シヨーンの過去を紐解くのに必要な情報はまだ足りない。

数十年生きてきた人間の記憶だ、きつと桐生戦<sup>れ</sup>兎のものとは比べ物にならない量の記憶、その世界を旅することになる。

『だとしても、俺は進む…シヨーンの、未来のために』

俺は、二輪目の花を摘んだ。

~~~~~

「それじゃあ行ってくるから、お留守番よろしくねシヨーン」  
「はい。プリンセスのバースデーパーティー、楽しんできてください。  
姉様」

大きな屋敷に住むもので、彼に話しかける物はユーシエ一人だけ  
だった。

彼は一人でいる間、庭で野ネズミ等の食事を自分で調達するか、池  
の水で服を洗うかを繰り返す生活を送っていた。絵を描くのはその  
後だった。

~~~~~

「父様……母様あーっ!!!」

「一体誰が……」

「壁の建設工事の視察中に、”共和派”の人間が撃ち殺したそうです  
わ」

「ふん、賤民も偶には役に立つ。これで名実共に私がこの家の主だ……」

「……けほっ、ゲホゲホ、げええエっつ、エっ、エえっ!!!」

「ユーシエ……ユーシエどうしたの!? ……キヤアアアアっ!!兄様ア

!!血、血を吐いてるわ!!汚らわしい!!」

「くそっ、この忙しい時に……おい誰か医者を!!」

「……姉様あ!!」

「!? おい!!なんでバケモノがここにいる!!……っアア!放れる!!汚  
いんだよクソツタレ!! おい!!誰か庭に戻しておけ!!」

「姉様!姉様ああああ!!!」

初めてシヨーンの兄弟たちが記憶の中で姿を見せたが、案の定悪辣  
な人間たちだった。

両親の他界により彼の待遇は益々悪くなり、そのうえユーシエも流  
行り病を患ったせいで彼の彼女と会える時間もやがて少なくなっ  
ていった。



~~~~~

「ねえシヨーン」

「なに、姉様」

「あなたが前に描きたいって言ってた人物画は……描けた？」

「……うん！描けた、描けたんだ！ほら見て！」

床に臥せるユーシエは、まるで今にも消え入りそうな口ウソクだった。

頬は？せこけ、美しかった髪はトウモロコシの髭と見分けがつかなかった。

死の気配が、彼女の全身を覆いつくしていた。

瞳を潤わせ、シヨーンは一枚の油絵をユーシエに見せる。

「あら……？おかしいわね……真っ白で……何が描いてあるのかしら？」

描かれていたのは、最初の記憶の世界で見た——柔らかな笑顔の、健やかだった頃の少女。

「ええとね、これは——」

「待って……当ててあげる。これは……そうだわ。きっと、あなた自身よ」

「いや、姉さ」

「お日様みたいな笑顔で、たくさんの人に好きになってもらえた、未来のあなた自身ね？」

少女の絵を持つシヨーンの手は、震えていた。

「……………うん」

「あ……当たってた？やったあ……」

少年の頬を涙が伝い、窓からのぞく月の光を反射させる。

「シヨーン、絵を見せてくれたお礼にね、プレゼントがあるの」  
「え……………?」

そう言つて、彼女が震える腕でシヨーンに差し出したのは、大きな青い指輪だった。

「これ…でもこれ、姉様の大切なものじゃ…貰えないよ!!」

「いいの…あなたになら…」

「なんで…えぐつ…なんで…つえ…」

「どうしても自分の力で何とかできないことがあつた時…その時あなたが一番信じられると思つた人に…渡して。きつと、力になってくれるわ。」

「そんな人…姉様以外にできっこない!!」

「できるわ…ねえ、シヨーン。あなたの絵は、きつと世界中の人に感動を与えられるわ。だからいつか、私の他にも…あなたの顔も、他の全部も…受け入れてくれる人がきつとできる。その人にも、絵を描いてあげてね?…私の分も、あなたはその人と幸せに…生きて。」

「……………」

「シヨーン」

彼女の手が、濡れる頬を優しく撫でる。

その手を、彼の手は優しく包みこんだ。

「あなたの姉様になれて…よかった」

「姉様?」

伸ばされた彼女の腕が、重力に引かれる。

「……………姉様ああああ!!!」

ユーシエは笑っていた。そこには感謝があった  
俺は、泣き崩れるシヨーンの背中に花が現れてもすぐに触れること  
ができず長い時間を立ち尽くした。

~~~~~

最後の記憶の世界を抜けると、そこは真っ白の何も無い世界だっ  
た。

『これは……』

余りにも異様な空間にきよろきよろ周りを見渡していると、手の中  
で一杯だった白い花たちが突然空中で寄り集まり、何処からか紙やり  
ボンが現れて、立派な装飾のある花束になった。

『そうか……これで、彼の忘れていたシヨーンとしての記憶の全てを、  
見終わったことになるのか』

この花束は今までの記憶の傾向からして、恐らく彼がユーシエから  
貰った多くの”愛”が形となった物だろう。

そして…古来より”花束”とは、死者生者問わず必ず特定の誰かに  
向けて贈られているものだ。

この場合、その相手とは――

『……………やっぱりだ』

空間の奥に、シヨーンがいる。

『これを彼に渡せば……きつと現実での彼に記憶が戻るはずだ』

あまりにも整ったこの状況に、その確信が強く湧いた。

これで、これできつと――。

『シヨーン!!』

花束を崩さないよう歩み寄りながら、声を掛ける。

『……………君は』

『初めまして、俺は――』

「――」セント・キリユ―”だろ？ 君の顔にも世話になってるよ  
『!!』

少年の体軀に似合わぬ、しわがれた低い声。  
小さな身体から黒い液体が流れ出て、少年の全身を覆う。  
そしてどんどん巨大になっていく。

「ふうー……。人の心に勝手に踏み込んだ罰だ。」

現実でも見た、巨大な黒鉄くろがねのカマキリ……。ではない。

一瞬その姿を見せたが、すぐに縮んでいき二メートル程にまで落ち着くとついにその形態は固定された。

「君だと分からないくらいにまで細かく!!刻み込んであげるよ!!!」

巨大になる直前の姿に、巨大化状態の特徴を全身にあしらわれたデザイン。

まごうことなくそれは怪物。連続強盗殺人犯……。マスクメイカー”の姿だった。

『そう全部が上手くは、行かないみてえだな』  
ビルドドライバーを装着する。

『これが最後だ……。俺が、俺たちが、お前の未来への道を創ってみせる! さあ、実験を始めようか!!』

すると

「ぬあっ!?!」

『——うおっ!?!』

突然、花束が光を放ち姿が変わり始める。

『これは……』

花束があつた場所には、嘗て新世界創世のエネルギーの一つとして役目を終えた筈の力

『“ジーニアスボトル”……!?!』

この手に再び、七色の輝きが戻っていた。

『マジかよ……。ハハ、最ツ高だな!!』

「[また変なアイテムをオオ……。!!貴様ア!!]」

『変とか言うな。こいつはな……。俺たちの思いが籠りまくった、ラブ&ピースの結晶なんだよ。』

《グウレイトオ！》《オールイエイ！！》

《ジーニアス！！》

『お前の中のラブ&ピース、それがこいつになっただってことは…』

《イエー！！》《イエーイ！！》

《イエー！！》《イエーイ！！》

『これは、怪物になっちゃまって今のお前にそれを思い出してほし  
いっていう、過去のお前の願いそのものなんだ!!…行くぞマスクメイ  
カー!!』

「黙れ…いい加減黙れよオオオオオ!!」

《Are you ready?》

「—変身!!」

黒き鋼の大鎌と、七色の虹の拳が

《完全無欠のボトルヤロー!!ビルドジーニアス!!》 スゲーイ!モノス  
ゲーイ!!》

—今、記憶の最奥で激突した。

~~~~~

「あ、ちよつとそこの人！」

「え……あ、俺？」

「はい！」

ちよつとお時間いただいてもよろしいですか？

実は僕の絵のモデルになってもらいたいんですけど……」

「あー……いいですよ。」

（仕事探してるけど見つからなくて）暇だったとこなんで「助かります！」

いやあ東洋人の男性を探していたところに、

偶然あなたのような最高のモデルとすれ違えるなんて！」

「うっは、最高だなんてそおんな!!」

まあ確かに？こんなイケメン天才物理学者は

そう世の中ゴロゴロいる訳じゃないですけど……むふっ

「それじゃあこの椅子座つてもらえますか？」

（完スルーかよ……）

あ、取りあえずポーズとか付けます？

こつこつ感じの「

「ううん……もうちよつとこつこつ、

顔全体がはつきり見える感じで…

「そうそう、そこです！」

「よいしょ……」

あれ、そういえばどうして

俺みたいな東洋人を描きたかったんですか？」

「仕事で必要でした」

「なるほど……でも珍しいですね、

屋外で風景画じゃなくて人物画を描くのって」

「いやあ、ホントは換気の効いたアトリエとかがいいんですけど、

僕は専らこの公園ですね。」

「おお、プロの拘りってやつですか？」

「拘り……というか、なんとというか…

『人物画はここで描かなきゃいけない』って妙なルールがあるんですよ、僕の中に。」

自分でも不思議なんですけど。」

——あの日、彼と出会ったあの公園。

今思えば、ここはある姉弟の思い出の場所であり、その時の彼の表情は、どこか助けを求めているように見えた。

「アア!!アア!!」

アアアアアア!!」

「……………」

交錯するジーニアスとマスクメイカーの拳。

鎌を掃いっつ隙を突いて攻撃。それを幾ばくか繰り返しながらも

マスクメイカーは激しく刃を振るう。

が、60本分のボトルの成分により視聴覚を極限まで高められた今のビルドの前にはスローモーションだった。全て避けられる。

《ワンサイド!》

レバーを小回転。左複眼が暖色の光を放ち、有機物ボトルのエネルギーが右手に籠る。

《Ready go!! ジーニアスアタック!!》

「ハッ!!」

マスクメイカーの刃を屈み避け、その黒く覆われた腹部を打ち抜いた。

「——ツツ!!アアアアア!?!」

「……ん?」

苦悶の声を上げるマスクメイカー。しかしその手で抑えていたのは一撃を食らわせた腹ではなく、何の攻撃もしていない頭部だった。腹部にはしっかりと攻撃の跡が大きなヒビとなって残っている。

「「やめろこんな……」

僕はアアアア!!」

「何……?」

疑問を感じたと同時、マスクメイカーの全身から小鎌が発射された。

俺の周囲を無秩序に旋回しながら全弾俺に狙いを定め飛来する。

「(避けられるか……?)」

《ダイヤモンド》で覆えるのは一部分だけ。

ならば、”的”を増やして俺本体への攻撃を減らす!

《忍者》の能力を発現。三体の分身ジーニアスを出現させる。

「「な……ッ!?!」」

『フルボトルバスター!!』

「「アアッ!?!」」

『ハアアアアアッ!!』

さらに分身も含めた四人のジーニアスの手に『フルボトルバスター』が携わる。飛来した小鎌はその悉くが黄刃の前に散らされた。



「……………んマダだアアアア!!」  
マスクメイカーがさらに小鎌を発射。それらは全方位を覆うようにこちらに向かって軌道を描いている。

さらに第一波の三倍はあろうかという数。今のようにはいかないだろう。もっと強い力で対抗する!

《ラビット! タンク!》

《ドラゴン! ロック!》

《フェニックス! ロボット!》

《バット! エンジン!》

《《ジャストマッチデース!!》》

四人のジーニアスがそれぞれボトルをバスターに装填。

二本分のエネルギーを凝縮させ、刃状にして振るい、撃ち放つ。円状に重なったエネルギー刃の前に、数十枚はあつた小鎌は全て消し去られた。

「オオオオオオツ!!」

その爆風に紛れ、マスクメイカーが飛び掛かってくる。

「!」

黒光りするその大鎌を外受け。ジーニアスの防御力ならこの程度の不意打ちはダメージにならない。

が、その時――

~~~~~

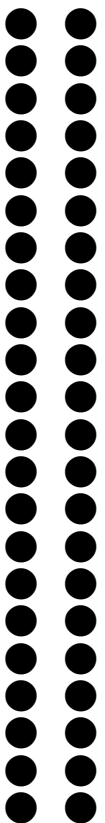
「やえ、やえてください……」

痛い、痛いんだよお!!」

「黙れ化け物お……!」

人間の世界に、入ってくるなあ……!」

「ああ……ああああああああ!!」



「……………あれ? 蹴って、こない……」

「……………」

「死んじやつた？」

~~~~~

「!?」

脳裏に、砂嵐の如く現れたビジョン。

少年を蹴っていた男が、少年に抵抗に遭い転倒。そのまま動かなくなつて……そんな映像だった。

「まさか……」

少年の声には、聞き覚えがあつた。

「今のは、シヨーンか……!?」

だとすれば、さっきの映像は恐らく……

「何人増えようと……」

あア！ まただ！ また……!!」

分身とは言え強力なジーニアスの攻撃を何発も受けながら未だ戦意の衰えないマスクメイカー。

「僕は……もう、あの頃の僕じゃない!!」

こんなに、こんなにも強くなつたんだア!!

もう僕は、虐げられるだけの存在じゃない!!」

彼が苦しんでいた理由は、

今の彼の発言の意味はからして……

ああ、そうか。そうだったのか

「自分の”過去”を見て、そんなに苦しいのは……

お前自身、今の自分が間違えているって本当は理解<sup>わか</sup>ってるからじゃないのか？」

効果時間も切れ、分身が消える。

一つに戻つたジーニアス<sup>おれ</sup>はそう”彼”に問い掛けた。

「俺もお前の攻撃で、少し見えたよ。

……お姉さんがいなくなつてからの君を」

「うるさい!!」

シヨーンが姉から受け取った愛情の記憶の集合体——花束がボトルとなってそれで変身したのがこのジーニアスだ。その攻撃を通して、記憶の一部が殺人鬼となった彼の方に流れ込んだのだろう。

そして、逆もまた然り。

「お前は……いや、

君は俺がシヨーンが殺人鬼となってしまっただけからの記憶の集合体なんだな。」

「……だつたらなんだ」

一歩、進む。

「教えてほしいんだ。

君の事を、もっと」

「何のために……？」

また一歩。

「決まってるだろ」

シヨーンだった彼に、歩み寄る。

「君を救いたいからだ!!」

「……気持ち悪いんだよオ!!」

鋸鎌が大きく刃のチェーンを鳴らし、振るわれる。

俺はそれを——避けることはしなかった。

~~~~~

『追い出された』

『僕は一人ぼっちになった』

『絵を描く道具もない』

『もう僕には何もない』

『何も無い、空っぽだ』

『空っぽな僕は』

『どうやって、生きていきばいいんだろう』

『……あの人なら教えてくれるかな』

『痛い』

『殴られた』

『痛い』

『蹴られた』

『痛い』

『心も』

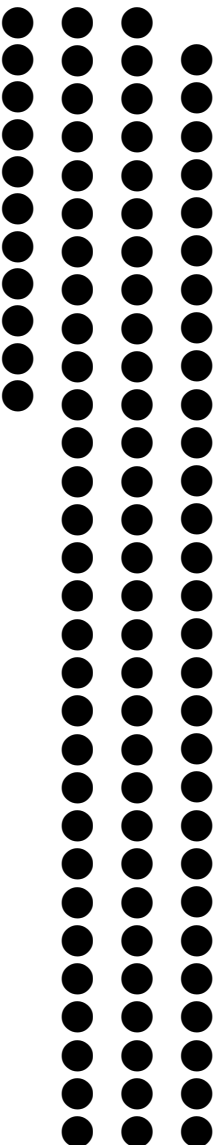
『身体も』

『空っぽな僕の中で、痛みだけが反響する』

『誰か』

『誰か』

『助け……て……』



『死んでいた』

『殺してしまった』

『人を、死なせてしまった』

『何をしても動かない』

『なら、見てみたい』

『普通の人の』

『ありのままの顔を』

ぶちゆり、ぶちゆり、ぶちゆり、ぶちゆり、

『綺麗な桃色だ』

にゆぶり、にゆぶり、にゆぶり、にゆぶり、

『花が咲いたようだ』

ぶちっぶちっ、ぶちぶちぶちり

『もつと見たいな』

『ロンドンには死体で溢れていた』

『たくさん確かめて、安心した』

『ああ、僕は』

『僕は、ただの人間だったんだ！』

~~~~~

血と肉の臭いが、実物もないのに鼻腔の中を充満してくるように錯覚するほどの惨たらしい情景。

それが攻撃を受けた刹那の時間の中で、ジーニアスの力で極限まで高められた思考回路の中で、何度も何度もリピートされた。

今までに感じたことも無いほどの吐き気に俺の消化器官全てが支配される。

「……………!!」

それを必死に堪え、ギシギシと鎧を鳴らす目の前のマスクメイカーを見据える。

「あれは……あの”黒い液体”は……」

「黙れえ!!」

~~~~~

『幸せだ』

『僕を追い出したあいつらに新しい顔を作って見せるたび』

『綺麗な絨毯が吐瀉物で汚れるのを眺めると』

『すぐく幸せだ』

『おい逃げるなよ』

『見ないふりするなよ』

『お前らも』

『似たことをさんざ平民たちにやってきたじゃないか』

『同罪だ』

『同罪だ』

『言い逃れはできないぞ』

『だってここに証拠がある』

『お前らの方が、化け物だって!!』

~~~~~

「捕まらないように脅してた上流階級ってのは、君の家族だったのか」

「家族？ 違う、道具さ。」

あんな豚共！その程度の価値しかない!!」

「……………彼らが野放しになってたことで、

お前のやったことが正当化されるわけじゃない」

「ああそうだなあ!? その通りだよオ!!」

~~~~~

『僕はこの醜い顔に感謝した』

『誰でもあり、誰にでもなれるこの顔を』

『もつとたくさんの人間になりたい』

『もつと精巧な顔に』

『もつと美しい顔に』

『そのためには?』

『そうだ、”模造”だ』

『顔を観察して、それを模造する』

『完璧に、完璧にだ』

『あ』

『そういえば僕は』

『絵が巧いんだった』

~~~~~

「君の罪は重い」

「……………あ?」

「それでも…」

《ワンサイド！ 逆サイドウ!!》

「——それでも、君はやり直せる!!」

《Ready go!!》

ジーニアス・ブレエエエイク!!》

右足に寒色系の光を纏わせ、ひび割れたマスクメイカーの鎧腹部に蹴り込む。

大きくうめき声を発しながら、彼は後退した。

~~~~~

『ねえ姉様、欲しいものとかある?』

『…あら〜! プレゼントのリクエスト?』

嬉しいわあ!』

『そ、そういうのじゃ、ないですけど…』

『ふふ……じゃあねえ、』

私あなたが幸せに笑ってる人生が欲しいわ』

『幸せに、ですか?』

『ただの幸せじゃないわよ?』

あなたが沢山の人に祝福されながら、

ずーっと笑顔でいる人生よ』

『……できるかな』

『できるわよ』

『あなたなら、できるわ!』

~~~~~

『「ああ……」







真っ白だった空間は、いつしか一面の花畑になっていた。

「……どおして、僕を許してくれたの？」

「決まってるんだろ」

鎧が砕かれあらわになったシヨーンを抱き寄せ、告げる。

「お前が、ずっと仮面の下で泣いてたからだ」

シヨーンの顔にはもう、俺の顔はない。

あるはずの物が無い、欠落で埋められた顔とは呼べない顔。

幼少期に強制されて付けたギプスも、狂気で作られた他人の模造品も被っていない、ありのままのシヨーンの顔。

俺には、それが笑っているように見えた。

「そっか……はは、そっか……」

「………」

「……ねえ」

「ん？」

「姉様あ、僕を許してくれるかな」

「俺にはそこまで分からないさ。君が、自分で聞いてみたらいい。」  
変身を解除、ジーニアスボトルは元の花束へと還元された。

それを、シヨーンへと手渡す。

「これからの長い人生、君自身の意思でずっと歩いていくんだ。君ならきつとできる！」

少なくともこの花は、お姉さんの愛は、それを望んでるはずだ」  
「うう………うう!!」

ああそうだ。思い出した。

エーデルワイス。

それが、この花の名前だ。

花畑が大きく風で揺れ、太陽が落ちてきたような光が、空間を満たす――。

——きろ!!おい起きろよ!!戦兔オオオ!!!」

耳元で聞き慣れたがなり声。

瞼を開ける。

「なんだようるさ………あれ万丈?」

!!!

………寝ってんじやねえコノヤロオー!!」

「うわ引っ付くなー………あれ?」

現実に、戻っちゃってるよ………

「いやマジでびっくりしたぞオイ！」

急にぶっ倒れやがって！

ちやんと目え醒めたからよかつたけどよお……！」

「そうだな……へへっ」

すぐくぐ々に感じた万丈の声を聞いからか、マスクの中で思わず笑みがかぼれてしまう。

「……なに笑ってんだよ気持ち悪い！」

「あ、俺変身したままじゃん」

「オオイ!？」

全身を覆う慣れた圧迫感を確かめて

次に顔を撫でると、やはり独特の硬質間。

現実では変身解除されないままだったのか。

変身を解除し辺りを見る。

……最後に受け止めた筈の巨大カマキリの頭部は見当たらない。

これは一体……

「あら正義のヒーローさん、よく眠れたかしら？」

浮かんだ疑問は霧消し、声のした方を見れば、そこには身体中<sup>すず</sup>煤だらけになったアンジェとちせが。

しかし感覚が戻ってくるにつれてアンジェがじっとりとした視線をこちらに向けていることに気付く。

口は笑っているが目で怒りが伝わってくるようだった。

「あ、いやその……すみません」

すぐさま起き上がり腰を曲げて謝罪。

わざとでなくても女の子を怒らせてしまったのだから詫びるのが筋というものなのだろう。とあるネットアイドルと揉めた時も、よく万丈と一緒にこうして頭を下げていたものだ。

「何が？ 意図が読めないわね？」

「はあ……桐生よ、これの意地の悪さに一々取り合わんでよいのだぞ？」

やれやれ、と言った風のため息交じり。

疲れの見えるちせだがその舌は渴いてはいないよう。

「しかしまあ、これもお主に多少親しみを持っておる証拠じゃ。アンジエは優しい男に弱いからな」

「……名誉毀損って言葉、知ってるかしら？」

「凶星なら知っておる」

眼にも止まらぬ速さでちせをホールドアップしようとするも逃げられるアンジエ。

そのまま手押し相撲に発展、結果はちせが僅差で勝利。アンジエの顔が六月の曇りのようにどんより陰った。

「ともかく、目が醒めて何よりじゃ」

見事な働きであったぞ、桐生」

「え？……あ、ハイ」

ちよつとくらいフォローしてやれよ……

ううん、でもこれが彼女たちの日常であるなら俺が変にツッコむのもおかしいな（俺もちせと同じような事よくやるし）。

でも……なんかいいなこういうの。

平和の中にいるって感じがする

「二人とも、今日はありがとな」

「……………え？」

「？ どうかしたか？」

「いえ、別に……………」

きよとんとするスパイ二人。

何か変なことを言っただらうか？

ただのお礼なのに

「……あ、そうだ。俺がいない間に何かあったか？」

他愛もない話は打ち止めにして、ここはきちんと状況確認しないと。

何か重大な見落としがあるといけないからな。

「あなたが倒れるカマキリの頭を抱えた瞬間、

謎の光が発生してあなたが倒れて動かなくなった後、突然、カマキリが頭部も体も斬られた脚も全て霧状に崩れて散ってしまったわ。」

「後に残ったのはお主とそこに寝かせておるマスクメイカーじやつた」

万丈を確認を取る。……間違いないようだ。

ときばきと説明してくれる二人にまた礼を言い、ちせの視線の先を見れば横に倒れていたのは全身の所々が黒く汚れた俺と同じ顔——  
シヨーンだ。

「シヨーン」

「——う……」

「大丈夫か？」

「あ………君は………」

無理に起き上がろうとするシヨーンに手を翳し、そのままゆっくり  
臥せさせる。

彼は見下ろす俺たちを順々に見つめ、そしてゆっくりと口を開けた。

「その声は………そうか、君が『セント』か」

「おう、そういえばちゃんと名前言っただけじゃなかったな。」

俺は桐生戦兎！ 天才物理学者だ！

顔の横でひよいつ、と指を振る。

「今はあんま無理すんな。とりあえず横になつとけ」

「なんでそんなに………親し気になれるんだ」

ほんの軽い挨拶に返したシヨーンのその言葉は、酷く重苦しい声色  
だった。

視線は俺たちの誰にも合わせられない方向へ向いていく。

彼の問いに対する俺の答えは、

「お前の、自分の罪を認め償いたいという本物の意思を、お前の心の中で感じ取ったからだ。」

はつきりと、真実を伝えることだった。

訝しむように眉間に皺を寄せる万丈。頭上に？マークが浮かぶのが見える。アンジェもちせも同様だ。

しかしシヨーンは違った。

ハツとした表情になり俺を見つめる。

どうやら彼にはあの世界で俺と戦った感覚が残っているようだった。

「おい戦鬼、お前急に何の話してんだよ？」

てかシヨーンってなんだよ」

「シヨーン……それが僕の、”マスクメイカー”の本当の名だ」

「なんと!？」

「!? まさか……」

つかつかとシヨーンの方に歩み寄るアンジェ。

歩を止め身を屈め、懐から一枚の紙を取り出しシヨーンに突き付ける。

それには一つの樹形図のような物が端から端までを使い丹念に描かれていた。

「これに見覚えはある?」

「……よく持ち出せたな、そんなもの。」

あの家はもう大分前に没落した筈だけど」

『シヨーン・ウエルキウス・シーモア』……あなただったなんて」

「……!」

その名を聞いた途端、シヨーンは怒りの形相を見せた。

しかしすぐに平静な表情となり、アンジェから視線を逸らす。

「でもなんで……」

「おい、いきなり何の」

「………忘れたの!? なぜ私たちがコイツを追っていたのかを!」

「………」

あの夜、初めてアンジェと出会った時に聞いたこと。

シヨーンは貴族の出で貴族と繋がっているある政治家の汚職の証拠を盗み出し、それを脅しの材料にして自分の悪事の数々を見逃させていた。



アンジェたち”チーム白鳩”はその汚職の証拠を取り戻すため、シヨーン……マスクメイカーに狙われていた俺と万丈に接触してきたのだった。

「君は警察ではないな……おそらく共和国のスパイか」

「……ええ」

「そうか。」

「なら欲しいのはこれだろう？」

シヨーンは上着のポケットから一本の鍵を取り出す。

ファンタジーや時代小説で見るとような柄の長いタイプの物だ。

「あの家の地下室に行け。そこに君たちが求めるもの全てがある。」

シーモアの家長が代々犯して受け継いでいた罪の証。

「アイツらも僕と同じ外道だったことがそれでわかる。……血は争えなかったってことだ」

シヨーンは俺の方を見て微笑する。そして遠い目でロンドンの夜空を仰いだ。

「……何かの罫としか思えないわね」

「違う、シヨーンはそんなことはもう」

「しない根拠がどこにあるの？」

「ぴしやりと、アンジェは鞭を打つような声で俺に反論する。」

「そもそもなぜあなたはこの男の本名を知っていたの？」

「しかも罪を償いたがっている？」

「初耳だわそんなこと。」

「あなたが言う”救い”というのは、犯罪者を無条件に赦してあまつさえそれを他者にも強要するようなそんな偽善的で都合のいい物だったというの？」

さつきまでの会話の流れで俺が記憶世界で行動している間の現実での時間経過はほんの数分でしかないようだった。並行世界間で時間経過のスピードが異なっていたように物質と意識の間でもそのようなラグが発生しているとしてもおかしくはない。

だからアンジェがこのように俺に捲し立てる疑問は当然の物だ。今の俺の考えはシヨーンの凄惨な過去と狂気のままに犯してきた罪

を償いたいという彼の本心を記憶世界での戦いを通して知っているからだ。

「……シヨーンの、マスクメイカーの罪は確かに重い。」

殺人の動機もそれを思いつくに至った喪失と過去を、俺は眠っている間にシヨーンの心の中に迷い込んで見たんだ。触れたんだ。

だから自分の事のように分かっちゃまったんだよ！

こいつは狂気と優しさのせめぎ合う中で涙を流しながら戦っていたんだって！」

「……つまり、そいつの過去を眠っていた短い時間の中で実際に体感したとでも言いたいのか？」

「ああ」

「……………」

アンジェはもちろん、ちせも何を言ってるんだこいつは、という目で俺を見る。

ただ一人、万丈だけはさつきまでの俺の発言の全てに納得がいったようでスツキリとした顔で頷く。

「彼の言葉は真実だ。」

僕も彼と同じように自分の心の中にいたんだ。

彼のおかげで僕は……」

シヨーンが、言葉の中でおもむろに顔の皮を引っ張る。

「「!」」

「僕は、本当に大事な物を取り戻せた。」

忘れてはいけなかった物を、忘れるべきだった物を。」

俺の顔を外し、シヨーンはただ一つの”シヨーン”の顔を見せる。

俺を除く三人は啞然として俺とシヨーンを見た。

「もう僕は何も隠さない。」

何も偽らない。

全てを曝け出しありのままの自分でこれから生きる。

それが、彼の導いてくれたこれからの僕の人生だ。」

「罪を棚上げにして無責任にただ許す。」

そんなことをしたいんじゃない。

俺はシヨーンに正しい裁きを受けて償う道を見せた。

そしてこいつはそこに進むことを選んでくれたんだ、自分の意志で

！

それが、俺のやりたかったことなんだ」

「……………」

アンジエは目を伏せた。

まだ何かを思案しているのか、指先でシヨーンから渡された鍵を弄ぶ。

ちせが冷や汗を垂らしながら俺とアンジエを交互に見つめていた。

「——彼に任せてもいいんじゃないかしら？」

夜闇の奥より響いた声、その主は黒いベールから金色の髪を垂らした女性だった。

「プリンセス！」

「「ええ!」」

「ごきげんよう、みなさん」

ベールを上げ、にこりと笑いかけたのは昨晚お初にお目にかかったプリンセス。正にその人だった。

「ドロシーとベアトも一緒？」

「二人は諸々の準備が整い次第合流するわ。」

で、そのことなだけど——」

プリンセスの口から残りのチームメンバーについて俺たちが戦っていた間やってくれていたことについて詳しい説明がなされる。

「なあ、ヒメさんなんつってんだ？」

「俺たちが戦ってる間に残ったチームメンバーでこちら辺の人を避難させたり、入ってこないようにしてくれてたみたいだ」

「おお〜！ スツゲエ助かる！」

プロの仕事って感じだな！ テキパキしててよ」

そのありがたい話に相変わらずの頭の悪い感想を漏らす万丈。で

も全くその通りだ。ただ戦っていた身としてはとてもありがたいものだった。

説明の後、プリンセスは続けてアンジエと会話と続ける。

あれ、様子が少しおかしいな……

「——でもプリンセス、桐生戦兎は放っておけないわ。彼の力は……」

「大丈夫よアンジエ。」

何かアンジエと俺の処遇について揉めているのだろうか。

まあ当然か。急に目の前で変身しちゃったもんな。

「だって……」

「だって？」

「あんなに頼もしい御姿をしてらっしゃったじゃない？」

え……

「頼もしい姿だったって俺……」

「マジ？ やべえじゃん！」

「フウー!!」

万丈と手を叩き感動を共有。

こういうのが堪らないんだよな。

ライダーやっていると特にな!

「黙ってて!!」

「ハイ」

怖い。

「……プリンセス、確かに彼の纏っていた”KAMEN RIDER

BUILD”はおべっか抜きで強力だった。

倍以上高さに差のある敵とほぼ無傷で戦えてしまう防御性。

俊敏性、ジャンプ力、掘削機型の銃剣、火球や強靱な鎖まで、変幻

自在な能力で立ち回れる汎用性。

それに何より、これ程の戦力が拳銃のように個人単位で所持できる

という携帯性。

悔しいけど、護衛していた筈の私たちが逆に護られる始末だった。」

「改めて聞くととんでもないな、お主……こんななのに」

「こん……!?!」

……いや、ツッコむのは止そう。

そんなことよりアンジエの今言ったことだ。

「……ああ、まあそうだな」

父さんが設計し、葛城<sup>権</sup>巧が完成させたこのビルドシステム。

恐れられ疎まれ続けたこの力をここまでではつきりと他人から評価された経験はほとんどなかった。

でも俺が真に評価してほしかったのは力そのものではないのだ。

……複雑だな。

「でもそれは戦闘に限ったの話よ。国を、人心をどうこうできるような代物じゃない。

力だけでは人々を真に導くことはできない。むしろ生半な力は扱う者をその周囲も巻き込んで破滅へと進ませる。

力を与えられ、その意味を深く考えることもない人間がどんな行動に出るか……あなただってわかるでしょ？」

アンジエとプリンセスの瞳が潤んでいく。

二人にだけ通じるものが、アンジエの言葉にあったのだろう。

「そうね……うん。」

本当にそう思うわ……

でもねアンジエ、ミスター・キリユーはきつとそんな人じゃないわ」

「……え？」

意外な言葉だった。

「ミスター・キリユーはショーン氏のことを真剣に考えてくれていた。

誰かの人生の為に一所懸命になれる人が罪のない誰かを傷つけるために力を振るったりはしないわ。

あなたみたいだね？」

「……でも！」

「おお、そういえばアンジエ！ 一流のホラ吹きと言うのは人が嘘を吐いてるかどうかすぐにわかるらしいのだが……お主はどうなのだ、黒蜥蜴星人？」

「ちせ、あなた……！」

「人間味が増してくれたのは佳いが、その分融通の利かなさも増した

のが玉に瑕じやな。

まあだが、私はそんな今のお主の方が好きじや。ふふん、可愛げがある」

「……な!!」

ぽっ、とアンジエの頬に赤みが注す。

「……………もういい、わかったわよ

まあ、信じるって言ってしまったものね

信じるわ。あなたも……………そのシヨーンも」

そう肩を落としながら俺の方に視線を合わせアンジエがぼそりと呟く。

「いいのか?」

「そう言ってるでしょ。」

そこの彼の心の世界に入ったとかどうとかも、おそらくBUILDの能力なんでしょうし。」

「……………優しい女の子だな、へへっ」

「全く口の減らない…………」

はあ……………なんだか今日だけで一生分驚いた気分だわ」

こめかみを抑えながら溜息をつくアンジエ。

それを見て、憑き物が取れたようにシヨーンが安堵していた。

「……………ありがとう」

「殺人鬼からの礼なんていらさないわ

そんなことより自分の心配をしてることね。きっと死ぬよりも辛い目に遭うわよ、あなた」

「ああ、それだけのことをやって来たんだ。

報復や中傷は全てこの身だけで受けきる。

それが、人の命を奪ったことの当然の償いだから。」

「……………その通りね」

「それと……………セント、バンジヨー」

「ん?」

「んだよ」

「いつか絶対、あの店の店長に謝罪しに行くよ」

「おう、待ってる（万丈、→だつてよ）」

「（……おう。）お前絶対くたばんじやねーぞ……店のリフォーム手  
伝ってもらわなきゃなんねーからな」

シヨーンに万丈の言葉（エール）を通訊する。

「……………そうか。」

ああ……………わかった!!」

その言葉が聞こえてから少しして、遠方より車のエンジン音が聞こえてきた。

「大丈夫かお前らあ!？」

「……………ああ、皆さんご無事でしたあ!!」

ベアトとドロシー。

それにその奥からぞろぞろと悪い意味で見慣れてしまった黒服の警官たちもやってくる。

シヨーンを逮捕させに二人が連れてきたのだろう。……………正直早く帰ってほしい。

「おお、来たか二人とも」

「いやいやちせお前落ち着きすぎだろ！」

町は怪物の噂でえらい騒ぎだったぞ!？」

ホント大丈夫だったのかよ!？」

「まあなんとかね」

「はあ……、心配してたんですよもう……」

つてそうですあのシ」

「セント・キリユーがいたぞ!!」

ヤツがマスクメイカーだ!!捕縛しろ!!」

「……………え、俺!？」

「大人しくしろ!!」

「違う違う!!こっちこっち!!」

俺は無実だつっのー!!」

だからなんでこうなるんだよ!!」

おいイ何口抑えてんだアンジエ!!  
笑ってんのか!?笑ってんのかお前!!

「おい待てよお前ら!!」

こつちが本当のマスクメイカーだろうーが!!  
よく見ろよオイ!!」

「そうだ!僕がマスクメイカーだ!!」

僕の恩人に不当な扱いをしないでくれ!!」

「なんだお前ら……」

うわああああ!?同じ顔が二人!」

「……シヨーン!万丈!」

うああ感動……!」

やっぱ持つべきものは戦友だ……!」

おい目を逸らすんじゃないよ、その女子

「……なるほど、事情は分かった。

しかしあの悪名高い連続殺人鬼のこの落ち着きようはなんだ?ん  
ん?」

ああこの期に及んでまたこの下りか……アンジエみたいには説明  
できないけどどうしようか

「間違いなくその人がマスクメイカーですわ。」

「む、お嬢さんこんな夜に何……!!?」

「通りすがりのなんとやら……よろしくお願いしますね?」

「………はいいいいいい!!」

おお、プリンセスナイスイウ!!

すげえな話が一瞬だよ。

王女直々に事実上の命令されてまあこの人も大変だな。言っちゃ  
なんだけど冤罪にされそうになった身からすれば少し腹の虫が収  
まったかな。

「よし、捕縛完了!」

「………セント」

「どうした?」

「これを、君に渡しておこうと思う」



そう言つてシヨーンが懐から取り出したのは、

「……………ああ！」

彼の姉が弟に託していた、あの大きな蒼い指輪だった。

「どうしようもなかった僕に、君は未来を創つてくれた。君に持つていて欲しいんだ。」

「シヨーン……………」

「姉様も、君にならそうしろつて言うと思う。」

「……………大切にする!!」

「頼む」

そう言つて、彼は警官達に連れられ、夜のロンドンの町へと歩き出した。

「……………また会おう！」

「ああ……………また<sup>あ</sup>！」

俺の仮面を外しありのままの顔で笑うシヨーンに、俺は見えなくなるまで手を振り続けた――。

(……っ！……っ！)

(これ笑うでない！)

でも……ぶふっ！)

「……………おい」

「あら気付いてなかったの？てつきり

わかってると思ってたけど」

「うそーん……………」

「おっちよこちよいな男性って、可愛らしいですよね」

「プリンセス!？」

「え……………これ何時から!？」

「朝餉の時からじゃな」

「なんで今まで誰も言ってくれなかったの!？」

「なあ……………俺今スツゲエ言いてえセリフがあんだけど」

「イウナ。ゼツタイイウナ」

「『自分で気づけバーーーーーカア!!!』」

「うわああああああああああ!!!」

「ぎやははははははははははは!!!」

いつものお返しだバーカ!!」

「何やってんだアイツら……………」

「さあ……………はあ、まるで子供ですな」

「ベアトには言われたくないだろ」

「ドロシーさん!!」

——こうして、俺達の長い一日は終わった。

シヨーンの肉体はなぜ鎌まみれの凶悪な姿になっていったのか。

あの記憶世界の正体に、その中で見た謎の黒い液体。

そして黒い煙となって消えた巨大カマキリの鎧。

まだよくわかってない疑問点も多く残っていたが、今は置いておこう。

それに、

「でもまあ取りあえず全員……生きててよかったわ」  
「うむー」

狂おしいほど大切なことを、成し遂げられたのだから。

数日後、俺と万丈は激しい戦闘により見るも無惨な状態となつてしまった店の片付けに奮闘していた。

「——つかマジなのかよ記憶の世界に行つてたつてのは。……さすがに現実味なさすぎんだろ！」

「俺だつてなんであんなことできたのか未だによくわかんねーんだよ。」

でもこの目でしつかり見ちまつたんだからしようがねーだろ」

汗と木くずでザラザラべつとりな額を拭いながら気怠げに答える。

両手両脇に薪となつてしまつたイスやテーブルの詰まつた麻袋を外の台車に積んでいく万丈は『さつぱりわからねえ』と言いたげに首を傾げた。

「それにアレは紛れもなく俺とショーンにとっては真実だ。 ショーンも最後の戦いを覚えてたしな」

「別に疑つてるわけじゃねーよ。」

ただ、今までのビルドと違い過ぎるっつーか……『人間の記憶の世界に行く』なんて能力聞いたこともねーしよ」

「確かにそうだ。あの時持つてたボトルの組み合わせでそんな能力は発現しないはずなんだ。そもそもボトルの効果はドライバーを仲介しないと十分には発揮できないからな。」

アンジェにはなし崩し的に誤魔化しちやつたけど、本当はビルドに人の記憶の中に入る機能なんてないん……だ!!」

ギシギシと音を立てて薪の束が台車一杯に積み上がる。これだけあれば一週間は家族キャンプができるのではなからうかという量だった。

親しくしてもらっている家一件ごとに一束ずつ配る感じなら、丁度よく捌けるだろう。

「これ運ぶのかあ……まあまあいいトレーニングになりそうだな！」

「流石筋肉バカ、思考回路がバトルマンガの主人公」

「へっ！鍛え方がちげーのよ!!」

万丈お得意の胸筋をバシバシ叩いての筋肉アピール。俺はもうすっかり見慣れてしまつて最早飽きを通り越して風景と同化してしまつていた。

「んじゃ早速配りに……」

「——頼もおー!!」

「おん？」

どこからか聞こえてくる勇ましい挨拶。

この声は、

「お、ちせエー！」

「おお、いらつしやい！よく来たな」

「うむ、お邪魔するぞ。二人とも息災で何よりじゃ」

この間の戦いを共にした者の一人。

ちせが牛車 (!?) に乗つてやつて来てくれた。

「うわすげえな牛だよオイ牛！」

「おお、スゴイな……生で見るの初めてだ」

「うむ、私も初めて目にした時は驚いたものじゃ。

日本の文化をこの国に知つてもらうため、先ずは敢えて古風な方式をとというのが大使館の考えの一つだな。

恐れ多くも私のような者の足で汚すことを許してくれているのだ。」

「へえ……あ、そつか今そういう時代だったな」

明治になって日本は欧米を初めとした諸外国と盛んに交流を行い国際化を推し進めていた、というのを日本史でやったことがある。葛城の記憶からそれが引き出された。

俺たちの世界の歴史と違い、ブリテン島を統治する国は『大英帝国』ではなくここ『アルビオン』だった。それでもこうしてちせのような日本人が遣いとしてやつてきていることを考えれば、あまりこちらの知る歴史と違いはないのかもしれない。

「時代……か、そうじゃな。今の日本が海外の列強諸国と渡り合えるほど強くなるためには、その技術と文化を取り入れていかねばならぬ時代にあるのは確かじゃ。」

「ん？なんか聞いたことあんなそれ……あ、わかった『富国強兵』だ!! 歴史の授業でわぶっ」

「あー猫さんがいたと思っただけじゃなかったあー!!」

万丈から失言が出るギリギリのタイミングで道路にダッシュ、わざとぶつかる。

(ベツタベタかよお前!!)

なんだよ授業で聞いたって!

正体がバレたらどーすんのよ!!)

(いってー……あー、悪い。そういやここ過去の時代だったっけ。あんま実感湧かねーけど)

「む、どうした?」

どこか痛めたのか?」

「あー、何でもない何でもないっす。

あ……そうだ、今日は何か用があつて来たのか?」

変にツツコまれる前に話を軌道修正する。

何が原因で俺たちの素性がバレる分らないからな。安全を期して悪いことはない。

もちろん、ちせを信頼してないわけではないが俺たちの素性を明かすということは明かした人間にも危険が及ぶ可能性があるということだ。どこの誰がライダーシステムを武力として奪いとろうとしてくるか分からないからな。彼女たちを護る意味でもまだ秘密にしておくのが賢明だろう。

「おお、そうじゃった。

お主ら、今日は暇か?」

「え? ああまあ急ぎの用事は無いけど」

「この薪も別に今日配んなくていいしな。

ちよつとくらい仕舞つといても腐んねえだろ」

「店長もまだ入院してるからどのみちまだ店開けないもん……とい

うわけで今日はもう暇になりました」

「うむ。それで実はな、今日はお主たちにこれを渡しに来たのじゃ。」  
そう言っただけが懐から取り出したのは、時代劇で偉い人が読ん  
でるような上下の端を山折りされた手紙だった。

「……これは？」

「日本大使館への入館許可証じゃ。」

「日本大……日本大使館!？」

え、これ貰っちゃったってことは……え、いいの!？」

俺たちただ日本人つただけで実質身元不明の根無し草なんですけ  
ど!？」

「つーことは……あ、まさか!!」

「ふっふ。万丈よ、約束を果たすぞ！」

「……マジか！」

「先日の感謝も込めて、お主たちを最高級の食事でもてなそう!!」

「……!!」

日本大使館で食事……てことはつまり!

「……米！」

「味噌!!」

「醤油!!」

「やった日本食イイイイイヤツホオオオオイ!!!」

万丈とジャンプ&ハイタッチ。

ついに、俺たちにも春が来たのだ!!

「おおお、そんなに喜んでくれるとは……!!こちらも用意した甲斐が  
あつたというものよ!

ささ、乗ってくれ。時間が惜しかろう！」

「うーすお邪魔しまーす!!」

「うわ中も豪華じゃん!ウルシだウルシ!!」

テンションマックスで牛車にイン、久方ぶりの日本食に思いを馳せ  
る俺たちを乗せて牛車がごとりと音を立てて走り出した。

道中、現代でも有名なタワーブリッジやビッグベンなどが横窓から

見えてちよつとした観光気分を味わっていると、不意にちせから質問を投げられた。

「ところでお主ら……結局あの”仮面らいだあびるど”とやらは何だったのだ？」

「!？」

……ああ、そーいあの後チーム白鳩全員から質問攻めに遭ったのを今度ゆつくり話すからと言ってはぐらかしたまんまだったな……

いや、きちんと必要な所だけ話すつもりではあるけども。うーんどうしたのか……

「……ちせ」

突然、万丈が真っ直ぐな目でちせを見据え、その質問に答えた。

「前にも言ったろ、”正義のヒーロー”だよ。

困ってるやつがいたら助けるし、ワルがいればぶつ倒す。目の前の誰かのための戦士、それがビルドだ。」

——そうだろ？

そう問いかけるような万丈の視線に、余計な考えで大切な物を見失いそうだった自分に気付かされる。

ビルドの、仮面ライダーの本質は何も難しいことはない、ただそれだけの事だったのだと。

「……そうか」

ちせは一度目を伏せ、また俺たちに向き直る。

「いや、過ぎたことを訊いてしまったな。

すまない、二人とも。」

そして額を床に付けた。

「い、いやそんな謝ることねえよ！」

「いいのだ。」

お主たちが何処で生まれ何処で育ち、何を成し何を笑い何に泣き何を捨ててきたか。それはお主たちだけの物じゃ。おいそれと他人が踏み入るものではなかった。」

「ちせ……」

なんで、俺たちにそこまで



「お主たちがたとえ何者であろうと、共に戦ってその時私が感じた感謝の心は紛れもなく誠のものじゃ。……私には、それだけでお主たちを信ずるに足る証となった。」

……そうか、そうだよな。

やっぱり俺の考えは間違ってたなかつた。

人が人を信じるのに、大した理由はいらねえんだな。

「それに……」

「それに？」

「『仮面らいだあ』という言葉がな、とても気に入ったのじゃ。日本語と英語、異なる言語の混じり物なのに何故か妙にこう……」合う”のじゃ。日本とアルビオンも、この言葉のように佳き繋がりを持てるような気がしてくるといふか……まあとにかく私はとても好きなのじゃ」

花が咲いたような笑顔だった。混じりけのない純粋な。

俺たちがずっと守りたいものだった。

「……何いい話してんだよ」

「ふふ。お主たちと話していると、なんだか日本に帰って来たような気分になってしまふな」

「牛車だしな」

気持ちのいい笑い声が車内を満たす。

「で、まあさっきのようなことをな？」

大使館の長である堀河公に話したのじゃ」

「……………マジ？」

笑顔から一変、顔面が驚愕に染まる万丈。

俺は先程渡された大使館入館許可証の封を開け、中身の一番左のハシコの上の文字を見る。

「あ、この名前がその……堀河さんか」

「うわよく読めんなお前」

偉い人の達筆と言えはって感じの文体だ。巧過ぎて逆に読みづらいヤツ。でも確かにそこには「堀河」と読めそうな文字があった。

大使館の運営を任されるほどの人物だ。きつと物凄く偉い人に違

いない。

国の偉い人と話したことがないわけではないが、氷室首相のような温厚な人である可能性は低い。下手な発言はしない方がいいかもしれない。

「日本大使館は国の要人が出入りする事の多い屋敷。日本人とはいえ一介の市民をそう易々と中に入れることはできぬ。ゆえに堀河公にお主たちの人となりとシヨーンとの戦いの仔細をお伝えした。」

「あ……そつかそうとか、悪いな気が利かねえで……つてじゃあさつき俺の言ったコトお前ちゃんと理解してんじゃねえか!!」

「あ、当たり前じゃー！」

さつきはその……堀河公にお主たちのことを勝手に話してしまつたことをそれとなく伝えるための苦肉の策で……」

「いーよそんなん気にするこたねーだろ！つーか折角美味しいメシ食わしてくれんのになん細けえことで一々怒つたりしねーよ！」

「私が気にするのじゃー!!」

「じゃあ気にしなきゃいいだろー！」

「それができたらこんな話しとらんわあ!!」

つて人が真面目に考えてんのに何してんだよこの二人は……

……でもまあ、こんな風に他愛のないケンカができるつてのは、今が平和な証拠だよな……なんつって。

そんなこんなで俺たち一行は日本大使館に到着。

「おお……！」

見れば金閣寺のように池の上に屋敷が立ち、そこかしこに鹿威しがあるというなんとも”昔の日本らしき”を全面に押し出したような設計だった。

そこでは初春の日差しが水面を煌めかせ、またそこに棲む鯉たちの泳ぎで美しい波紋を何重にも描いており、古き良き日本庭園の姿が目の前に広がっている。

「お、スゲエ鯉だよ鯉!!」

食パン千切って撒こうぜ!!」

「こんなところで売ってねーよ。」

ああでも綺麗だねえ……見事なこの体の線が水の抵抗を逃がすのに計算されてるといふか……」

「なあ、鯉の刺身は美味いってアレホントか?」

「罰当たりなこと言うんじゃないよお前は!」

これ多分一匹500万とかするぞきつと!!」

「ウツソマジかよ!」

n a s c i t a の売り上げ何か月分だオイ!」

「楽しそうじゃなお主ら……」

そんな久々の日本の風景にまた興奮していると、寄り道ばかりの俺たちに呆れたちせが乱暴に俺たちを屋敷へと引つ張る。

すると玄関に初老の男性が一人佇んでいているのが見えた。

「ただいま戻りました」

「うむ」

恭しいちせの挨拶に口をぐつと結んで少し頷くこの男、もしかなくともこの人が……

「さて……お初にお目にかかる。」

日本政府外交特使、堀河と申す。」

やはりだ、一目見て分かる。この人からは只事ではないオーラのような物を感じる。見た目の年代からして明治維新後の動乱期を生き抜いたからであろう、穏やかながらずしりと重い物を背負った強い男の気風があつた。

「そちらが桐生殿で、万丈殿か」

「あ、はい!」

初めまして、桐生戦兎です。本日はお招きいただき誠に」

「はは」

「あり……?」

え、笑い声?

「ああ、いやすまん!」

ちせから聞いていた話と違って随分と礼節を重んじた話し方をす

るからついな」

「ええ……」

ちよつちせさん？ 一体俺たちをどう紹介したんだよ！

あ、こら、目え逸らすな。

「ああ、コイツの敬語とかあんま本気にしない方がいいつすよ、自分の事天才とか言つて基本的に他人をナメてるんで。油断してつと金タカられますよ」

「嘘だろお前!？」

え、何？ お前まで俺を裏切るわけ!？」

つーかパンドラタワー初突入の時のことまだ根に持ってたのかよ!!

「ふつぎけんな!! ならお前だつて基本的にタメ口じゃねえかよ! 敬語も使えないおバカさんには言われたくありませんー!」

「……はああ!? 敬語くらい使えるし!!」

葛城ん家行った時だつてなあ! きちんと敬語で……うわ俺お前に敬語使つてたのかよ恥つっつず!!」

「今更かよー!」

「——いい加減にしろっ!!」

「痛っだっ!」

二人そろつてちせパイセンからのローキック。膝裏はマジで痛いからやめて!!

「さつきから見ておれば下らぬことできやつきやきやつきやと……猿ましらかお主ら!! ああ堀河公の御前でこのようなこととして……恥ずかしすぎて顔から火が出るわ!!」

「ゴメンナサイ」

「モウシマセン」

「気持ちが籠つとらん!!」

「アア痛い痛つってええ!!」

「膝裏はやめてやめアアアッ!!」

「ぶっふふ……はははははははは!!」

「ほ、堀河公!？」

——あやつべ!! ついいつもの調子でふざけちゃまったた!!

「誰だよ下手な発言するなって言ったヤツ!!……俺じゃん。」

「バカ!!」

「ははは……いや、久方ぶりに心の底から笑えたぞ。やはり鬱憤晴らしは笑いに限るな。」

「あれでも、意外と好感触……?」

「やはり聞いていた通りの気持ちのいい男たちだったようだな、二人とも。」

「……うむ、中々によい面構えだ。少し感じは違うが、まごうことなき日本男児の顔をしておる。それに、さぞや多くの苦勞をしてきたようだな。」

「!?」

「やつぱ只者じゃねえなこの人……優しかった俺たちを見る目が一瞬で鮫か鯨のように鋭くなった。」

「ああ、そうそう。日本人であるお主たちがなぜロンドンに居ついているかについては、大使館からは特に訊くことはない。安心して日々を過ごすがよい。」

「え、いい、いいんすかそれで!？」

「“おろしや”や”メリケン”では大昔に漂流してきた日本人の子孫だという者が結構いて、日本語学校で教師などをやっている……と、昔日本に来たプチャーチンだかハリスだかが言つとつたらしい。ならばこの国にもいておかしくはあるまい?」

「……………わああ」

「そういうことだ。よろしく」

トントン拍子で話を進め、こちらの身分を保証してくれた堀河さんは、笑顔でそう言つて右手をこちらに差し出してくださった。

「あ、よろ……よろしくお願いしますー!」

「うむ!」

「よろしくオナシヤス!」

「うむ!」

固い、大きな握手。大人物つてのはきつとこの人のことを言うのか

もしれない。

「さて、必要な話は済んだ……ちせよ」

「はっ」

「実は席の支度が整うのにもう暫しかかる。その間、少し庭を歩かぬか。勿論、その二人も共にな。」

「それは……よいのですか？」

「よいよい、減るもんでもなし。久々の政の関わらぬ付き合いだ、羽を伸ばしたい。」

「わかりました。」

「なあ戦兎……俺たちスゲエことしてるんだよな？」

「うん」

「全然そんな感じしねえんだけど」

「それな」

などと言いながら歩き出す二人に付いていく俺と万丈。堀河さんの庭のオブジェクトに関する蘊蓄を聞きながら石の道を歩く。

そこかしこで若草が芽吹いており、春の息吹感じる草むらを進んでいくと、やがて開けた場所に出た。そこには

「あ……………」

「おお……………」

「うまく土に馴染んだようで、今日がた咲いていたのだ」

満開に広がる——日本の桜があった。

「すげえ……………」

たった一本の細い樹に俺たち四人をすっぽり覆えるほどに広がった桜。

……そういえば、海外でも桜の鑑賞が定着したのは、明治になって日本から使節を送られた国々からだという話を聞いたことがある。その国の一つにイギリスがあった。

「……………」

万丈の頬を涙が伝っていた。

「……万丈？ どうしたのだ？」

「なんでもねえよ……」

鼻をすすって袖で目を擦る。

「ただちよつと……この国で見られると思わなかったし……ぐすつ」

——ねえ龍我、一緒に、お花見しない？

「すげえ……キレイだったから」

「……………そうか」

ちせはそれ以上口を開かず、じつと万丈を見つめてから、また桜を見上げた。

「なあ、堀河さん」

「どうされた」

「メシ……ここで食ってもいいかな。」

みんなで、ここで。」

「ほお……」

万丈の頼みを聞いた堀河さんはニヤリと笑って顎に手を添えた。

「それは良いな！ よし、さつそく持つてこさせよう」

「ありがとうございます」

ペコリと頭を下げる万丈。それだけ、この頼みに本気だったのだと気付いた。

「珍しいな、お前がそんな風に人に頼むの」

「いいだろ別に、たまには」

「知らない内に立派になっちゃって……お父さん嬉しい！」

「誰がお父さんだよ！ せめておじさんだろうが！」

「誰がオジサンだおい！」

「そつちじゃねえよ!!」

笑い声を響かせながら、運ばれてきた懐石や佐賀牛の鍋に舌鼓を打つ。

新しく知り合えた堀河さんともより打ち解けていき、ちせの学校で

の暮らしぶりや万丈のボクサーとしての活躍を着にして、日が暮れるまでお花見会。

春風の運んできた平穏の中、俺たちはただ今を楽しんだのだった。

夜、俺と万丈は店の屋根の上で星を見ていた。

ここは郊外。この時間まで明かりを付けている家は少なかったから、星々の光がよく見える。

小熊、大熊、獅子、小獅子、海蛇、山猫、猟犬、少し離れたところに蟹。ロンドンの夜空はまるで動物園のようだ。

「なあ万丈」

「どした？」

「俺さあ、仕事見つけたんだよ」

「マジ？」

「おう」

寝っ転がりながら、隣の万丈に報告する。

「俺、本を出す。

俺たちの、”仮面ライダー”の戦いの全てを書いた本を。」

「……できんのかよ？」

あのデータ向こうに置いてきちまっただろ」

「できんや」

きつぱりと断言する。

「俺たちちやんと生きてここにいる。」

そしてこれからもここで生きていく。

ま、いつかは向こうに還んなきゃだけどそれもわかんねえし……」

「……本かあ、それ俺の名前も載せていい？」

「キャラとしてなら」

「ええ、いいだろちよつとくらいー」



「じゃあお前文とか書けんのかよ」

「……………」

「いやそこは書いとけよ!」

ふと、空に一条の光が差す。

「……………あ」

見上げれば、大きな緑の流れ星が走っていくのが見えた。

c a s e X | l f i n .

case X—2 Tell me the meaning of this teardrop.  
2—①

かつて、私の全てはある男に奪われた。  
悪辣で下劣な、あの男に。  
私の心を踏みにじり、豚の貯金箱のように壊して捨てた。  
そして……知らない所で勝手に死んだ。

……許せない  
……許せない！  
……ユルセナイ！！

だから今度は、私が壊す。  
あいつが愛した人を物を、その全てを。



「持って来たぞ戦兎」

「おっ疲れさん！」

「いやあ来た来た来た来ましたよ！宝の山が！」

冬の寒さもすつかり失せて暖かい日が多くなってきた今日この頃、俺は執筆作業に没頭する間、万丈に頼んで町のみんなからジャンクをかき集めてもらっていた。

「なあ、こんなもんがホントに役に立つのかよ？」

「立つよ立つ立つ！」

「はあ……まあ理解してねえとは思ってたけど。しょうがない、ここはきちっと説明してやらねえと。」

「お前なあ、ゴミだと思ってバカにしてるけどこういうこまごまとした金属製品もなあ、きちんと錆びたとこ削って組み合わせれば、立派に新しい姿になって生まれ変われんだよ！」

例えばほらこれ！この針金！どんな形にも曲げられるし、絶縁体で覆えば機械部品の導線代わりにもなるんだぞ！最っ高だろ？」

「わかった！わかったから近えよ！ツバ飛ぶんだよ！」

「ったく……けっこう長い付き合いなのに未だに素っ頓狂なこと言うんだから。」

「まあ、お前のことだからなんかしら上手くやってくれんだろ？」

「もちろんだ」

「なら頑張れよ！俺はまあ……なんだ、コイツらの錆取り位なら手伝えっからよ！」

「おう、じゃあそんな時は頼む」

「オツケー」

でも万丈はこいつなりの長所があつて俺には難しいこと簡単にできたりする。

だから俺は、安心して自分のやるべきことに打ち込めるんだよな。「でもよくやるよなあお前、コイツら使つてドライバーの調整する道具創ろうなんてよ」

そう、それが今俺がやるべきことの一つだ。

この間のシヨーンのような力を持ったものが、シヨーン一人だけだとはとても思えない。ほぼ間違いなく彼と同じようにこの国で異形の力を持った者が暗躍している。その確信がある。

そして”ネビュラガス”の人体実験を行っていた秘密結社”ファウスト”のように、彼らに力を与えた者がいる可能性も考えられる。そいつらと戦う為にも、万全の状態で戦えるようにドライバーもアイテムもちゃんとしたメンテができる環境を整える必要があるのだ。流石にパソコンは創れねえけど、アイテム達の設計図はちゃんと頭に入ってるから大丈夫だ。

「あとで後悔すんのだけは絶対しねえように、時間があるうちにやれることはやっとかねえと」

「……そうだな。」

箱の中にある使えそうな金属製品をふるい分けする。今特に必要なのはさつきも言った針金と、あとはスパナや、クリップ代わりになる金属製の洗濯ばさみなど……お、この棒とかネジ取る方のドライバーに加工できそうだな、採用。

「そっちもいいけどよ、本はどうすんだよ」

「そっちは……今はちよつと保留な。最優先はこっち。」

ま、作業しながらでも書く内容を考えるくらいはできるから問題ねえよ」

「へえ、そうなのか」

論文もそうだけど文章ってただ座ってるよりも手え動かしながらの方が脳が活性化されていい文が浮かぶことが多い。そういう意味でも道具創りはメリットがあるな。

「んじや俺買い出し行ってくるわ。夜メシなにする？」

「そうだな……堀河さんからもらった味噌がまだあるから……あ、豚汁とかどうよ？」

「お、いいなそれ！」

なら豚と人参と、後は適当に野菜買うわ」

おいおい肝心なところ適当かよ……まあ最悪豚肉さえあれば何とかなるか。豚汁だし

「よし、じゃあ行つてら」

「おう、行つてくらあ！」

豚汁……あくやばい、待ちきれない！

やつぱこういう春先の寒い日は豚汁に限るよな。あとゴボウ食いたいゴボウ。あの素朴な味がな、豚のうまみと味噌に合うんだよ。……あれ、そーいやゴボウ売つてんのかなこの国

~~~~~

——万丈視点——

「ウシ、買った買った〜！」

豚汁だからやつぱ基本の大根と人参は外せねえよな。一応戦兎の好きそうなゴボウとかも買ったし、これで問題ねえだろ。

この商店街、近くにメシ屋が多いから結構食いモンの種類充実して助かるぜ。でも町のみんな安いジャガイモばつか買つててあんま他の野菜売れてねえみてえなんだよな。

工場に働きに出てるおばちゃんは忙しすぎて料理する時間がねえから茹でれば食えるこれで十分だつたけど……景気が悪いよなこの国。

「お、中華の屋台じゃん」

珍しいな……あ、そーいやここ最近インド料理の専門店とかも出来てたな。正直イギリスってマズいメシしかないイメージだったけど、意外と美味しいメシ屋もあるもんだな。

「美味そーうだなあ……つと危ねえ」

危うくユーワクされるとこだった……！

節約しねえとやべえって昨日戦兎と話したばっかなのに早速食欲に負けそうになつてどうすんだつたの！

くっそ、さっさと帰んぞ！

「……………(ゴクリ)」

ああでも……!やべえなんだあの麻婆豆腐のアカさ!?すつげえ辛そうだなオイ!! くそ……めちやくちや美味そうじゃねえか……! あーあれ!!映画とかで見るなんか四角い箱!!もうこの時代からあつたのかよ!! ダメだ!!あの手この手でユーワクしてきやがる!! さっさとずらからねえと!!

「…………ウツシ。抜けてやったぜ……………ん?」

おい待て。あの奥にある店……あのちっこいバケツみてえなの、何売ってんだ?

えーと……ぴー、あーる、おー、ていー、いー、あい、えぬ……ヌードル?

「…………あー」

あれもしかして、『プロテイン』って読むんじゃねえか!?ヌードル……つまりラーメン!!

間違いねえ!あれは『プロテインラーメン』だ!

しかも……やべえもうあと一個しかねえじゃねえか!!

「…………うおおおおおおおおおおお!!」

こうしちゃいらねえ!悪い戦兎!!この分は後で働いて返すからよ……今は許してくれ!!

これを逃すわけには、いかねえんだああああ!!!

「——すみません!」

「おう、いらっしやい!」

「これ一個ください!」

「これを一つ頂けるかしら」

「…………あん?」

「…………あら」

おいおい誰だよオレ以外でこれをおおうなんてヤツは……つてなんだこの女。白いコートにグラサンかよ。見ねえ顔だな

「偶然、ですわね。なんとというか」

「なあ姉ちゃん、ちよつとここは……あれ？」

「こいつ今、日本語喋って無かったか？」

「仕方ありません。RPS……いえ、ジャンケンで決めましょう」

「お、いつすよ」

……まあいいか。別に日本語喋れる奴なんてこの国でも珍しくねえし

「最初はグー！ジャンケン、ポン！」

取りあえず俺的に一番勝率の高いグーで勝負。んでそっちは……  
チヨキだ！

「っしや！」

「……うう、残念です」

つと、いけねえ。思わず喜んじまった……こういう時は静かに勝ちを喜ばねえと。相手に必要以上に嫌な思いさせたくねえしな。

「おめでとうございます」

「おう、ありがとな譲ってくれて」

「いえいえ、当然ですから」

潔いなこの人……物腰も柔らかだしよ。

同好の士としてちよつと嬉しいぜ。

……つと、そうだ早く買わねえと

「へい、おっちゃんお金。」

「……なあ兄ちゃん、悪いことあ言わねえ。今なら間に合うからその人に譲っとけ」

「え、なんて？」

「また今度タダで売ってやつから！」

今はその人に譲った方がいいってんだよ兄ちゃん！」

「あーすんません。俺アイキャンノットスピークイングリッシュ」

なんだろ、なんとなくだけど『横のヤツに渡せ』って言うてんのか  
な……

いやでもジャンケン勝ったの俺だぜ？どういうこつたよ

「い、いえ……大丈夫ですよ店長さん。」

こんなことであなただにひどいことなんてしませんわ」

「で、でもお嬢さん、あんたは……」

姉ちゃんまでなんか言ってるな。

遠慮してる感じかこれ多分。

「おい姉ちゃん、さつきから何の話してんだ？」

「あ……ミスター・バンジュー！これには訳が！」

「え？」

その呼び方どつかで……

「……あ」

「この場ではあまり素顔を明かせないので……これでお判りになりますか？」

「ああー！」

グラサンがずれて……その顔!!

「挨拶が遅れてしまって申し訳ありませんでした。

お久しぶりですね。御壮健そうでなによりです。」

「………うっそ」

間違いねえ……この人、ヒメさんじゃねえか！

「はあ……兄ちゃんやつと気付いたか」

「あ、あの……ミスター・バンジュー？」

……うわ、ちよー気まずいんすけど！

ヒメさんじゃん!!ガチのヒメさんじゃん!!

色々と世話になった人じゃん!!

何タメ口ききまくってんだよ俺エ!!

「……サーセンした!!」

「あ、いえーこちらこそさつきから失礼なことばかりで……申し訳ありませんでした」

おい……気い遣わせちゃってるよ……!!

俺も一時期はコスプレしまくってただろうがよ!!気付いとけやオ  
イ!!

くっそ……!!ああもうスツゲエ恥ずいよ……!!

……ああいやそれより!

「え、ちよ、こんなとこで何やってんすか!?!」



「あ……それはその……」

こつちの方が割と謎だろ。正直スツゲエ気になるしよ。

「実は私、こういった場所でのショッピングが趣味なんです。特に普段あまり目にしない珍しい物を探すのが好きでよく買い集めておりました。」

「あ、そうだったんスカ!」

「はい」

へえ。ヒメさんって結構お茶目だな。

もつとお堅い人かと思ってたけど、案外親しみやすいっつーか。

「なのでそちらのプロテインヌードルも、最近スポーツ好きの方々の間で流行り始めているらしいと通っている学校で耳にして、欲しいなあって思ってた来たんです。」

「あくなるほどそういう」

そんでミーハー気質な女子高生かあ。

いい意味でヒメっぽくねえのな。いや、むしろ好感度高えだろ。そんで顔もいいしよ。……スゲエ、無敵じゃん。

「……あ、そうだ!」

なら半分ことかどうツスカ?

このプロテインヌードル結構中身あるし、スナック菓子っぽいから分けられますよ」

「え……いいんですか?」

「モチつすよお!」

滅茶苦茶忙しいらしいじゃないすか王女の仕事って。

そんなでわざわざ買いに来たのに俺みたいなのが全部横取りって……俺だったら許せねえつすよ」

「ミスター・バンジョー……」

「あーそれと、ただの万丈でいいつすよ。呼びにくいつすよそれ」

そうやって俺は店のおっちゃんから貰った紙袋にプロテインヌードルの半分を入れてヒメさんに渡した。

「どぞ」

「でも……」

「いいんすよ。好きなモンを好きな時に食べないヤツがいるつてのは、見逃せないんす」

小さな幸せでも無くなっちゃうと結構人間を弱らせるからな……戦争中の東都の人たちがそうだったし。

それにこういうのは一人で食うよりも、人と分け合って食った方が美味えしな。

「……わかりました」

「お」

ヒメさんが、受け取ってくれた。

「そこまで言ってくくださるのに頂かないなんて、逆に失礼に当たりますよね。……ありがとう、万丈さん。」

「へへっ」

やっぱ……こういうのって気持ちいいな。

人と話してちゃんとお互いを分かり合えるつてのはよ。

「——あ、いた！」

見つけましたく〜！」

おん？今度は誰だ？

「もう、勝手にいなくならないでくださいよ!!」

前みたいになにか大げがでもするようないことがあったらって心配して……うう〜!!」

「あ、ご、ごめんなさいベアト！」

つい先走ってしまって、本当にごめんね！」

涙目になりながらヒメさんに髪を撫でられるちびっ子。あ、頭に団子ついてら。つてことは……

「あ……お前リス子か！」

「り、リスう!？」

そーいやヒメさんの付き人やってるつて、コイツらのアジトに邪魔した時に聞いたな。なんか団子の感じがリスのめっちゃ食い意地這ってる時の顔に似てるから取りあえずリス子って覚えてたけど……あれ、なんか違うっばいな

「あら……言われてみればちよつと似てるかも」

「ちよ、ひ……何ですかあ!?!」

「すげえ、表情かおがころころ変わってアニメみてえだなコイツ。やっぱリス子だわ。リス子決定」

「……つてさつきから誰かと思えばあなたこの前のチャンピオンさんじゃないですか!!」

「なんでこの御方と一緒にいるんですかあ!?!」

「ヒメさんこいつなんつってんスか?」

「バン”ジョーさ”ん!!」

「やべえ怒られてんのはわかるんだけど内容がわかんねえ。」

「やっぱ昔ちゃんと言語勉強しときゃよかったな……今更だけど。」

「ぬぬぬぬ……さつきから何ですかその無礼な態度は!許せません!」

「キリユーさんもあなたも距離が近いんですよ距離が!棄えてくださいー!」

「お、戦兔がどうかしたか?」

「ちよつと……ちゃんと私の話聞いてるんですか!?!」

「ベアト、落ち着きなさい」

「あう!も、申し訳ございません……」

「うお、一気に大人しくなった。」

「やっぱなんか小動物っぽいなあ、雰囲気か。」

「もう……万丈さんはまだこの国の言葉に不慣れで、そんな風に捲し立てたら困らせてしまうだけよ?他国の方にはそのお国の文化を尊重し、まずはそれに則ること。今日女王陛下に教えてもらったばかりでしょう?」

「はい……そうでした。うう……」

「あー、なんか空気悪くさせちまったかな……確かに俺ちよつとあんまきちんと空気読んだりとかしてなかったし、それで知らない間に變な事してたかも……やべえ、国際問題とかになっちゃうのかな……?」

「……あーねえベアト、確かまだあのパーティ、外賓用の席がまだ少し埋まってなかったわよね?」

「あ、はい。そうでしたけど……え、”姫様”まさか!」

「あ、こちら!」

「あ!すみません……つい口が滑って……」

ん?何の話してんだろ……もしかして俺を牢屋にぶち込むとかそういう話か!?

「あの……万丈さん」

「ハ、ハイイ!!すみませんでしたしよっ引くなら俺だけ」

「ちよ、ちよつと落ち着きましよう?」

多分きつと勘違いですから……ね?」

「……へ?」

え、違うの?

「万丈さんのおかげで今日は私、とても幸せな気分で眠れそうですから。それに貴方のような誠実な方とよく話せたのもとても。」

「あ……そうなんすか」

これ褒められてるってことで……いいんだよな?……いいっぽい  
な!

「あ〜!良かったあ〜!

もう俺ダメかと思つたツスよろ〜!」

「純粹なんですわね万丈さん。素敵です」

「いやあそれ程でも……あるかなあ〜!」

「ふふふ♪」

「(なんか……一々動きが仰々しいですねこの人。舞台役者さんみた  
い)」

「あ、それでなんですけど万丈さん。今週の日曜日のご予定は開いて  
おりますか?」

「日曜……は大丈夫だと思いますよハイ。」

「でしたら少し提案があるんです。」

実はその日、この国で活躍している外国人移住者の方々をお招きし  
た女王陛下主催のパーティーがあるんです。」

「え、パーティーツスか?」

「はい」

「へえ、なんかダンスとかするんスか？こういうの」

社交ダンスの腕を斜めに挙げてもう片方を相手の腰に据えるよく見るポーズを試してみる。

「そうそう、そんな感じですよ！」

それで、そのパーティーに万丈さんもお招きしたいのです。どうでしょうか？」

「……………へ？」

どうしよう。

……………チョー美味しいメシとか出んのかな？

あ、戦兔も誘わねえと！

『仮面ライダービルド』

第49+2話 バカがゲストで召喚中

「つーわけで俺今度パーティ行くことになったから」

「……………」

待て待て待て待て…………え、何!?なんで豚汁の材料買いに行っただけでそんなことになってんの!?

「でよ戦鬼、そこでも通訳してくんねえか?」

「いやお前、急にそんなこと言われてもよ……………」

「頼む!」

…………はあ、仕方ねえ。こいつ一人でそんなロイヤルな場所に放り込むとか何が起こるか分かんねえしな…………

「いいよ、やってやるよ通訳。」

「お、いいのか!」

「当たり前だろ」

　　「まったく俺のいないところで勝手に話進めやがって…………」

　　「ていうかプリンセスもなんでよりにもよって色々とめんどくさい事情を抱えてる万丈を呼ぼうなんて思ったんだよ。何か別の目的があるのか?」

「ていうかもう最初にプリンセスから俺も来るように言われてんだろ?」

「あ、おう。そうだよ、せつかくだから一緒に来いってよ。まあお前の事だから断るとは思ってたけど。」

　　「何だろうな、プリンセスから俺たちに何か用事でもあるんだろうか。もしかしたらビルドについての事かもしれないが、それだったらまた別にアンジェやちせから連絡が来るだろうし、多分別のだろう。」

…………あんまい予感しねえけど。」

「で、そのパーティっていつ——」

お玉で鍋の豚汁をかき混ぜながら万丈に問いかけたその時、

——ドン、ドン

「ん？誰か来たな」

手を打ち付ける音が建付けの悪い店の扉から聞こえてくる。

「見てくるわ」

「おう」

俺は万丈の返事を聞きながらキッチンから出て扉へと向かう。

こんな時間に誰だ……？今日は誰か来るような用事は無かったはずだけど……

「はーいどちら様で……」

「よっー」

「………あ」

扉の前にいたのは、見覚えのあるワインブラウンを綺麗に伸ばした緑の帽子の女。

「………ドロシーー」

「ご無沙汰だな、天才物理学者殿。」

通りのいい声とどこかオッサンじみた手の動きで挨拶してきた彼女は、先日のショーンの事件で知り合った隣国からのスパイ、”チーム白鳩”のメンバーの一人であり、そのリーダーである。

しかし知り合ったと言っても俺も万丈も特に行動を共にしたわけではなく、あまり彼女については知っていることが少ない。強いて言えば酒好きでパンを焼くのが上手い、ということぐらいか。

「へえ、男所帯にしちや意外と片付いてるじゃん」

「うおっ」

って勝手に上がられてるし！

いやまあいいんだけど……何か一言くらいあってもいいじゃないのよ。

「おくい戦兎誰が来……ああ！あんた！」

「お、バンジョーだ。それに……お、なんかいい匂いするな。何作ってるんだ？」

そう言っつけてやらせると笑うドロシー。

その肩書とは釣り合わないまるで緊張感の欠片もない彼女の様子に違和感を覚えながらも急ごしらえの狭い客間に通す。

とりあえず椅子に座って万丈が茶を淹れるのを待ちながら、彼女と話をすることにしよう。

「で……何しに来たんだ？」

「いやいや、噂の”怪人ストライプ”がどんな暮らしをしてるのか興味があつてね。それでちよつと様子を見に来たんだよ」

「……”ストライプ”？」

縞模様、シマ……あつ

「……ビルドのことか！」

「ああ、ホントはそんな名前なんだっけ」

「え、噂になってるってマジ!？」

「マジマジ。多分、どつかであの戦いを見てたやつがいて、そつから色々話が拡がったんだろうね。ほらこれ、昨日の新聞」

ドロシーがカバンから取り出したそれを受け取って、中を見てみると、端っこの方に小さく何やら床屋の軒先に置いてあるあのオブジェをそっくり人の形にしたような何かのイラストが掲載されていた。

「……わーお」

「今日は何処行つてもこれの噂でモチキリでさあ……で、丁度あたしその正体を知っちゃってるワケだし、折角だから色々オハナシさせてもらおうかな……。それで……ん？」

いや、いやいや……なんつてコメントしたらいいんだこの絵……色遣いはほ同じなのにもまるでヒーローに見えないってこれ……うわ、やべえ超シヨック……

「おいおいなんだどうした、頭痛か？」

「なんでもないっしゅ……」

「できたぞー」

……サンキュー万丈！

いいタイミングで来てくれたなオイ！

「おいほら見てくれよこれえ！」



「おん？なんだこれ……床屋の前にあるアレか？」  
首を横に振る。

「俺俺、ビルド。」

「……ああ〜！なるほどなあ！似てる似てる！」

「オオイ！どこがだよ!!そこは似てないってキレるところでしょうが!!」

「そうか〜？よく描けてっと思うけど……」

「……………」

つとそうじゃねえや。

新聞にビルドが載っちゃまってること、もしかしてアンジェたちもそうなのだろうか。

「……ああ、あいつらは大丈夫だよ。こういうのってコツがあつてさ、上手く顔がばれないように立ち回ってるの。ま、今回はこっちの方がインパクト強かったつてもあるだろうけど」

「そんなもんなのか」

「そんなもんだ」

ううん……はぐらかされてる気がしないでもない。そういや紗羽さんもこんな感じだったな。『知らない方がいいこと』は彼女らにとつてもやはりあるのだろうか。あまり突っ込んで聞いても迷惑だろうな。スパイってそういうもんだろうし……あれ、そういやドロシーたちは何故スパイをやっているんだろう

「なあ」

「ん？」

「なんで君たちは、スパイなんて危ない仕事をやってるんだ？」

「……………」

口にしていた湯呑をテーブルに置いて、しばし黙考するドロシー。その表情はあまり晴れやかではなかった。

やはりこういう質問はしい方がよかつただろうか……

「夢のため、かな」

俺の心配をよそに、彼女は吐息交じりに語り始めた。

「昔は食ってくために仕方なくやってた、でも今は自分の夢のために

頑張ってる。辛いこともたくさんあったけどね。あいつらもおんなじさ。みんな自分の夢の為に頑張ってる」

「夢……」

「ああ。でも何の夢かは内緒だぞ？バラしちゃうと叶わないかもしれないからな」

「へへ、そっか」

「……何笑ってんのさ」

「いや、ドロシーがいい意味でスパイらしくなかったからさ。」

笑顔で将来を語れるってことは、今を幸福に生きている証だからな。それだけでも目の前のドロシーが何かに追い詰められてスパイをやっているわけじゃないのが判った。彼女については今はそれで十分だ。

「ううくん……あんたみたいな子供に褒められてもなあ、口説くならもうちよつと年食ってから出直してくれ」

「おい」

誰が子供だよ。っーかそういう意味で言ったんじゃないやねえし。……って俺こう見えても肉体年齢はもうすぐ27になるんですけど

!!

「……ええッ、マジ!？」

うっそアンタ年上だったわけ!?!……かあゝゝマジか!!」

「ちなみに万丈は……あ、お前年と歳いくつだっけ?」

「23」

「だつてよ」

「……その顔でえ!?!」

「ぶふッ」

「おい何笑ってんだよ!?!何言われたんだよ!?!」

やつば久々に壺った。

ああでもそっか、俺たち日本人だもんな。身長も骨格も欧米人とは大違いだし、現代でも大人の日本人旅行者が現地人に子ども扱いされたつてのはよく聞く話だ。

「ああーなるほど、そっかああのオッサンたちもちっこかつたなー

……ちせも年の割に色々細っこいのはそういう関係だったわけか  
……いや納得納得」

本人が聞いたら袈裟斬りにしてきそうだなおい……

「つと、そうだ鍋見てくる」

「あ、万丈ゴボウ入れた？」

「入れたー」

……ならあと少し煮たら完成か。いいじゃないいいじゃない。

「あ、じゃあ折角だしドロシーも一緒に食べていけない？」

「え、いいのか？」

「いいよいいよ。こういうのは大勢で食った方が美味しいからな」

「——戦兔ー、味噌いれてくれー」

「はいよー！……じゃ、少々お待ちを」

「よろしくー」

味覚の人間離れ（ガチ）した万丈に味付けを任せるのが自殺行為だ  
ということをご最近の限界自炊生活で思い知ったため、料理の最後  
の仕上げは全て俺が取り仕切ることになった。かくして数少な  
い生活の楽しみの一つである食卓の平和は守られ、突然の訪問にも安  
心しておすそ分けができるのだ。

いやマジでヤバいんだよ万丈の舌。今にして思えば、幻さんの手料  
理をバクバク食いまくっていたことにもう少し早く気付いていれば  
よかったのだが。

とまあそんなこんなで。

「はいできたできましたよー〜じゃん、豚汁！」

鍋ごとテーブルにどーん！

火の通った豚肉のいい匂いがゆらゆら湯気に乗って鼻腔に届いて  
いくー！こいつは絶品ですよ奥さん！

「ほお、見たことないスープだな

何入ってるんだこれ……うわなんだこの野菜の量！よくやるな  
ー！

それを上から覗き込んだドロシーが驚きの声を上げる。確かに多  
少奮発したがそこまで驚くほどだろうか

「いやいや、普段からこんなたくさん種類使わないって！下ごしらえの時間ももつたいたい！ジャガイモだつて一々皮剥くの面倒だから切つてそのまま油で揚げちゃうのにさ……ホント変な所こだわるよなあ日本人」

「あー、そういう感覚なのねこの人たちって……イギリス料理の評判がよろしくないのもそれなりに理由があつたわけか。」

「ほい、皿」

「お、サンキュ……ほいっと。」

「あ、箸がないじゃない……ドロシー、フォークでいい？」

「いいぞ。こつちの方が使いやすい」

「万丈から手渡された深皿に豚汁を次々よそつてテーブルに並べていく。さらに別の鍋で炊いた白米（これも日本大使館からのお土産）もよそつていく。」

「おっほ、ツヤツヤだよ……」

「今日は失敗しなかつたぜ俺！」

「んナイス！」

「漬物も添えて……じゃん！簡素ながらしっかりとバランスの整つた食卓の完成だ。」

「「いただきます！」」

「イタダキマス」

手を合わせて挨拶。

「……あら、ドロシーも言つてたな今。この人にしちや珍しい。」

「ちせもいつも言つてるからさ、覚えちまつてんだ。」食材に感謝して大事に食べます”……つて意味だっけ？これ。畏まるよなあ日本人はホント」

「おお……」

「なんかあれだな、これちよつとしたホームステイだな。」

「ドロシーもなんやかんや日本文化に好意的だしイイ感じに異文化交流しちやつてるよ俺たち。」

「……ん……んん!？」

「お……」

早速豚汁に口を付けるドロシー。高校球児もかくやという勢いで  
がつがつと食べていく。口を離れた隙に感想を伺ってみるか……

「どう？どうよ？」

「あー……何味って言ったらいんだろこれ……ううん……」

「（お、おい！大丈夫なのかよ!?）」

「（ノンノン、焦るんじゃないよ……こういうのは焦らされた分だけ感  
動がデカいんだから。待ちなさい万丈君）」

「（ウス）」

「……あ。」

「!!」

「複雑すぎてわからん!!」

「おい!!」

流星にそれはないでしょうよ!!いやグルメポーターばりのコメ  
ントを期待してたわけじゃないけど……でも粘ってくれよそこは!!  
もう!!

「いや美味いよ……美味いんだけどさ！

なんつーかこう……美味さの種類が一口の中に多過ぎてどれを味  
わつたらいいのかわあかんなくなっちゃってな!?あ、普段食ってん  
のが分かりやすいのばっかでさあ……いや悪い！あたし食いモンに関  
しては貧乏舌なんだよな！」

あ……そういうことね……

この国の食に対する関心はが日本と違って大分薄いもんな。感染  
症予防のために食材は食えなくなるギリギリまで火を通してそこに  
塩や胡椒などの味の強い調味料で味付けする訳だからもう一々”味  
わって食べる”つてのが難しいのだろう。

「あはは、いやワインなら利きができるくらいには自信あるんだけど  
ねえ〜」

これはちよつとドロシーに申し訳ないな……彼女の口の合いそう  
な料理も食材も今はないし……あ、そうだ。あれがあるじゃん！帰る  
ときにお土産として渡そう。

「——なあ、こんな顔の女を見たことないか？」

食事も終わり談笑していると、ドロシーが一枚の似顔絵を見せてきた。

それはつり目に短髪の女の絵だった、明らかにカタギの雰囲気ではない、一度見たら嫌でも印象に残りそうな整った顔だ。

「いや……悪い、知らない人だ」

「あー……俺もだ。見たことねえ」

「そっか、ならいいや。見かけたら今度教えててくれ。」

そう言っただロシーはさっさとその絵をカバンに仕舞ってしまふ。

……仕草の雰囲気からして、もしかしたら彼女の仕事に関わる人物だったのかもしれない。

「……なあ、その人が何かしたのか？」

試しに、訊いてみる。

「いやあ、ちよつとした人捜しでね。知り合いに頼まれちゃつてさ」

”頼まれちゃつて”を強調した話し方。

やはりスパイとしての仕事なのだろう。わざわざぼかして教えてくれたつてことは、おそらくはこれ以上深入りするなよ、という警告だ。

「そっか。大変だな」

「ホントホント！大変だよ全くさあ！パーティだなんだつてこの慌ただしい時に……はあく……あ、やば足つった！」

「おいおい……」

やつてゐることは非日常的なのになんでこんなに週末のOLめいた雰囲気が出せるんだこの人……ある意味で大物なのか？

「あー……あ、そうそうパーティだパーティ。アンタら二人、プリンセスから直々に招待されてるんだつてねえ？」

「「あ」」

そうだよすっかり忘れてた！

ドロシーも知つてたのか！……あ、いや同じチームなんだし当然

か。

「おいおい大丈夫かよ……こりやあべアトがエキサイトするわけだわ」

「……万丈、パーティーいつだよ」

「え？ああ来週」

「……で、どんなパーティーだつて？」

「は？どんなつてお前……パーティーつてみんなでワイワイ食ったり遊んだりするだけだろ？種類とかあんのか？」

……………。

「……だそうです。」

「窮地じゃねーか！」

仰る通りです……万丈にロイヤルなパーティーがどんなもんか知つてると期待する方が間違つてたよね!!絶対偉い人に失礼なこと言つてヤバいことになるね!?

「うーわ、間違いなく国際問題になるぞこれ……やっぱ様子見に来て正解だったな」

「申し訳ない!本つ当に申し訳ない!!」

「何謝つてんだ？」

「お前が万丈だからだよ!!」

「どういうことだよ!!」

ああ……仮面ライダーとして首相官邸によく足を運んでたあの頃、万丈がやっていたことと言えば……旗をバットにして遊ぶ、首相を巻き込んで落としたサイフを探す、首相室でプロテインラーメン食つてその臭いで部屋を充満させるエトセトラエトセトラ……氷室首相の人の好きで許されてたような数々の悪行をこの国のお偉方の前でやらかしてもしたらどうなるか……

「泣きたくなつてきた……」

「大変だなあアンタも」

そうですねえなんですよ。だからお助け!!ヘルプミープリーズ!!

「ああ大丈夫大丈夫、流石にプリンセスもズブの素人をいきなりパーティに放り込もうとは考えてなかったみたいだから、明日か明後日に

ウチの学校に来ていいってさ。簡単なマナー講座ってヤツだ。チー  
ム白鳩総出で特別に教えてやるよ。どう?」

「……行きます!明日!」

「そうこなくっちゃ!」

ぱちんとウインク。ああ、ドロシーが天使に見える……!ありがたい  
やく……

「——てことでお前気合入れて覚えろよ、マナー。」

「お、おう……わかった。誘ってくれたヒメさんの顔に泥塗るわけに  
はいかねえからな」

万丈にさっきまでのドロシーとの話を要点をつまんで説明する。  
ようやく自分のエチケツト観のオツペケペーっぷりに危機感を覚え  
てくれたようだ。

「よろしくお願いします!!」

「おお、威勢がいいな……ま、その調子で頼むよホント。あ、そうそ  
うイイコト教えてやるよ。これ、最近ベアトが食いたがった新作の  
バターライケーキなんだけど……持ってきてくれたら多少は優しく  
教えてくれるかもよ。多少」

「おお、あ、ありがとう……」

ドロシーから受け取ったチラシにそれが売ってる店の名前と地図  
が記載されている。お菓子好きなんだなあの子……うん、そうだな。  
授業料として買っていいこう。

「んじや、用も済んだしそろそろお暇しようかね」

「あ、送っていいこうか?」

「いいよいいよ、そこらの男に押し倒されてやるほどヤワな鍛え方し  
てないからさ。厚意だけ受け取っとくさ」

「おお、ユー強いじゃん」

「まあね」

「……あ、そうだこれ」

「ん?」

「お土産。よかったら飲んでくれ」

「お、酒か!?!何?何くれんの?」



”3月生まれの雄鶏から作ったコックエール”だってよ。万丈の知り合いのボクサーがくれてさ、いっぱいあるからおすそ分けするよ”  
「マジか!? うっわ超助かる!!」

「おう、色々教えてもらって助かったしな。ほんのお礼だ」

「はあ〜! 気が利いてるう〜!! 好きなんだよなこれ〜!!」

おお、滅茶苦茶嬉しそうだ。人にプレゼントしてこんなに喜ばれたことってあんまりないかも……こつちも嬉しいななんか。

「(なんかすげえ酒好きみてえだな)」

「(みたいね)」

「いやあ人には優しくするもんだねえ……今日は楽しかったよ、二人とも。またご馳走してくれよ」

「おう、こつちもありがとう!」

「またな〜!」

「バイー!」

うん、色々と前途多難だけど、こういうちよつとした幸せがあるからまた明日も頑張れる。さて、片付けして明日の準備をしますかね  
……

——ドロシー視点——

夜道。

街灯で照らされた道を進みながら、さつきまでの”観察対象”との接触について纏める。

”KAMEN RIDER BUILD”

その能力ははつきり言つてデタラメの一言だ。アンジエとちせからの報告を聞いた時は寒気がしたよ。今のあたしらでどうにかできる範疇を軽く超えている。

ノルマンディー公のような政治的権力を持った相手なら交渉材料次第でまだ勝ち筋が見える。が、こいつは違う。能力の換装によりどんな状況にも対応してくる、ヤツは恐ろしいほどまでに効率化された”軍事力”の結晶だ。何処のどいつがあんなものを思い付いて開発したのかは知らないが、きつと相当にキマってる技術者に違いない。もし相手するとなれば、一国の軍隊並みの武力が必要だ。それだけで未知で強大なテクノロジーだからな。

そしてその使用者の所見を正すため、あたしは今日ソイツの住居に突入したわけだったのだが……。

「なんか……普通にまでなされたんだけど」

メシもご馳走になつて？

話も弾みまくつて？

特に予定してなかった助言までしちゃつて？

「挙句の果てにこの土産……よりよってあたしのお気に入りだし」  
……………う~~~~ん。

「ま、いいか。」

考えるのやめた。

いやいやあんなどこにでもいそうな普通の兄ちゃんがさあ？まさか街中で大暴れとかするわけないって!!

「あ、でも普通とはちよつと違つたな。

なんか優しすぎるよアイツ。気持ち悪いぐらい」

それが、今あたしのセント・キリユーに……KAMENRIDER BUILDに対する印象だ。取りあえず、今は特に問題ないだろう。

「それよりも……」

キリユーにも見せた”あの女”の絵。

見れば見る程イラッと来る顔だよホント

「あんた今何処にいるんだ、なあ、”Z”さんよ。」  
もう春だつてのに、まだまだロンドンの夜は寒かった。

——明くる日、良く晴れた午後。

俺と万丈はとある場所へと足を運んでいた。

「おお、めちやくちや兵隊いるな」

「そりやあ国の要人が通ってるからな。いるだろ」

クイーンズ・メイフェア校。

朝店に届いていた招待状に集合場所として記されていたのがこの学校のとある一室だった。

なんでも彼女たちはこの学校に在籍し、そこでスパイ活動の拠点とするために使っている部屋らしい。

「警備が嚴重な割には、ヒメさんから貰ったパーティの招待状見せたらパツ、とすぐ通してくれたよな」

「プリンセスがそうするように言ってくれたんじゃないか？

俺たちがたどり着きやすいように。」

「あそつか……ふくん。」

お！ここ家庭科室じゃねえか!?

見ろよ戦兎！クツキー焼いてるぜ！」

「窓にひつつくんじゃないよ恥ずかしい……」

不審者に見られちゃうでしようが！

ほらもー、早速すれ違う生徒さんに変な目で見られたじゃん。

「クツキーなら後で好きなだけ買って食べばいいでしょうがまったく……ほら行くぞ！」

「おわっ！」

いやしんぼドラゴンの襟をつかんで廊下を歩く。

それにしても昔の学校っていうからなんかこう、木造建築を想像してたけど、そんなことなかったな。セメントか？かなり頑丈そうな施工だ。それだけこの学校にかけられている期待が多いのだろうか。

聞いた話によると、この学校は女王様の意向で人種や身分に関係な

く、様々な生徒が通うことができるらしい。日本人であるちせが実際に在籍しているのだから確かだろう。

……でもこの国の世情を思えば、かなり挑戦的な校風ではないだろうか。俺たちの生きた時代よりもずっと強い差別意識が蔓延るこの国で、言葉と肌の色の壁を越えようというのは並大抵のことではない。人と人が理解しあえるというのは難しい。

だからこそ、偶然とはいえ、それをなせる人材を育てようとするこの学校に招かれたことが、俺の心を温かくさせた。

「あ、そうだ。万丈これ」

「あん？……あれ、これお前のスマホと……なんだこれ、イヤホンじゃねえか。どうしたんだよ？」

「そいつはお前専用の翻訳機だ。貸してやるから試しに使ってみろよ。そこが一番下のアプリを立ち上げてイヤホンに音声を聞かせるだけで、何語でもすぐに和訳して聞かせてくれる」

「え……マジで!？」

「相手に話すときはアプリを立ち上げたままビルドフォンに声を聞かせれば、少し時間は掛かるけど英語に変換してそいつが代わりに話す。これでお前もあの子たちと多少はマシな会話ができるようになるだろう」

「マジスゲえ……ありがとな戦兎!!」

「壊すなよ?」

流石にいつもいつも俺が万丈の通訳ができるとも限らない。だから万丈一人だけでも日本語の通じない人との意思疎通ができるように、”壁”を越えられるようにしておく必要がある。

そこで俺の愛バイク兼スマホの『マシンビルダー／ビルドフォン』の出番ってわけだ。

ボトルさえあれば充電の必要もないからどこでも使えるし、あと万が一の時にもバイクとして足にもなる。

ネットも他の端末も存在しない世界でだって、こうして俺の発明はちやあんと活用できるんだ。

「クツキー食いてえ!!」

『クッキー食いてえ!!』

「お、スゲエ!!英語が聞こえる!!」

……活用できるんだよ。

——そして歩くこと数分。

「お、ここだな」

大きな校舎の隅っこにある、“部室”と書かれたこの部屋こそ彼女らの拠点。今日俺たちが招かれた場所である。

「イヤホン付けとこ」

万丈が耳に装着し終わるのを確認し、静かに扉をノックする。

『失礼しまーす』

「——あ、は〜い今行きますね〜!」

聞き覚えのあるこのほわっとした声は恐らくベアトリス。聞こえてからすぐに彼女の歩く音が近づいてきて、扉が開いた。

「こんにちは〜!」

可愛らしい笑顔で出迎えてくれたのはやはりベアトリス。所作と制服の感じからまるでメイドさんのように見えるが実際はもつとすごいプリンセスの侍女さん。俺たち平民からすればかなり偉い身分だ。今日からは粗相がないよう振舞わないとな。

「今日はよろしく、お願いします」

デキる大人らしくピシッとお辞儀。平常心で緊張しすぎないように滑らかにやるのがコツだ。

「はい!こちらへどうぞ〜」

『おう!お邪魔しまーす!』

「オイ万丈!もうちよつとていね」

——ベシッ!

「ツツツア!!」

「……早速やってくれましたねバンジョーさん」

「!？」

「え……え、何今の!？」

……何それムチイ!？」

まさかの行動に度肝を抜かれた俺と万丈。なんとベアトリスが突然、馬用のムチ（！）で万丈のふくらはぎをぶつ叩いたのだ！

「部屋に入ろうとするなり私の案内を無視して一人で勝手に進もうだなんて……言語道断です！」

ちよ、思ってたほうとは別ベクトルに厳しいんですけど!?

『怖っ！ちよ、こいつ怖いんですけど！』

あ、細かいところも英語で言ってる。

ちやんとアプリ使ってるな！よかったよかった……いやよかねえ  
ンだけど。

「あれ？今その子から声が聞こえたような……」

『ああこれ、翻訳機だよ翻訳機。』

ここに日本語をしゃべると英語にしてくれてんだよ。

戦兎が創ってくれたんだけどよ、マジスゴクね?』

「はあ……ええ?」

ムチを落とすし、目を丸くして固まるベストリス。どうやら俺の発明品の素晴らしさをいち早く理解してくれたようだ。

さて、ここは俺がちゃんと説明――

「す、すごいですね！わあ、そんな便利な物が……へ、へえー……あはは」

……あれ、なんか微妙な反応。

『感嘆』というよりは『残念』そんな感情が籠っていきそうな驚き方だ。

……何だろう、何か彼女に悪いことをしてしまったのか？

「……あ、それよりも！もうお勉強は始まってますよバンジョー  
さん!!」

そんな俺の思考を遮るように声を上げるベアトリス。わざと大きく、高くしているような声色だった。

「まずは正しい挨拶、あたっ！」

「逸り過ぎじゃ」

音もなく現れたちせが背後から軽い手刀。しかし叩かれたベアトリスはとてつ痛そうに頭を押さえる。

「……何するんですかあ!?!」

「ムチはないであろうムチは……武術ならばともかく、礼節を教えるのにそんな指南の仕方は逆効果ではないか？」

「うう~~~~~……」

落ちていたムチを没収するちせを恨めしそうに見つめるベアトリス。止めに入った理由が意外にも説得力の高いものだったが、もしかしてちせがそうだったのだろうか……

「万丈も……」

「へ？」

「はあ……いや、何も言うまい」

「あ、おい！……行っちゃまったよ」

なんだ今の……視線でそう俺に伝える万丈。

いや、俺にもわかんねえよ。……多分、さっきのベアトリスの妙な反応と関係があるのかもしれないが、少なくともそれは俺から言うべきではないということは確かだ。

「……あ、そうだこれバターフライケーキ。一日限定20食のイチゴいっぱいなのやつ。良かったらどう？」

「え!!!?」

でもそれで何もしないのは俺としても本意じゃない。

なので早速ドロシーに薦められて買ってきたケーキを渡す。

ベアトリスはゆつくりとケーキを取り、袋の中身を確認した。

「わ、これあの……あ……あり、ありりりありがとうございませう……」

あ、お茶淹れてきますね！」

そう口を震わせながらお礼を言った彼女はそそくさと部屋の奥へと駆けこんでいく。

どうやらドロシーが言っていたことは正しかったようだ。

『おお、めっちゃ喜んでな』

「だろお？あたしの言ったとおりだ」

『お、ドロシー』

「お邪魔してます」

「はは、ああ。ま、ベアトも悪気があってやってるわけじゃないからさ。勘弁してやってくれよ？」



『おう。わざわざ教えてくれんのに文句なんて言わねえって。……まあちよつと痛かったけどよ』

「はは、男らしいじゃん。その調子で頼むよ。」

「……いやそれにしてはどうなってんだそれ？」

その耳のと……なんだ、そのちつこい……手鏡か？」

万丈との会話もそこそこに翻訳機であるビルドフォンに食いつくドロシー。まじまじと観察しながら万丈に問い詰めはじめる。

それに万丈はさつき俺が言ったことをぼんやりとだが伝えていく。

「はあく……こりやまた、えらいもん作ったなああんた！」

こんな便利なもん、特許でもなんでも取つちまえば一瞬で大金持ちじゃないか？」

「あー……」

何と言つたらいいか……あ、そうだ。

「実はもう同じのが創れないんだよ。」

ちよつと稀少な部品が必要で、それがもう『知ってる限りどこの国でも』手に入らない。」

「ありや」

『あとこれ多分戦兎にしか創れねえから、いっぱい創つたりとかはムリだぞ』

「あー……まあそりやそう簡単には作れないよなあ。」

「残念ね」

「うおっ!？」

背後から突然放たれた声、俺は驚きで飛び上がりそうになった。

「本当に貴方が造つたの？」

「もちろん。何なら仕様を説明しようか？」

「まず集音方法の原理は小さな金属板を……」

「興味深いけど後にしてくれる？」

「オウ……」

「アンジェ、プリンセスは？」

「一緒よ」

そう言つて体を90度横に向けるアンジェ。すると、誰かがこちら

へ歩み寄ってくるのが視界に入った。

「ただいまーみんな……あら、キリユーさん、バンジヨーさん！いらしてたのですね！」

そこにいたのは誰であろう、今日俺たちをここに招き入れたその人、プリンセスだ。

彼女も他のチームの子たちと同様、この学校の制服だ。しかし彼女の持つ高貴な雰囲気は僅かも薄れてはいない。こちらに抱かせる緊張感はややパイ服と違って顔がはつきり見える分、数割増しで強まっていた。

ここでもしっかかり腰を曲げて挨拶しないとな。

「あ……ンンッ。」

本日は、お忙しい中お招きしていただきありがとうございます

「んちはー!!」

………ちよ、

「(おま……この筋肉バカ!!

運動部じゃねえんだぞ！ 変な声の伸ばし方してんじやねえよ

!!)」

「(あん？いやこれは別にヒメさんをナめてるとかそうゆんじや……)」

「(“ヒメさん”もやめなさいよ！ 王族は極道じゃねえんだぞ!?)」

「ふふっ。お二人とも、お元気そうで何よりです。」

「——ええ!？」

今の不敬語、完スルーでいいんすかプリンセス!?

「急なお誘いにも関わらずいらしていただいて、ありがとうございます。」

「いやもー、全然問題ないっす！俺ら基本ヒマなんで！」

あ、でもたまに試合とかあるんでそんな時はちよっとムリなんすけど……」

「もちろん、お二人のご予定を最優先してくださるほうが私としても嬉しいです。」

街のスターを独占なんてしちゃったら、きっと街の人たちに嫌われ

「ちやいますから」

「そんなことねえつすよそんな」

あ、翻訳忘れてた。ヒメさんメチャクチャ美人だから嫌われるわけねえつすよ〜!」

「あら、お上手ですのねバンジョーさん。ふふ」

「ちよつとプリンセス」

「あ、そうだわ!ねえアンジェ、今度一緒にバンジョーさんの試合を観に行きましようね。アンジェもきつと楽しめると思うの!」

「いやだから……はあ、わかったわよもう」

ええ……いや、いやいやいやいや

「ほらな、大丈夫だろ?」

うるせーよお前……なにどや顔してんのよ。

「……プリンセスが良くてもなあ、絶対他の偉い人が怒るでしょうが!」

「それぐらいわかってるよ。大丈夫だって!な!

つーかよ、今日はそうゆー細かいことを教わりに来たんだろーが。忘れてんのか?」

「(うっ!)」

「(お前は俺を馬鹿にしすぎなんだよ!」

お前といりや、嫌でも頭使わされるっつの!!)」

ば、万丈のくせに……!」

くっそ、うまいこと言い返しやがってこいつ……!」

「何をこそこそしておる」

「! な、なんでもないけど? なあ?」

「お、おう!」

「はは……仲いいなああんた達」

「『そんなことねえよ』」

「いやあるじやろ」

「「……………」」

「ぶぶっ」

くっそ……なんだかちやんとしようとするのが馬鹿らしくなって

きちやっただじやないの。

はあ……分かったよ。俺も自然体で行くよ。なんか疲れてきたし。でも最低限敬語は外さないようにしないと。そこはきちんと弁えよう。プリンセスが偉い人であることは紛れもない事実なのだから。

……あ、でもプリンセスといえば、

「あのプリンセス、俺たちの呼び方、変えたんですか？」

「あ、はい。万丈さんから、あまり自分たちに堅苦しい呼び方をしなくていいと。」

「(……おい)」

「(え？ 別にいいだろ?)」

「(よかねえよ!)」

ああもう、何やつてくれちゃってるのよこいつは……

「……………(あの子が本心から男と親しげに話してるだなんて、よっぼどこの万丈龍我という男が純粹だということかしら)」

アンジエもなんか訝しげに見てくるしさ……いやこつちだつて困ってるんですけど……でもまあいいかこの際。下手にツツコンドも悪いしな

「お待たせしました〜……あ、姫様！お帰りなさいませ！」

ベアトリスがティーセットとバタフライケーキを持って部屋の奥からやってきた。

彼女がテーブルにそれらを置きながらプリンセスと談笑している間に、俺たちはちせとドロシーが持ってきた椅子に座る。ちよつと狭めだが、テーブルはムリなく七人が座れる形になっていた。

「あら、ふふふ。」

ではせっかくなので、まずはパーティーらしいケーキの食べ方からお教えしますね。」

『お願いしますー!』

こうして、万丈の『今更聞けない正しい王宮マナー勉強会』は始まった。

「では次にフオークなどを床に落としてしまった時の……バンジョーさん！ 脚を開きすぎって何度言ったら!!」

「あ」

「同じことを何度も注意させないでください！ やる気あるんですか!?!」

『あるある！あるって！ つい！ついな!』

「あとその翻訳機って子も、ちゃんと使うときは相手の了承を取ってからですよ！ 相手によって何が失礼に当たるかわからないんですから!」

『おう！わかってる!』

「……そんなものがあるなら教えてほしかったのに」

「え?」

「……! なんでもありません!

はい、ではフオークを落としてしまいました。そういう時は手を挙げて——」

ベアトリスのキツめの教え方にも堪えている様子はなく、万丈は文句ひとつなくレッスンをこなしていく。

俺でもよくやっていると思うほどに万丈はとても真摯だ。

「向こうは大丈夫そうだな。……でもベアトリス一人に任せてよかったのか?」

「いいのいいの。こっちはチーム総出でやるつつったけど、正直ベアト以外のあたしらはそこまでこっちのやり方に従ってもらおうとは思っちゃいないさ。」

「女王陛下曰く、『自国の文化観を大事にしてほしい』そうだ。」

「付け加えると、陛下は大層な親日家なのよ。」

必要以上にこっちに合わせられても、不興を買うかもしれないわ。」

「ですので、ベアトにお任せしました。」

あの子たつての希望でもありましたので。」

それと、万丈のような男と話すことで、ベアトリスの男嫌いも良くなるんじゃないかと思つたから、だそうな。

「なるほど……まあ確かに万丈は裏表のない、考えるより先に口に出ちまうような奴だからな。」

「うむ。むしろそういう男のほうが、女王陛下には受けが良いと思う」

「ちせさんの言うとおりです。おばあ様も、きつとバンジョーさんを気に入ってくださると思うわ」

「……」

アンジェは持っていたカップを置き、ゆつくりとプリンセスを見やった。

「あら、どうしたのアンジェ？」

「いえ、なんでも」

「ふふつ、アンジェく、お前プリンセスがバンジョーに気をよくしてるのがもどかしいんだろお？」

「……なんですって？」

「理解ってるんだぞこつちはく、なあ？」

「姉上が言っていた……『女子おなごの焼いた餅は正月でなくとも美味しい』と。」

あ、ウマイ。

「……何見てるのよ……目を潰すわよ？」

「変身するから潰れない」

「くっ……」

なんだよ、へへ、随分と可愛らしいじゃないの。

時代や国が違ってても、人と人との“繋がり”ってのはあるもんだな。

「あ、そうだわ。……桐生戦兎、”アレ”は、持ってきているわよね？」

「（話しそらすのが）露骨だなお前」

アンジェは何も言わず、すごいスピードでドロシーのケーキを奪って食べた。

「うげ」

「（感情が判りやすくなったなアンジェのやつ……）」

「ま、まあ持つてきてるよ……じゃん！」

何も見なかったことにして、俺はカバンから”それ”を取り出した。

「これこそこの仮面ライダービルドのマストアイテム……その名も、

”ビルドドライバー”だ!!」

「……………おおう!」

《仮面ライダービルドとは何か?》

それを伝えることが、今日、俺が万丈と共にここに呼ばれた真の理由だった。

「それはあの時の……」

「うむ。マスクメイカーとの戦いで、お主が最初に持ってきたものだな」

「お、よく覚えてたな」

「当たり前でしょ？」

プリンセスたち四人によく見えるよう”ビルドドライバー”をテーブルの真ん中に置く。

「そして、これだ。」

次にポケットから『ラビット』と『タンク』の”フルボトル”をその横に添える。

「まあ……」

「……んん？」

その様子を、プリンセスとドロシーは奇怪な美術品を観覧するような面持ちで、じつくり舐めるように見つめていた。

「はー、また随分と妙なのが出てきたな……」

「本当……ねえキリユーさん、それは一体どのような物なのですか？」  
早速プリンセスから質問だ。……そういえば、この人にはアンジェ達以上にまだほとんどビルドについての情報を伝えていなかった。

もちろん、この場でしつかりみんなにビルドについて知ってもらおうつもりだから問題ない。

「このアイテムの名は”フルボトル”。架空も含めた過去と現在、そして——」

でもそれは、

「”未来”の、この地球に存在するありとあらゆる物質の成分を凝縮エレメントさせたものだ。」

ビルドに関する全ての真実を伝えるということではない。



「……は？」

意味が解らないと言うようにちせとドロシーが、

「……未来？」

「ですか？」

キョトンとした顔で、アンジエとプリンセスが、それぞれ俺を見る。

訝しむのも無理はない。なぜなら今の俺の言葉は、ボトルの真実を歪めたものだからだ。

「ああ、未来だ。」

——そう、俺たちの持つこのフルボトルには、まだ『この時代には存在していない物質』のボトルが含まれている。それはこれらが俺たちの世界……この世界の時代よりもずっと未来で創られた物からだ。俺たちが未来の異世界人であることをこの世界の人々に公表することは、この世界の歴史を歪めてしまう結果となりかねない。少なくとも技術的な混乱を招くことは確かだろう。

そういう意味で、事実の捏造が必要だったのだ。騙しているように心苦しいが、こればかりは隠すほかない。

今日のために考えた精一杯の言い訳を、ここで述べる。

「例えばこの”タンクボトル”。これがそうだな」

「貯水槽<sup>タンク</sup>？ それなら別に未来とか関係なく今もあるだろ」

「まあ聞けって……ほら、このボトルの凸凹、よく見ろよ。」

「んん……？」

ドロシーを始め、女の子四人が身を乗り出し寄せ合って、タンクボトルを観察する。

「なんだこの形……」

「少なくとも、我らのよく見るタンクとはまるで違うな」

「ええ……たくさんさんのタンクを見ることがあったけど、こんな形のものはまだ見たことがないわ……」

「……あ」

そんな中、何か閃いたのかアンジェが声を上げる。

「どうした?」

「そのボトル、あの時貴方がウサギのボトルと一緒にそのビルドドライバーとやらに差していたものよね?」

「……ああ。」

「そういえば確かに……言われてみれば同じ色をしておる」

「……ちよつと待ってて」

すると突然、アンジェは何やら紙と鉛筆で絵を描き始めた。

「……あ、俺じゃん」

数分後、描き上がったのは、紛れもなく”ラビットタンクフォーム”の顔。フェイス全体のフォルムや眉間部の”BLDシグナル”など、特徴をキチンと捉えた見事な仕上がりに。

「おお、ストライプだ。そうそう確かこんな顔だったよなー……相変わらず絵え上手いなお前……あ」

さらにアンジェは、両の複眼部を丸く囲みだす。

「左目は兎の横顔をモチーフとしていることはすぐにわかったわ。こっちの右目は何を模していたのかは、ずっとわからなかった……でも」

さらにアンジェは紙の余ったスペースに筆を走らせた。

「……あー」

やがて線と線は、ある物体を立体的に有らしめた。

「そのボトルのおかげでやつとわかったわ。タンクなんて紛らわしい名前で混乱させて……要は、これのことでしょう?」

それは紛れもなく砲塔と履帯を持った、”戦車”の形をしていた。

「そのボトルが正面から見た図、”KAMENRIDER BUID”の右目が側方から見た図として立体図にすると……およそこういう形になる。」

「これ……艦内砲を大きくした物のように見えますね……」

「あとどことなく貯水槽タンクっぽいつちやぽいな。水がたくさん運べそう

だ」

「……しかし、これでどうして、この“たんく”とやらが未来の物だと判るのだ？」

当然の疑問がちせから向けられる。

……早いな。ここまで話が進むのにもう少し時間がかかると思っていた。

俺の予想以上に、アンジエの頭が柔らかいので、ちよつと段取りがズレたが。

いや、問題ない。ちせの疑問への回答は用意してある。俺はそれを答えるだけだ。

「——大砲系の兵器の発展の歴史の中で、この形態と一致する物が全く存在しなかったからだ。」

「なんと」

「タンクなんて変な名前が付けられるくらいだからすぐ見つかると思っただけど、そんなことを書いてある史料や本はどこにも無かった。そしてこんな形の兵器が実際に戦場で使われているという情報も無かった。」

結びに、俺からちせに問いかけた。

「過去と現在に存在しない物質は、どこに存在すると思う？」

「未来しかあり得ない……か」

”困惑”、そんな感情を湛えた視線が四人の中で飛び交っているのが分かる。

……ちよつと強引すぎただろうか。でも、これが真実をある程度保ったまま彼女たちにフルボトルを説明するには、この言い方が最善なんだ。

”フルボトル”とは、石動惣一の娘への”愛”を利用して創り上げられた……惑星滅亡装置起動のためのエネルギー回収装置である。

……この世界の人々にそれを知らせたところで誰が幸せになれる？

その真実を知るのは、この世界で俺と万丈だけがいい。  
だから、これでいいんだ。

「……わかったわ。そういうことなら、このボトルについてもうち以外に存在を知らせないほうがいい」

「!!」

アンジェが思わぬ提案を口にする。

「未来の兵器 なんてとんでもない力が、こんな片手で持てるほどに小さく在るだなんて、危険としか言いようがないから。」

「……そうだな。それにこちらの兎のほうも、桐生の戦い方を見れば、とても侮れるものではない。」

「遠めに見てもわかるくらいぴよんぴよん高く飛び回ってたもんなあ……これのことを共和国軍にでも知られたら……なんて、考えたくもないよ」

「ええ……あの巨大な怪物を、いとも容易く倒すことのできる力ですから。」

酷く暗い面持ちで、プリンセスたち三人はアンジェの提案を支持する。

——そして、俺も。

「……そのことを伝えたくて、今日はここに来た。」

四人の目が一齐に俺に向く。

「ボトルと、その力を解放させるビルドドライバーを始めとした装置、そして仮面ライダービルドの正体については……俺と万丈、そして君たちチーム白鳩の中だけの秘密にしたい」

立ち上がり、みんなに聞こえるよう、声を大きくして伝える。

「……頼むー」

俺たちの持つ真実の全てを伝えることはできない。伝えるのは一部だけ。だからこそ、あの事件で俺のために動いてくれたチーム白鳩のみんなには”兵器”じゃない、”正義のヒーロー”としてビルドを解説したかった。

それが、俺からのこの子たちへの感謝の形とするために。

「……異議なし」

「右に同じく」

「当然、異議なんかないよ」

みんなが口々に了承を示してくれる。

「私ももちろん、その提案に賛同致しますわ。」

強い力はその使い方を誤れば、往々にして災いを起こす引き金となる……それは私どもも重々承知していますから。」

最後に、プリンセスの言葉。

そこには“力”というものへの強い恐れ感情が含まれているように、聞こえた。

「……ありがとうございます！」

頭を下げる。

気持ちだが、伝わってくれた。

よかった……よかった……。

「あとでベアトにわたくしたちから説明するとき、改めてそのことを言っておきます。キリユーさんの持つその力は、一国の運命すら動かすほどの物である、と。」

「あ……よろしくお願いします！」

「はいー！」

花が咲いたようなプリンセスの笑顔。

「……よし、じゃあ続きを頼むよ」

「珍しく乗り気じゃな、ドロシー」

「男が好きだからでしょ。ああいやらしい」

「……ぶっ飛ばすぞ？」

再び耳を俺に傾ける四人。

しっかりと、俺の意思がみんなに共有されたことを感じられた。

「じゃあ……説明を続けようか。」

「お願いします。」

ドロシーとプリンセスが期待を込めた眼差しを送ってくる。それに答えるよう、俺はまた笑顔を向けた。

「――まず、ビルドの変身には、『ラビット』のような生物のボトルと、『タンク』のような非生物のボトル、それぞれ一本ずつが必要なんだ。」  
「はい!!」

ちせが大きく右手を挙げた。おお、なんだか学校っぽくなってきたな……

「はい、ちせ」

「あの時の戦いでは、確かその二本の他にももつと沢山の”ぼとる”を使っていたと思うのだが、あれらは一体どういう物なのだ?」

「ああ、あれな!」

そうそう。ボトルは何も”ラビット”と”タンク”だけではない。他にも沢山の種類がある。

”ドラゴン”、”ロック”、”ロボット”、”ダイヤモンド”……そして”フェニックス”と”ゴリラボトル”。

カバンからのボトルを取り出してテーブルに並べる。

「実物があるほうが説明も分かりやすいと思っとな、持ってこれるだけ持ってきた」

「フェニックスって……あの、これはどういう?」

「ああ、そのまんま不死鳥のことですよ。」  
フェニックス

「ゴリラが可愛く思えるわね」

「お、おい……キリユ」

「ん?」

「……ボトルってのは、これで全部か?」

「いや、ここにあるのも含めて……ボトルは全部で60本だ。」

「二……60本?!」

四人全員、血相を変えて俺を見る。

「こんなのが全部で……60本?」

「ああ。生物と非生物でそれぞれ30本。合わせて60本だ。」

「……貴方、その中の一本でも盗まれたりしたら……」

「そこは問題ない。この”ロックフルボトル”の能力を使って、俺と万丈以外は開けられない箱に保管してある」

「あの時のように、この”ロックボトル”で変身して?」

「そう」

「……あ、それが『ボトルの換装による能力の交換』なのですね！」

「あれ、プリンセスご存じだったんですか？」

「ええ、アンジェとちせさんからある程度は聞いてますから。」

「あたしも聞いているよ。『生き物と物のボトルの二種類で変身して、それを状況と能力に応じて別のボトルに変えられる』んだろ？」

「そうそう！いやすごいなこの子たち……ほとんど自分たちでビルドの特性を理解してるなんて。」

「いや、スパイってメチャクチャ優秀じゃないと生き残れないもん  
な、これが当然なのか。」

「……あれ？30本と30本ってことは、”900通り”の姿に変身  
できるってことじゃ……」

「！！」

「お、いいところに気が付いたな！」

「な……お、お主、本当に900通りの姿に変身できるのか!？」

「ああ。まあ流石に全部のフォームに変身したことはないけど……」

「スパークリング缶やハザードトリガーについては……今は言わな  
いほうがいいな。今日だけじゃ説明の收拾がつかなくなりそうだし。」

「(ちせ……勝てるか?)」

「(この間までの私なら判らんが、替えない、刀が一本しかない今の  
状態では……)」

「(ちよつとドロシー……!)」

「(想像するだけなら死にやしないだろ……お前だつて内心考えて  
たんじやないか?もしキリユを敵に回した場合、どう対処するかを  
さ)」

「(……二人とも、その話は後にしましょう?)」

「(……わかった)」

「……どうかしましたか？」

「いえ、何も。」

「……ならよかった。」

「……まあ何を密談してたのか、凡そ察しは付くけどな。」

ここは俺が鈍いふりをしよう。俺から裏切らないって言ったところで安心する程度の心配なら、最初からしないだろうしな。

力を持つってことは、恐れられることと不可分だ。

世界が違ってたって、それは同じなのだ。

「あ、そうそう！……もう一つ、ボトルの組み合わせについて説明したいことがあるんだ！」

「(急に機嫌よくなったなこいつ)」

「実は生物と非生物で……ボトルには相性がある」

”ラビット”と”タンク”を拾い上げ、隣り合うよう置きなおす。

「相性、ですか？」

「ふうん……なんか男と女みたいだな？」

「……はい！……ここが面白いところなんですよプリンセス！」

「(へっ)」

「(ぐまあみなさい)」

「(こいつら……！)」

「で、一番相性のいいボトルの組み合わせのことを……」

察しが付いたのか、ちせが徐おもむろに声をあげた。

「俺は、”ベストマッチ”と呼んでいます」

「Best match……！」

プリンセスが強く復唱する。

「はい！」

「Best matchですか……！」

そしてもう一度、その言葉を口にした。

「あ……やだ私ったらはしたない！……ごめんなさいキリユーさん、なんだかとてもいい言葉だったからつい……」

「いやあ、俺も嬉しいですよ！俺も大好きですから。ベストマッチ！」

「まあ……ふふふっ！」

自分の顔に笑みが綻ぶのを感じた。

俺たちにとっての特別な言葉が、ふるさとよりずっと遠く離れたこ



の場所で、一人の少女の笑顔を生んだことが、とても誇らしくて、嬉しかった。

「ねっアンジエ、ベストマッチなんですって！ベストマッチ！」

「そ、そうらしいわね……（こ、こんなところで引っ付かないで！）」

「ふふふふっ！」

………なんだかよくわからないが、プリンセスはいたくベストマッチを気に入られたようだ。

「あー……ごほん！」

「!!」

ちせの咳払いで、姿勢を正し椅子に座りなおすプリンセスとアンジエ。普段もこんな感じでこの子たちは会話を弾ませているのだろうか。平和だねえ。

「“ベすとまっち”だと、具体的には何がいのだ？」

「そうだな……双方のボトルの力を最大限に高め合ったり、バランスを保った安定性の高いフォームに変身することができるんだ。

例えば……」

《ゴリラ！》

《ダイヤモンド！》

《——ベストマッチ!!》

「前者なら、この“ゴリラ”のパワーと“ダイヤモンド”の硬度がマッチした“ゴリラモンドフォーム”。」

「ふむ。」

《ドラゴン！》

《ロック！》

《——ベストマッチ!!》

「後者は、この暴走しやすく制御の難しい“ドラゴン”と高い制御能力を持つ“ロック”がマッチした“キードラゴンフォーム”がわかりやすいな。」

「おおー、と感嘆の声が上がる。」

「確かに……どっちもわかりやすく強そうな組み合わせだな」  
「そして」

《ラビット!》

《タンク!》

《——ベストマッチ!!》

「これももちろん、ベストマッチだ!」

最後に、俺の一番好きな組み合わせを装填し、ドライバーから手を離した。

「兎と未来の兵器もベストマッチ……と」

「能力が未知数な分こっちも相当だな」

「あ、言い忘れてたんだけど、どんな組み合わせがベストマッチなのかは、こうやってドライバーに装填して判別できる。……どう?」

「何がよ」

「凄いでしょ? 最っ高でしょ? 天つつつ才でしょ?」

「……はいはい」

んだよノリ悪いなあ……まあアンジェはクールキャラだもんな。素はもうちよつと可愛げがありそうだけど。

「さて……」

「?」

俺は彼女らに笑顔を向けながら、ビルドドライバーを再び手にした。

「アンジェとちせはもう見てるから知ってるだろうけど、ここで改めて見せようか。」

「……まさか」

「そのまさかだ。よく目に焼き付けてくれ。俺の……変身。」

ピシッと、四人の顔が俺のほうに向く。

「(アンジェもちせもここだけは説明のしようがないつつつたけど……どんなトンデモが飛び出すんだ……?)」

「(変身……そう言うからには、きつと変装なんかよりもずつと凄い技術であの姿に変わるのね……)」

それもそのはず、ここからが今日の本当のメインイベント。

俺も彼女たちも気の抜けないところだ。

だからこそ確実に、着実に、シークエンスを進める必要がある。

じゃ、行くぞ……

「まず、仮面ライダービルドに変身するには、これをこう、しっかりと密着させて装着する」

鋭い機械音と共にへそ下に置いたドライバーのバックル部からベルトが射出され、ビルドドライバーは俺の肉体とリンクする。

「!?!」

「ここで驚いてたら後が保たんぞ」

「まあ……そんなにすごいのか?」

「ええ。確実に二人の想像の遥か上を往くと思うから、そのつもりで」  
「マジかよ……(初っ端からこんなとか聞いてないぞおい!?!)」

後のシークエンスのことも加味して、椅子から離れ部屋の広いところに移動する。

「そして変身に使うボトルを持って、上下に振る。」

シヤカシヤカと、小気味良い音が部屋中に響く。

「ここも地味に重要ポイントだ。その理由は……」

「……なぜ振るのだ?」

「こうした方が変身した後に強い力を出せるんだよ」

「ほほお……」

「(いやどういう理屈だ……)」

振り終わると、ボトルの栓を絵柄の見える前面にカチツと固定する。これで装填する準備は完了だ。

「(ちよつとやってみたいかも……)」

「(……って思ってる顔ね、アンジェったら。昔から音の出るオモチヤが大好きだったものね)」

「そしてボトルを、ここの窪みに装填する」

《ラビット!》

《タンク!》

《——ベストマッチ!!》

巨大な歯車に似た意匠のドライバー心臓部、”ボルテックチャージャー”が紅と青に発光し、ボトル識別音声と共に、工場機材の稼働音を意識した変身待機音声が鳴り響く。

「そしてレバーを、思いっきり回す！」

回転による運動でドライバーがボトルの成分を活性化し解放。プラスチックのランナー状の装置、”スナップライドビルダーが俺の全身を囲むように展開され、

「……………!?!」

「な……………!?!」

その内部に”紅と青、二色の液体が充填される。

そして、それら液体は俺の前後でそれぞれビルドのハーフボディへと形成された。

「行くぞ……………」

「…………… (ゴクリ)……………」

敵を前にした気持ちで、体を横に。

そして、腕を構えた。

「——変身!!」

《鋼のムーンサルト!》ラビットタンク!! イエエエエエイ!!!》

体をちよいと左に傾け、左手を腰に添え、右手を”フレミング”に、物理学を前面にイメージした最っ高の決めポーズだ。

そして”彼”への敬意と共に、この言葉を四人に贈る。

「これが仮面ライダービルド。”創る”、”形成する”って意味の……………”ビルド”だ。以後、お見知り置きを。」

久しぶりだったけど、ふつ、さつすが俺。完璧に決まったな……………さて反応は……………

「……………誰だ」

「ん?」

最初に口を開いたのは、ドロシーだった。

「——そのベルトとボトル、どこの誰が発明した？」  
そして立ち上がり、とても涼しい顔で、そう訊いた。

「……………ドロシー?」

昨日、豚汁を食べながら笑顔を見せていたドロシーは、ここにはいなかった。

「何処の何奴が、”そんなもの”を作ったのかって訊いてんだよ」

代わりにいたのは、見たこともない程に冷たく感情を殺した顔の彼女。

視線は鋭く、俺に向けられている。

「…………桐生、ドロシーを嫌ってくれるなよ。」

「”ビルドドライバー”も”フルボトル”も、蒸気機関やケイバールイトとは全く異なる超技術…………」

「なぜ今、その力をこの国に持ち込んでしまったのですか、キリユールさん…………」

他の三人は何も言わず、椅子に座ったまま俯く。

俺の位置からは、彼女たちの顔は見えなかった。

「(なんでベルトから服が生えてくる……………なんでそんな力を持つてる……………なんで、なんでそんな力があつて……………振りかざさないんだよ!!自分本位にならないんだよ!!……………そこまで、優しい人間のままでいられるんだよ!!)」

彼女の顔に、じわじわと怒りが染み込んでいくのが分かった。

自分で強く握りしめている彼女の手は、みるみる内に赤みを帯びていく。

……………そうだ、なんで俺は考えなかったんだ。

19世紀、この時代のこの国の人々にライダーシステムを開帳した『後に』、彼ら彼女らが抱くであろう『感情』を、どうして考えなかったんだ。

自分の価値観では絶対に理解できない現象、法則、技術、思想、そ

れらを目にしたとき、人は何を思う？

なんでそんなことをする。

なんでそんなルールを敷いた。

なんでそんなものが創れる。

なんでそんな発想ができる。

——そんなものがあるのに、どうして自分には……

そうだよ……『怒る』に、決まってるだろ。

「答えるよ」

「!!」

そうする他ない。

慎重に、誠実に答えるしかない。確かな真実を答えるしかない。

そうしないと、この子は納得できない。

今、真実を伝えることだけが、この子のために、俺ができることだ。

「——このドライバーを創ったのは、俺だ。」

ドロシーの目が見開く。

「やっぱり……」

「なんだ、わかってたのか」

「万丈くんの翻訳機、あれだけの物を造れるならもしかして……って」

「……そうか」

アンジェは数秒ほど俺を見つめたあと、またすぐ、視線をテーブルに戻した。

「……ボトルは？ ボトルは誰が造った」

ドロシーは目を細め、ボトルを指差し問い叫ぶ。

「ボトルについては分からない。……ある人から、託されたんだ」

「……………そ。」

これは真実だ。

俺たちの地球に“持ち込んだ奴”なら知っているが、創った者につ

いては今や知るすべがなかった。

「——なら誰に託された」

「このドライバーの、設計者だ」

「設計者……？　今あんたそれを自分で造ったって言っただろ」

「設計図から実物を創り、機能を拡張させたのは俺だ。……設計図も、ボトルと一緒にその人から託された」

ドライバーに触れる。

「——ドライバーの設計者は、俺の父親だ。」

その言葉を口にした瞬間、四人の視線が、一斉に俺に向いた。

「あんたの……父親？」

「そうだ。父さんこそが、ビルドの正式な装着者だった。俺はそれを受け継いだだけだ」

「受け継いだって……そんなものを息子にやって、あんたの父親は今何してるんだよ!」

「……………」

ドライバーを指さしながら、ドロシーは叫ぶ。その声はさつきまでの物とは比べるまでもないほどに感情的だった。

……真実だけが、この子のためになる。

「死んだ」

「!!」

「俺の目の前で……ビルドを託して、死んだ」

『巧……また背、伸びたか?』

「……………そうか」

ドロシーは視線を一度左右に揺らし、唇をきゅっと締めて俯く。そしてそのまま、ゆっくりと席に着いた。

「……………ごめん」

「ドロシー?」

「あたしからはもう、訊くことはない……………答えてくれて、ありがとうな……………」



「……………本当にもういいのか？」

「……………ああ。」

変なこと訊いて悪かった。」

それつきり、ドロシーは口を開かなかった。

「……………なら」

ドロシーとは違う方向から、声。

「貴方の父親は、何のためにそのベルトを設計したの？」

アンジエは、俺の心の奥の奥まで覗き込もうとするように、とても強い眼差しでこちらを見ていた。

「マスクメイカーのような怪物と戦うため……………ではないでしょう？」

訂正したかったが、そこで自分を制する。

全ての真実を話すことはしないと、さつき俺が自分で決めたことだろう。

「ベルトを託された貴方は彼のことを何も知らなかった。もし知っていたのなら、貴方の性格上私たちに彼について何かしら警告をしていたはずだし、そうでなくとも私たちが接触する前にBUILDとして彼を倒した。……………だから怪物退治がその力を行使する真の目的だとは考えづらい」

「……………その通りだ。」

本当に知っていたら、どんなによかったか。

「よく理解してるんだな、俺のこと」

「理解なんてしてないわ。事実を述べただけ」

『もしショーンの存在を知っていたら』、店長に大けがを負わせたりアンジエ達チーム白鳩を戦いに巻き込むこともなかったかもしれない。

……………いや、そんな仮定は無意味か。俺の人生に、後悔に使えるような無駄な時間はないのだから。

「……………答えて。」

アンジエの視線がより強まる。俺の顔を刺し貫くように、それは鋭く尖っていた。

「これは……………」

アンジエが期待している答えを、俺は既に確信している。

彼女たちの住むこの世界、この国、アルビオン。ここが何をして繁栄した？

戦争だ。

戦争による数多の国の植民地化、その国々の人や文化の吸収、それによる繁栄。

なぜ繁栄できた？

軍事力があつたからだ。

”空中艦隊”という、この世界のあらゆる国のそれを凌駕した圧倒的な力。

つまりは――。

”兵器”として創られた……そう言いたいんだろ？

「ええ。」

確信は悲哀に変わる。

「それしか考えられない。」

「……!!」

咄嗟に否定しようと口が動きかけたが、声を出せなかった。

この国にスマツシユはいない。

この国に他のライダーはいない。

この国に――、

『お前が全ての元凶なんだよ。お前がライダーシステムを創らなければ、仮面ライダーにならなければ、こんな悲劇は生まれなかったんだア！』

お前は……俺に作られた、偽りのヒーローだったんだよオ!!』

――あいつは、いない。

俺は、この国の人たちに、自分が兵器でないとどうやって言い切ればいいんだ……。

「……ねえキリユールさん、貴方とバンジョーさんは、一体どこの国からいらしたのですか？」

沈黙を保っていたプリンセスが、俺に問いかけてくる。猫に袋小路へと追い詰められた鼠の情景が、ふと脳裏に浮かんだ。

「……な、日本に決まってるじゃないですか!!ほら名前も見た目も……」

言ってる途中で今の自分が変身していることに気付き、変身を解く。そしてアンジェに向けて腹を見せるように両手を広げた。

「俺、どこからどう見ても日本人でしょう?」

「……どこがよ」

「え?」

「貴方の一体どこが、日本人だというの?」

アンジェは、先ほどのドロシーよりもすっと冷たい声でそう言い放った。

「……どういう意味だよ」

「貴方たちは話し方もふるまいも、それにここでの暮らし方もただの日本人よりずっと、”私たち”に近いのよ。」

「……!!」

ドロシーとプリンセスは、目を閉じ俯いている。

この時代は、19世紀。

俺たちが生きていたのは、21世紀。

俺たちは、この世界では日本人らしくない……そう言いたいのか。

「それは私もずっと感じていた」

「!?」

な……そんな、ちせまで……

「桐生……私個人としては、ちゃんとお主のことを日本人として見ておる。」

……でもな、お主を日本人として見れば見るほどなんというか……とても違和感を覚えるのだ」

「……なんだよ違和感って」



突然、窓の外から悲鳴が聞こえる。

ガタガタと音を立てながら俺を含む部屋にいた全員が声のした方へと走った。

「おいなんだ今のは!？」

「……………皆、あれじゃ!!」

「!!!」

異変にいち早く気付いたたちせが、声を上ずらせてそれを指す。

「n z : q c 、 、」

「2 ( l y p r q 、 、」

「b ? p h e b ? p」

「いや、いやああああああああああ!!!」

「来ないで……………来ないでよおお!!」

「あ、いや、誰かああああああああ!!」

そこには、濃いワインブラウンの髪に白薔薇のブローチの少女と彼女に縋るように抱きついてお困子とツインテールの二人の少女。

そして三人に首を捻るように動しながらよろよろと老人めいた足取りで近づく、三体の黒光りしている謎の怪人がいた。

そいつらは顎のハサミをギチギチと鳴らしながら、ゆっくりと、しかし着実に少女たちに近づいている。

「4 j c 4」

「4 i c 4」

「4 i c t u」

「4 i e x 6 t 3 x y f 4 i t z q z w e z w q」

「あの色……………まさか」

あの時の、シヨーンの纏っていた鎧と同じ……………

「ひっ」

突然、隣で見ていたプリンセスが、小さく叫ぶ。

彼女の視線の先を見れば、怪物たちの後ろに赤い水溜りが……………この学校の衛兵だった人が息もなく横たわっていた

「……………!!」

「待て！」

窓から飛び出そうとするアンジエを抑える。

「何するの!!」

「俺が行く!!君はみんなを守れ……変身!!」

《ラビットタンク!》

「……あ！」

俺は彼女の代わりに窓から飛び降り、蠢くそいつらの元へと向かって疾走した。

「……………ハアアアアッ!!」

”ラビットボトル”の特性の一つ、瞬発力を最大限に発揮。三体の怪人へ向け疾走する。

接敵する直前の瞬間、『ドリルクラッシュャー』を創造し、物質化されたきつたタイミングで真ん中の一体を攻撃する。

「h、3z11」

怪人は倒れ伏し、ギューギューと耳障りな声を上げた。

「……………こいつらは一体……………」

間近でよく見ると”蟻”の頭部に目隠しされた人間の顔を象ったマスクを嵌め込んだように見える顔面、黒光りする肢体、肩からは昆虫の触覚のような物が伸びており、さらには全身には有刺鉄線を巻き付けていた。……………嫌悪感でダイレクトに嘔吐中枢を刺激してくるデザインをしている。

……………そして全体のカラーリングは本の数日前に見た”彼”のそれに、とてもよく似ている。

「(シヨーン……………なのか?)」

いや違う、彼は単独犯だった。それにこんな真つ昼間に堂々と開けた場所で行動するタイプじゃなかった)」

……………なら、こいつらは何者だ?

「いや、考えるのは後だ」

意識を目の前の敵に戻す。

三体とも完全に女生徒たちを無視し、体をこちらに向けて俺に注意している。

「……………早く逃げろ!!」

「ひ、ひいいいいい!」

三体をこちらに引き付けている間に、女生徒の一人に声をかけて戦闘区域から逃がす。

それを見た一体が追おうとしたが、そこにクラッシュャーで牽制、注意を反らさせないようドリル部を回転させ思いつき殴り付ける。

「行かせるかよ!!」

衝撃で倒れた一体を立ち上がらせないよう踏みつけながら、飛びきってきた残り二体もドリルの回転で薙ぎ払う。火花が散るのに混じって黒い煙が蟻怪人の鎧のような皮膚から噴出した。

「……よし、逃げてくれたみたい——」

[u y u y q、 b e z]

[b? d w 7.]

[2、 a b? d w 7.]

「だ……うおっ!?!」

女生徒たちが逃げ切ったのを確認しようと蟻怪人たちから目を離れた一瞬の間に、踏みつけていた方の足が突然、地面に沈んだ。

「うおお!?!」

片足だけ落とし穴に嵌まってしまったような感覚。沈んだ足の方を見れば、そこにはマンホールほどの直径の穴があって、足はそこに嵌まっていた。

いやそんなことよりも……踏みつけていたはずの蟻怪人がいない

!

「……まさか!!」

[b z a q、]

「!!」

カラクリを理解した刹那、鈍い破碎音と共に件の蟻怪人が地中から飛びかかってきた。

「ぐッ!」

[f 7 e u]

なんとか、間一髪で敵の拳撃を避ける。

くそ、危なかったな……

「そりゃ地面も潜れるよな……蟻だもんなッ!」

[h、 g、 7]

隙を突いて素早く、ドリルクラツシャーを斬りつける。さらにドリル部をフル回転させ、蟻怪人の鎧を掘削、敵は金切り声のような悲鳴を上げる。



《タンク!》——《Ready go!!》

「——はあああアツ!!」

《ボルテックブレイク!!》

その勢いのまま、タンクボトルをドライバーから外し、クラッシュャーに装填。『戦庫』の突進力と砲弾の破壊力が籠った突きの一撃を食らわせる。

「h、g、7

爆散。眼前を炎が覆う。

それが晴れると、蟻怪人が立っていた場所から黒い煙が立ち上っていた。

「これもあの時と同じ……うおッ!」

シヨーンだった巨大カマキリが消滅した時の光景がよぎったが、すぐに残る二体が攻撃を仕掛けてきた。

「考えてる時間もくれない、か……——ハアツ!!」

ドリルクラッシュャーをガンモードに変形、俺は行動を牽制しつつ二体の蟻怪人に向け飛び掛かった。

——ベアト視点——

「姫様あーっ!!」

ものすごい悲鳴を聞きつけて、私はすぐさま姫様のもとへと走りましました。

声のした方は窓の外……でも姫様に危険が迫っていないとは限らない。そう思ったら、私の足は勝手に動いていたのです。

「姫様!」

扉を開け、姫様のお姿を探します。

「ベアト」

姫様です!

窓の外に顔を向けていたのでしょうか、振り返るように姫様は私に

目を向けてくださいました！

「ああ良かった………！………！」  
「無事でしたか！」

「ええ、私はなんとも」

……お部屋からも危険な雰囲気は感じられません！

とりあえずは大丈夫そうですね………あれ？だとすると………

「あの、さっきの悲鳴は一体………」

「あそこからよ」

疑問を口にするのと、隣にいたアンジェさんが窓の外を指さしてくれました。

「ありがとうございます」

場所を譲ってもらい、その方向を注視しました。すると、

「——ハアアーツ!!」

そこでは、紅と青の縞模様の怪人が、別の黒い虫みたいな二体の怪人と戦っているところでした。

「あ……あの人って！」

あの時ちらりと見えた………

そうです、『ストライプ』です!!

「……あ、そういうやべアトはまだ見てなかったっけか、キリユーの変身。」

「え………」

「キリユーだよ、あそこで戦ってるのは」

そんな………じゃあまさか、

あの、KAMENRIDER BUILTのことは………

「アンジェさんが言ってたことは、本当だったんですか!?!」

「当たり前でしょう」

「(いや説得力ねーぞ黒蜥蜴星人)」

ストライプ………じゃなかった、BUILTの方をまた見ます。

ファンタジーのような見た目なのに、彼から発されるのは、ありふれた金属同士の打撃音。

しかし時折、紅い兎さんや青い砲台のような(!?) 蜃気楼が浮かんで消えたりと、繰り出されるのはまるでファンタジーのような攻

撃。

目の前で繰り広げられるその光景は確かに現実、そのはずなのに。

「す……す……すぎる……」

とてもキラキラしてて、幻想的だったのです。

「……！」

……って、なにを見とれているんですかわたしは!!

まずいでしよう!これだけの力が一個人の手でいいようにされているだなんて!!

「……うう」

ちよつと、羨ましいと思つてしまいました。

私のような弱い女の子でも、あの力があればもつと姫様を……

いや、いやいや、それは違うでしょうベアトリス。

無い物ねだりなんてするだけ損です。そういうのは、今持つてる能力を最大限活かせるようになってからでしょう

……でも、

あれだけの技術を自由自在に駆使してしまうキリユーさんは、一体何者なのでしょうか。

そんな疑問がふと頭に浮かんだ、次の瞬間

「——ぴゃあああああああ!?!」

ドカン!!と、

戦っていた怪人さんの一人が、キリユーさんの放った銃?弾に撃ち抜かれて……ば、爆発しちゃいました!!

爆風でみんなの前髪がぶあつとめくれ上がっておでこも丸見えです。とっさに姫様に覆いかぶさります。

「おいおい……やつら、爆弾でも隠し持ってたのか?」

「爆弾というよりは、内部が高圧になりすぎた蒸気機関が爆発するのと似ているような……」

「どつちみち危険だわ。」

……ここも、あまり安全とは言えないわね」

「そうね。でも私たちは——」

姫様の続く言葉を遮るように、ドアの開く音が強く響きました。

『——あんた達そんなとこでなにやってんだよ!』

「わ!? バ、バンジョーさん!」

『ここも危ねーぞ、早く逃げろ!』

あわわ、そういえば置いてけぼりにしてしまっていました……。う、ずかずかところちらに歩み寄ってきます。

とてもお顔が怖いです。怒ってます。

「バンジョーさん、お気持ちは嬉しいのですが、申し訳ございません。私たちは今、ここから離れる訳にはいかないのです」

「……あん?」

眉をひそめて私たちを見つめるバンジョーさん。

なんでこの人はこんな怒って……

『……なら仕方ねえ、俺もここに残る』

て、あ、ちよ、ちよつとお!?

なにを勝手に姫様の隣に!?なんてことを!!

「そんな、バンジョーさんだけでも安全なところに!」

『おいおい、女置いて一人で逃げられるわけねーだろ。これでも腕っぷしには自信あんだ。なんかあってもあんた達を守ってやれるから』

「ま、守るって……!!」

余計なお世話です! 自分の身くらい自分で守れます!!」

この人は何を勝手な!

私たちはスパイなんです!

ボクシングのチャンピオンだからって、思い上がりも甚だしいです

!

『そうは言うけどよ、リス子、じゃああの黒いのお前らだけで正面切って戦えんのか?』

「もちろん戦え——」

「難しいであろうな」

「ちせさん!」

な、なんであなたがこの人の味方を!?

「地面に潜ったり、奇怪な動きで間合いも読みにくいと中々てこずり

そうじゃ。それに、今は一体だけとはいえ最初は三人もいたしな。  
……もしかしたらまだ他に仲間がいるやもしれぬ。

無傷で倒しきれるとは、思えぬな」

「う……」

戦鬪のプロが言うともものすごく説得力が……

「で、でもアンジエさんと一緒なら！」

「できないわ」

「ええ!？」

そ、そんなあ!!

「戦えるかどうか考える前に、私たちはスパイなのよ。こんな日の出  
てる内に開けた場所で戦うなんて、リスクが大きすぎる。

それに、私たちが出しやばらなくても十分戦える人がいるのだから、むぎむぎ姿を曝す必要もない」

「うう……」

「ベアト、目的を見失わないで」

そう私に注意アンジエさんはずっと、戦っているキリユーさんから  
目を離していませんでした。

「守ってくれるったって……あんたも私らと同じ生身の人間だろ? 随  
分な自信だな」

ドロシーさんが腕を組ながら、バンジョーさんの発言に指摘しま  
す。

そういえば確かに……

『つたりめーだろ! こえ見えて俺も——』

「!……みんな、外を見て!!」

「あ、おい!!」

アンジエさんの声に、私たちはすぐに窓の外へと視界を合わせまし  
た。

そこでは……

《Ready go!!》

《ボルテックファイニッシュ!! イエイエイ!!》

「ハアアアツ!!」

何故か巨大な放物線が出現していて、怪人を捕まえており、キリユーさんが破線の上を滑りながらそれに蹴りを食らわせるという……あまりにも予想外過ぎる光景が繰り広げられていたのです!!

「……えええ……?」

爆発。お庭の剥げが、また一つ増えてしまいました。

どんな法則が働いたら何もないとところからあんな大きな放物線を出せるのか……気になって気になって仕方ない気持ちを押し殺して、キリユーさん観察を続けます。

「お、片付いたみたいだな」

まるでこの一連の流れを見慣れているかのように、バンジョーさんは独り言。

ま、まさか今みたいなことを何度もやってんですか……!?!いやまさかそんな……

「——動くな!!」

「[[[[[?!]]]]」

な……え、衛兵さんです! たくさんの衛兵さんたちが、キリユーさんに銃口を向けながら包囲していました!!

「……戦——!!」

「待って!」

「なんだよ!」

「彼の関係者だとわかれば、貴方も危険です!」

まだ、動いてはいけません」

「あ……悪い」

飛び出そうとするバンジョーさんを姫様が止めます。

バンジョーさん……大事な人が大変な時に駆けつけたい気持ちはよくわかります。でも今はダメなんです。キリユーさんとの関係は、姫様と私たちにはとつても致命的だから。

「おいおい、今さらノコノコやって来てやるのがこれか?」

「……まずいわね。下手をしたら彼の力が王国に……」

「むう……派手に暴れていたせいか、かなり警戒されておるな」

キリユーさんは身動きせず、両手を頭の上に乗せます。

「あのー……」

「……なんだ!？」

おもむろに口を開くキリユースさん。衛兵さんたちが銃を構え直します。

ちよ、ちよつと!?!この状況で一体何を……

「さつき女の子が三人、ここから逃げてきたと思うんですけど……無事ですかね?！」

………はい?？」

「はあ!?バカかあいつ!？」

ドロシーさんが本気で驚いています。

無理ありません。私だって同じ気持ちです!!

「どういう神経してるのよ……!!！」

ほら、アンジェさんだってぶんぷんです!

一体何を考えて……!？」

「くく………お、お主がそれを言うか!！」

………つてあれ? ちせさん?」

「………どういう意味よ?！」

「ん? まさか自覚がなかったか?」

「ええ、この子ったらそうなんですよ」

「な………プリンセスあなた!!！」

な、なな、姫様まで!？」

「うーん、筋金入りとはこのことか」

「そっくりですよねえ」

ひ、姫様!?!何をちせさんと通じ合ってるんですかあ!？」

「(キリユースさん………貴方もアンジェと同じ、自分じゃない誰かのためにその身を投げ出せるのですね)」

うう………なんだか仲間外れにされてるような………私ってなんだかいつもこんな役回りのような………

「………ま、そんなもんだよな。アイツの印象って」

バンジョーさんまでどこか訳知り顔で独り言を呟いています。日本語なのでまだ完璧には分かりませんが、少なくとも絶対キリユウさんのことを言っていました。

「(……おい、ヤツは誰のことを言っている!?)」

「(お、恐らくですが……ギャビストン家のお嬢さんとそのご友人のことかと……先ほど保護されているのを確認しました)」

む、衛兵さんたちも戸惑ってますね。

アンジエさんから習った読唇術に依ると……あ、リリさんたちも巻き込まれてたんですね。あんなのに襲われて大丈夫でしょうか……

「あの一、ケガとかしてませんか?」

「黙れ!! その女生徒たちは無事保護されている!!」

「あ、ホントですか!? 良かったあ〜!」

「だから大人しくこちらに……」

あ、この流れはまず……!

「あ、じゃあ俺もう帰りますんで」

そう言った次の瞬間、キリユウさんはこの校舎よりも高く空へと跳び上がりました。

「「「……………?」」」

え……………?

「に」

「逃げたああ!」

う、嘘でしょう!?

「なんで立ったままの姿勢で!」

『あいつ囲まれた時からめっちゃちよつとずつ膝曲げてたぞ』

「あ、なるほ……なんでわかるんですかあ!」

「ていうか膝曲げただけじゃ絶対あんな高く跳べないでしょう!」

「兎……ここまでするのね」  
ラビット

冷静に分析してる場合ですかアンジエさん!?

「クソ!! ヤツはどこに行った!!」

「方角は校舎の裏手です!!」



「チイツ！ 三班に別れる!! 手分けして捜せ!!」

「了解!!」

「……方法はともかく、今のは大分ベストな切り抜け方だったと思うが……さて、キリユーはどうするかね」

「あまり問題はないのではないか？」

桐生……”びるど”なら、追っ手から逃れる術くらい百や二百は心得ていそうじゃ」

「ま、だよな」

あ、そういえばあの紅と青の姿だけではないんでしたっけ。

多種多様な色の小瓶をベルトに入れて、小瓶ごとに決められた能力を使えるって……あ、テールブルにあるあれらがそうでしょうか。……あんな小さいのに、すごい技術ですね。とても興味深ければ深いです。

改めて考えると、なんだかとてもない人と知り合っちゃいましたね私たち……

あ、皆様たちが何やら作戦会議でしょうか。バンジョーさんに聞けないようにこっそり話し合っています。

「これではもう、彼もこの部屋には戻ってこれませんし、私たちも彼の行方がわかりませんね……」

「ある意味、私たちからも逃げたことになるわね」

意味深なアンジェさんの言葉に、四人は静まり返ります。

「ちよっと！ そんな言い方は……」

「(でも事実よ)」

姫様の声を遮るように、アンジェさんは声を大にします。

「(……それは)」

「(ドロシーの質問も私の質問も、私たちのこれからのためにも絶対に必要だった。……たとえ彼も苦しめてでもね)」

「(あいつは苦しいから逃げたって?)」

……それをあたしらが糾弾すんのは筋違いだろ」

「(それはわかっている。私が言いたいのは、今日のやり方では不十分だったってことよ)」

「(それは……まあ、確かに)」

「(目標の半分も聞き出せなかったからな)」

そうです。バンジョーさんの相手をする私以外のみなさんの今日の目的は、『桐生戦兎の素性と、彼の持つ力の正体を明かすこと』でした。

……結果は芳しくなさそうですね。

「(ま、今日が最後のチャンスってわけじゃないからさ。今度のパーティーでも会えるしな……気長にいこうぜ)」

「(……そうね)」

女王陛下主宰のパーティー、正直言ってとても不安でしょうがないです。バンジョーさんについては最低限言葉遣いさえなんとかすればいいとしても、問題は……

「(でも今は彼のことよりも、あの怪人たちについてよ)」

そう、突然現れたあの怪人たち。

「(一体、何が目的でうちの生徒さんを襲っていたのでしょうか……)まるでも何もわかりません。」

「(殺し……にしては動きが堂々としすぎだったよな)」

「(アンジェよ……そういえば、似てなかったか?)」

「(あの巨大カマキリ、そうね。色合いとか似てたわ)」

「(マスクメイカーの事件と何か関係が……?)」

「(その可能性は高いわね)」

怪人たちについては、まずはその線で調べることになりました。

……見えないところで何か重大なことが動き出しているような、そんな臆気な不安が胸の奥で広がるのを感じます。

大丈夫……ですよね？

何かとんでもないことに巻き込まれているとか……ないですよね？

私たちは……今……どこに……

『しゃーねえ、俺も帰るか』

……あ！

そうでしたバンジョーさん！この人はどうやつ……あ、荷物をまとめてますね。もう準備万端みたいです

『バタバタしてる隙にこっから出ねえと、なんか取り調べとかされそうだしよ。それに戦兎も心配だしな』

「そうね、その方がいい」

アンジエさんがぶつきらぼうに答えます。

なんだか少しお疲れでしょうか、声に元気がありませんね

『今日はありがとなあ、リス子』

「え……あ、はい!!」

わ、びつくりしました！

まさか声を掛けられるとは思いませんでした……

『パーティーは俺なりにちゃんと気を付けるけど、多分なんかやらかすかもしんねえ。そんな時は思い切りド突いて注意してくれよ。その方が覚えられる』

「は、はい!! わかりました!!」

『おう！頼むな！』

い、意気込みすごいですね……なんとかしなきゃってちよつと心配でしたけど、本人がやる気十分なら大丈夫かなあ……あ、ちよ、勝手に頭撫でないでくださいよ！

『あー、それと……帰る前にあなたたちに言つとくことがある』

チーム全員の視線がバンジョーさんに向かいます。

なにか伝言があるのでしようか。

バンジョーさんの口が開きます。

『色々戦兎のことで理解できねーことがいっぱいあると思うけどよ、これだけは言つとく』

体を正面に向け、彼はこう言いました。

『あいつは金とか誉められたいからって理由で戦ってるんじゃねえ。心の底から、本気で、誰かを助けるためだけに”仮面ライダー”やってんだ。』

開けっぱなしの窓から、風が、部屋を満たすように吹きました。

「KAMEN RIDER……?」

「ああ。愛と平和を胸に戦う、正義のヒーローさ」

正義の……ヒーロー……? キリユーさんが?

『それだけは覚えててくれ』

「正義……?」

アンジェさんが、バンジョーさんにすがるように問いかけます。

「彼の正義って……なによ?」

『うーん……強いて言やあ、バカでもわかる当たり前のこと、か?……』

まあいつかわかんだろ。じゃ、またな』

「あ……!?待っ」

ドアが閉まります。

「なんなのよ……一体」

さっきの爆発のせいでしょうか、窓から煙が風に流れてきます。

それは少し焦げ臭くて、目が痛くて……

彼は、一体……

クイーンズ・メイフェア校での戦いの後、俺をとつ捕まえようと追ってきた衛兵たちから地面に潜ったり屋根の上を走ったりとあの手この手で逃げまくり、ようやく店に帰ってきた俺は、いつものように飯の買い出しを済ませて”本”の執筆に勤しんでいた。

「——たっだいまー」

「おう、お帰り」

玄関の方から扉の軋む音がしている。万丈が帰ってきたようだ。ドカドカと大股で歩いてきた万丈はそのまま俺の座る席のテーブルの上を覗き込んできた。

「お、早速書いてんのか。紙とか足りてんのか？」

「モーマンタイ。あ、悪いなボトル持って帰ってきてくれたのか」  
ペンを置き、万丈がテーブルの上におもむろに置いたバッグの中身を確認する。

今日あそこに持っていったものは全て無事に入っていた。

「……なあ、あれ何だったんだろうな、あの黒いの」

ボトルを整理していると、横から万丈がボソツと問いかけてきた。当然の疑問だろう。俺だって知りたい。

……そうだな、現時点での俺の所感くらいはこいつと共有しておく。

「シヨーンの鎌や、あのデカイカマキリと似た雰囲気は感じた。」

「あー、確かに」

「でも雰囲気だけだ。」

アイツらにも自我はあるようだったけど、シヨンと違って人間の言葉を最後まで発さなかったな。」

「めちゃくちゃバカってことか」

「ところがそうでもねえ」

「おん？」

「土に潜って奇襲を仕掛けたり、こっちの隙を突いた攻撃をしてきたり、結構闘い方が理にかなってた。

でも全体的な動きに知性は感じられなかったから、動物的な本能でやってたのかもしれないねえ」

「あー、雑魚スマツシユみてえなものか」

「大体そんな感じだった」

「……っしー」

珍しく的を射たことを言えてドヤる万丈を眺めながら、またあの蟻怪人たちについて考える。

誘拐か、殺人か……

結局アイツらは何をしに来た……？

あの三人の女生徒の中の誰か、又は複数人を狙っていたか。

はたまた誰でもよかったのか。

……ダメだ、まだ情報が足りねえ

これは一旦保留し

「あ、そうそうヒメさんたちがよ」

「ああー」

ヤベエ完全に頭から抜け落ちてた！

「ああー……どうしようこれ」

悲鳴が聞こえて会話が止まってからすぐに戦闘で、そのまま直帰したから何も答えられてねえ！

絶対逃げたと思われてるよこれ……次会った時になんて言えば……

「おいどうしたんだよ」

「いやまあ……俺たちはどっから来たんだって、ガチの質問されてさ……それに答えられなくてうやむやになっちまってる」

「へえー」

万丈は気の抜けた声を発しながら脇の下を搔いている。

……のんきしてる場合じゃねーぞおい！

「……なんか問題あるか？それ」

「はあ!？」

いやどっからどう見ても大問題でしょうが！

「お前状況分かってんのか!？」

俺たちの正体が、ライダーシステムの真実がこの国のヤツにバレたら、どうなるか分かってんのか!？」

「わアってるよ!!」

俺の言ったことに、万丈は殴るように答える。

「そりやあんな変なデケエ飛行船やら、あとあのシーボール……だっけ？あんなのを創ってるようなヤツらに知られたら問題だつてのは分かる。この国、色んなところに戦争吹っ掛けられるくれえ強えみてえだし、下手したら”難波”よりヤベエこと考えてるヤツがいるかもしれねえ。……でもよ」

肩に、万丈の手が乗る。

「ヒメさんやリス子は……あいつらは絶対、そんなんじゃねえだろ」

——ハッ、と気付く。

『本当の嘘つきは、自分の事を嘘つきだなんて言わない。……だってそうだろう？嘘つきが嘘になるんだから、つまりそいつは正直者ってことだ』

『……つまらない言葉遊びだわ』

『でもホントのことだろう？』

『……俺は君を、君たちを信用する。これはその証拠だ』

「くそ……」

——俺は、

「信じるって言ったくせに、全然信じきれてねえじゃねえか……!!」

なんて傲慢。

なんて恥知らず。

「信じてくれなんて、どうして平気な顔で言えたんだ……!」

こんな体たらくで、どうして俺は愛と平和を語れるのだろうか。

正義のヒーロー、仮面ライダーを名乗れるのだろう。

「最低だ……俺」

「それはちげえぞ」

え、と。声のした方を見上げる。

万丈は立ち上がって、俺を見つめていた。

「今お前があいづらのことを心の底から信じられねえってのは、何も間違ってるねえ」

「……それって、何が」

「お前が最初にあいづらを信じられるって思えたのは、なんでだ？」

「それは……」

始めてアンジエと出会った夜と、その次の朝を思い出す。

アンジエは俺を、俺たちを――

「守るって、言ってくれたからだ。」

それがなんだか……嬉しかったからだ。

「ならよ、今お前が信じてんのは」その「アンジエってわけだろ？」

そんで、お前が信じられねえのはそうじゃねえ”俺たちのことを暴こうとする”アンジエだ」

「……どういう理屈だよ。どっちも同じアンジエだろ」

「ちげーって!」

万丈がしやがみ、視線が水平に重なった。

「心と体が同じ人間でもよ、やることと考えることが変わっちゃったら、それは全く同じ人間じゃねえんじやねえか？」

「!!」

そうだ……内海さん。

彼は”難波チルドレンとしての顔”と、”『あいつ』に忠誠を誓った悪の仮面ライダー、マッドローグとしての顔”を使い分けていた。

……アンジエだって同じじゃないのか？



”人を守る彼女”と、”人を追い詰める彼女”は全く別の顔……  
『仮面』じゃないのか？

そして俺が信じられると思ったのは守る彼女の方だった。でも……

「だから今はそっちのアンジェの信じられる方を信じたい。無理してあいつの全部を信じようとしなくてもいいだろ」

「……でもそれはー」

「嘘になるってか？ならこれからホントにすりゃいいだろ。あいつのことを信じたいなら、ちよつとずつでいい、ゆつくりでも信じていきゃいいじゃねえか」

「……………」

「なー」

「……そっか」

んだよ……カツコイイこと、言うじゃねーか。

「そうだなー……つたく、筋肉バカのかせに妙にもっともらしいこと言いやがつてー」

「へへ！経験談だからな」

「経験談？」

「ああ！……俺も、信じたくても人間を信じられない時があつてよ……ま」

『俺はお前を信じた。ただそれだけのことだ。』

——ホントのバカは、自分をバカなんて言わねーんだよ』

「今はダイジョーブだけどな」

そう言つて笑う万丈を見て、何故か照れ臭くなる。

この野郎！と掴みかかり埃が舞う店内を転がりながら、俺たちは日が沈むまでゲラゲラ笑つていた。

かちやり、かちやり、アンジエさんがティーセットを片付ける音が、部屋を満たします。

「今のところ判明した情報は以上よ」

「……………な、ななななん」

そして私は、あまりのことに思わず席を立ってしまいました。

「なんてトンデモマシンなんですかそれはあ!!!」

姫様と、チームの皆さんから教えていただいた”KAMENRID ER BUILD”、そのシステムの特徴は、私の想像を遥かに、文字通り空の上へと飛び上がっていくものでした。

「ベアトでも、そう思うのか」

「それは……………そうですよ。こんなすごい技術……………」

「さすが、ベアトは理解が早いわね。」

狼狽える私に、姫様は悲しげに笑みを向けてくださいます。

”ドライブバー”と”六十本のフルボトル”。

過去と未来を問わずありとあらゆる物質の能力を引き出し、鎧として身に纏う能力。

さらにボトルには生物と非生物で特に相性のいい特定の組み合わせがあり、それは”ベストマッチ”と呼ばれてるうんぬんうんぬんなどなどなど……………

まるで本当に御伽噺のような技術です。

「い、一体どこの国が、そんなものを……………」

「一番可能性があるのは……………」

ドロシーさんが、ちせさんの方を見ます。

「日本なんだよな」

「むぐ……………」

ドロシーさんの言い方が癪に障ったのか、不機嫌そうに眉をひそめるちせさん。

口早く言い返します。

「それは開発者が日本人である桐生の父君だからか？」

「それもある」

「……”も”」

「アルビオンや他の列強の持つ技術力がどれだけあたららの想定より高かろうが、あんなものを造ろうなんて思いつくとは、どうしても思えないんだよ。」

どこから持ってきたのか、ドロシーさんはテーブルの下からワインを取り出し、グラスに注ぎ始めます。

「ほら思い出してみろよ！あの権力欲と保身で凝り固まって、自分の造った兵器でどれだけ人間を殺せるかしか頭になさそうなのこの国の技術者の顔！」

あいつらが『おーウサギの跳躍力は兵器に使えそうだなー』なんて発想、できると思おうか？」

「思えぬ」

「そうだろう？」

「だが日本は長い間鎖国で完全に国際社会から孤立し、あのようなのを造り出せる技術など——！」

「ない……つてほとんどのやつは思うよな。——そこにつけこまれてるとしたら？」

「……まさか」

ワインを飲み干し、とん、と。グラスを置きます。

「どこの列強国からもほとんど干渉されず、秘密裏に長い期間好き放題兵器開発できる場所……そんな都合のいい場所なんて、他にあるか？」

強く言い放たれたドロシーさんの言葉に、ついにちせさんは何も言いませんでした。

「そんな……いやしかし……」

「こう言っついてあれだけどさ……別に今言ったことが真実とは限らないさ。」

俯くちせさんに、ドロシーさんは肩を寄せます。

「ホントはもっととんでもないことが裏で動いてたりするのかもしれないし、逆にどーしようもないほどしょーもない真実が大げさになっちゃまつてるのかもしれない」

「無責任なことを」

「そりやそうさ。答えなんてわかりっこない問題に、どうやって責任が持てるんだよ。」

わからないならわからないで、これからわかるようにすりやあい。責任を負うのはそれからでも十分さ」

「わかる日が、来ないとしてもか？」

二人の視線が重なります。

「それこそわかんないだろ！」

明日の命も保証できないあたしらだけどさ……明日の自分に期待するくらい、してもいいと思んだ。」

「ドロシー……」

「な？」

「酒臭い」

「わぶ」

ドロシーさんの顔を両手で押しよけるちせさん。あ、照れ隠しなんでしょうか。ちせさんのお耳がちよつと赤らんでますね。かわいらしいですね。

「こいつ、何しやがる！」

「顔を近づけるでないわ！」

助兵衛が感染つたらどうする！」

「なんだよスケベって……スケベニンゲンの略か？」

「それこそなんじゃー！」

「こら二人とも！ケンカしないの！」

取っ組み合う二人と、それを止めに入る姫様。

そういえば最近の姫様は、今のよう積極的にチームの輪に入ろうとする振る舞いが以前より増えてきているように見受けられます。スパイになってすぐの頃のような、穏やかでもあまり表情の変わらない姫様も、カサブランカに行つてからでしょうか。よくお笑いになって活発さがマシマシになりました。なんだかとても楽しそうで、ベアトリスも嬉しいです。

「ふふふっ」

「……ねえ、ベ아트」

「はい？」

御三方を見ていると、突然アンジェさんからお声がかかりました。どうかしたんでしょうか？

「貴方はKAMENRIDER BUILDを……桐生戦兔という男を、どう見ているの？」

むむ、これはまた突飛な……珍しいですね、アンジェさんが他人の印象を訊いてくるなんて。

しかも当の大問題の中心、キリユースさんのことです。

「どうって……まあ出身はどこなのか、バンジョーさんとはどうやってアルビオンに来たのか、そもそもそのBUILDの力はなんなのか……気になること盛りだくさんの自称天才物理学者のめちやくちや胡散臭い人だとは思いますが……」

「けど？」

聞き返すアンジェさんに、言葉が続けます。

「でも、悪い人には見えませんでした。」

「……人を見かけで判断しないほうがいいわよ」

「それはそうですね。まあ確かに姫様のお顔も知らないような失礼な人でしたけど……でもやっぱりいい人なんだと思います。」

「なんでそう思うの？」

碧い瞳に、私は覗き込まれます。その瞳の奥に隠れたアンジェさんの気持ち、見えたように思います。

私は口の端を上げて、安心してくれるように、答え続けました。

「わたしのような者にもきちんと挨拶してくれましたし、それに……アンジェさんとちせさんを守ってくれたんでしょう？それだけでも私はあの人を、どこにでもいそうな優しいお兄さんみたいなキリユースさんを、信じてあげてもいいと思います。」

「!!」

アンジェさんは驚いたのか、眼をまんまるくして口を開けっ放しです。

「私はそんなこと……!」

「顔に書いてありますよ？」

ホントはキリユーさんを兵器で人を殺すような人だと疑いたくありませんーって」

「書いてないし……思っていない！」

「アンジェさんはお人好しだって、わからないニブちゃんじゃありません。」

わたしも同じですよ。ホントは怖いですが、彼の持つ力が。」

「なら」

「でも、力を持つ当人のキリユーさんは、全然怖い人じゃないじゃないですか。」

まだほんのちよつとしか会ってないですけど、これでも人を見る目はあるほうですよ？わたし。」

だから大丈夫です。キリユーさんは、アンジェさんが信じるに値する人ですよ。」

私の言葉を最後まで聞いたアンジェさんは数秒ほど目を伏せ考え込んでから、またわたしに問いかけました。

”愛と平和” って……何だと思う？」

刺し貫くような視線。任務中のようなその視線は、本気の視線でした。

でもわたしはパツとすぐに答えられます。だって、決まり切ってることじゃないですか。

「姫様と、姫様が幸せに暮らせる世界です！」

それだけが、わたしの願うことですから。

「……そう」

アンジェさんの視線が、元の優しいものへと戻りました。

「ベアトはまっすぐね」

「えへへ」

「答えてくれてありがとう。……こっちのお皿も片してくるわね」

「あ、手伝います！」

こうして、今日この日は暮れていき――。

「女王陛下の、ご入場である!!!」

運命の日は、やってきたのです。

「——着いたな」

椅子から感じていた振動が止まる。乗っている送迎馬車が反比例グラフのX軸の右側に移動するようなゆっくりとした動作で停止した。プロの技というやつだろう、ただの馬車も現代の高級自動車と引けをとらないスムーズな停止だ。

「んー……ハァー……」

背中を伸ばし、大きく深呼吸。

この日のために大枚叩いて用意した黒い礼服、その襟を正す。お互いに似合わないと爆笑したシルクハットも被りなおして、良く晴れた春の陽気、中天の太陽が照りつける下、俺たちは白く輝く敷石の上に足を着けた。

「ここがパーティー会場か！」

晴れやかな気分だった。

「いやあー、ははー！」

もうあの子たちも中にいるんだろうなあ……」

だがあれ以来アンジェ達チーム白鳩と会うこともないまま、とうとう本番の日が来てしまったことに思い至ってしまった。晴れやかだった気持ちに、ちよっぴり暗めの青色が混じる。

「うおおおおーヤツバ、超白いなこの城!!」

……さて、公共マナーという言葉をかなぎり捨てたかのような大声で小学生並みの感想を叫んだのは誰であろう。そう、何故か本日の主役になってしまった男、万丈龍我だった。

「しいッ！声がデケえよ!!」

誰がどこで見ているかわからねえんだぞ！

……つたく。まあ確かにこのパーティー会場は思わず叫びだしたくなるほどに美しい白色だけだな。

しかし、いかに美しい外観だろうと中に入るのはこの筋肉バカなんだから、奇妙な巡り合わせだ。



そしてその顔は、もはや呆れるのを通り越して清々しいほどにグレートチャージでマグマも冷める間抜けっぷり。

一緒にいる俺までバカ扱いされないかと不安になってくる。

「なあー、これもし近くでカレーうどん食ったらよ、真っ黄色の壁になんのかな?」

「どんな状況だよお前それ……絶妙に科学者心をくすぐる想像を働かせるんじゃないよ」

「あとで実験してみようぜ」

「うんー!!……って誰がやるか!するわけねえだろ!!」

どんな脳細胞の繋がり方をしたらそんな発想ができたよこいつは……バカすぎて一瞬乗り気になっちまったじゃねえかよ。

はあ……この筋肉バカ流の思考回路は今日も今日とて無駄に冴えわたってやがるな。勘弁してくれよホント。

「——はあー、しっかし中もスゲエなあ。お、見ろよ!天使が描いてあるぜ」

「ん?……おお、フレスコ画だ。そーいや生で見るのは初めてだ」

万丈の指差したのは天井だった。腕を組み見上げてみると、淡いながらもはつきりとした色彩でラツパを持ったたくさんの天使や、髭を蓄えた血を流す瘦身の男が天井の隅々にまで広がって描かれており、とても荘厳な雰囲気醸し出している。

「すっげえなおい。アートだアート。ゲージユツ的だぜ」

「ラツパの天使……世界の終末的なシーンなんだろうけど、なんでキリストもいるんだ?」

「なあ、あんな高いところの絵、一体どうやって描いたんだろうな?」

「あー……建てる前に予め建材に描いておいたんじゃないか?パーツごとに区切って描いて、その後パズルを完成させる感じで建築したとか」

ここから天井までの高さは、ざっと見たかぎり10メートルはある。そんな高所で絵を描くなんてどう考えても危険すぎるからな。これが妥当な線だろう。

「へー、なるほどなあ」

「——いやいやあ、梯子使つてえ、一から描いたんだよお？」

「んだよ戦兎お全然違えじや……うおわあ!!」

「おとおお!!」

びつくり仰天。思わず両手を上に挙げてしまった。

突然、何者かが背後より俺たちの間を通つて現れたのだ。

「誰だお前!」

「おつとお、たはははは。おどかしちゃったかあ、ソリソリ」

その人物は手を鼻先で合わせ、俺たち二人に向け頭を倒す。

「おいおいなんでガキがいんだよ。ここ結構エライヤツしか入れねえんじや」

「誰が子供かあ!!」

「うおわ!」

「ボクはなあ!こう見えてもなあ!立っ派なアツダアルトなんだぞおらあ!」

「え……マジで言つてんの?」

「ほおら見なさいよこの身分証明書をお。ここに28つて、ちゃんと書いて!あるだろう!!」

「ええー……つと」

よくよく様相を観察すれば、背は俺の鳩尾のあたりまでと、小学生並みの低身長に、血圧の低そうな白い顔貌。

羽織っているコートは煉瓦っぽい赤色で、その中には白いシャツ。また、大きな黒いリボンが激しく胸元で自己主張をしながらキツめに襟を結んでおり、その横では服より赤い茜色の髪が三つ編みにされて後頭部から垂らされているのがわかる。そしてなんといつでも特徴的なのは、頭をすっぽり覆っている服と同じ色の大きなベレー帽と、顔の面積の約半分を占める真円の縁なし眼鏡。その奥には今にも落ちそうなほどに重そうなじとつとした瞼と、髪と同じ色の瞳が覗く。

「どこ見てんだよ万丈、ここに書いてあるぞ」

「うわマジだ!!」

全体的に赤が目立つこの人物、差し出された紙には年齢のほかにも

を”ヴェイラ・ルヴァオーク”、性は”女”、出身国は”フランス”、職業は”建築家”とある。……うーん、これは見た目からじゃとても想像できないな。

「すんませんでした!!」

「はあー……ま、いいよお。我が子を褒めてくれたからねえ。特別に許してあげよお」

「あざす!!」

「いい声だねえ」

なんとも興味をそそられる人物だろう。しゃべり方も独特で、かなりの曲者の予感がする。普段着にするには少し硬すぎるその服装からして、もしかしたらと訊いてみた。

「あー、あの。ここにいらっしやるってことはあなたも今日のパーティーに?」

「うんーそだよお。あ、てことは君らもそうなのかな?」

「はいっす」

「ほほお。あ、そういえば君らつてさあ、もしかしなくても日本人だよねえ?」

「はい、そうですけど……」

と、そっぴやまだ自己紹介してなかったな

「つと、初めまして。俺は桐生戦兎といいます。今日はこいつの通訳で来ました」

「万丈龍我っす。よろしくお願いします」

「戦兎クンに龍我クンか…変わった名前だねえ。」

あれ、その感じだと正式に招待されているのは龍我クンの方なのかな?」

「そっす。ヒメさ…プリンセスに誘われて、楽しそうだから来ました!」

「おお!あのシャーロット姫にねえ!すごいじゃんか君い!」

いやあ〜と照れ笑いする万丈。確かに冷静に考えれば、俺たちって実はかなり特殊な形で招待されることになるのか……

「はへえ〜、あ、二人はなにやってる人?」

「俺は格闘家……っ！よりは今はボクサーっス。週末は大体、町のリングで興行やってるんで、よかつたら観に来るといいっスよ！」

「ほほお、ボクサー……ふむふむなるほどお。戦兔くんは？」

「俺は見ての通り、天っ才物理学者です」

「ほお！」

「今もつぱらこいつの通訳ですけど、本当は世のため人のために様々なアイテムの設計や開発、実験をしまして、今度そんな俺の半生を綴った自伝『仮面ライダービルド（仮）』を出版する予定なんですよ。ははははは！」

「ほ、ほほおう?！」

「笑い方がキメエぞお前」

そしてヴェイラさんもやはり目的地は一緒らしく、共に回廊を歩きながら詳しく彼女について話を聞いていると、建築家だということのどろやら本当に天井の絵を描いた張本人らしい。

「——いやあホントは有名な画家に描いてもらう予定だったんだけどねえ、なあんか気乗りしなくってさあ。」

ほら、ここって女王さまが特別な日に使う建物なわけじゃん？特別なモノ造るのに普通のやり方じゃあ特別にならないんじゃないかなあー、とふと思っちゃったわけよお」

「あーそれすつつごい理解ります!!どうせ創るなら、他の人間が絶対やらないようなことしたいんですよねえやっぱ」

「そおそお！後で自分でも引くようなことをねー、してやりたいんだよお」

「それですそれ！完成した次の日とか、よくこんな音声入れようと思っただな！ふざけやがって！ってなるんすよねえ〜！」

「おい戦兔、お前それもしかして……あのドライバーから聞こえる声のこと言ってるのか？」

「でもその感覚がまた次の創造へのエネルギーになるっていうか」

「そうなのかなあそうだったのかよ!?おい!!」

うるっさいなあこの筋肉バカは……クリエイティブな時間を邪魔するんじゃないよ

「あれ、そういえばヴェイラさん、日本語わかるんですね」

「あ、そういやそうだな」

「たはは！そりゃあわかるとも！なんたって去年まで日本で修行してたからねえ!!」

「うええ!?マジかよ!?」

「おお、すごいな！」

「どおしても日本の城を生で拝みたくってねえ。いやあどれも美しかったよ！」

そこからはヴェイラさんのマシンガントーク。明治初期の日本に関する現代人基準ではとても貴重な見聞がこれでもかと押し寄せてきた。

「はー……フリリップ・シーボルトがハマツちやう気持ちもわかるつてもんだあ。薄汚れたヨーロッパの国々とは何もかもが違っていたよお。”黄金の国”とはよく言ったものだねえ。まあ私からしたらただの綺麗な金属より何億倍も価値があったけどたつははは!!」

いやあこの時代からこんなホットな外国人旅行客がいたんだなあ。まあ確かに彼ら欧米人にとっては日本は正しくもつとも身近な

異世界”だろう。新しい文化の最先端を求め続ける彼女のような人々にはそれこそ垂涎の地なのかもしれない。

と、歩き続けるうちにどうやら目的の部屋まで来てしまったようだ。

招待状いわく、ここはパーティが始まるまでの待合室らしい。部屋のドアに書かれている名前には、俺と万丈、ヴェイラさんの他に、知らない人物のものが記されていた。

「ここで待てばいいんだよな？」

「そうみたいだな」

「うあれ？おつかしいなあ……開かないぞこの扉あ！」

「ええ……？」

いやいやそんな、もうパーティが始まるまで一時間もないぞ？

「あれ？ホントだ……鍵が掛かってるな」

「のおう……」

おかしいな……ん？中でなにか物音が聞こえたような……  
「おおう!？」

ゆっくりと耳をドアに当てると、突然部屋側に開いてしまった。

「あ……も、申し訳ございません!!」

顔を上げると中には箒や雑巾など、一般的な掃除用具を持った使用人だろうか、オバサンが立っていた。彼女は俺たちの姿を視認したとたん頭を深く深く下げて詫びの言葉を上げる。

「あー、いやいやこちらこそ！掃除中にすいません!!」

「こ、この無礼はどうか！どうかご内密にいいいい!!」

「ああああそんな畏まらなくてもいいですから！俺たちそんな偉くないんでーいやホント」

「あ、DOG E Z Aじゃあん！ねえそれどこで覚えたのお？」

「どこに食いついてんだよ！」

ものすごい勢いで謝り倒すオバサンに押され、終始変なテンションでこの場は流れていった。

「なんなんだよ、つたく……」

「あーびつくりした……」

「んー……」

「あれ、どしたんスか？」

「いやあ、掃除って普通部屋を締めきってやるかなあ？って思ってたさあ」

「王族の所有する建物だから、あまり掃除する様子を外の人間に見せたくなかつたんじゃないですかね？」

「んー……そうなのかなあ」

まあ何はともあれ、これでひと段落だな。

「なんかノドかわいたな……茶ア飲もうぜ」

「そうだな。あ、ヴェイラさんも飲みます？」

「うんー。昆布茶飲みたい昆布茶。梅味のやつ」

いや紅茶の国で昆布茶は無いだろ……

「あ、でも玉露はあ」



「ああすまない！そうだったね!!……あ、ちよつと待つて今名刺出すね」

あれ……そういやこの男さつき自分のことを貿易商って……まさか

「不詳ワタクシは……こういうものです!!」

まるでこれが常識だと言わんばかりに、名刺がフリスビーのように飛んでくる。

それをなんとか怪我しないようにキャッチしてその名前を見る。

”株式会社 Strain Vision 代表取締役”

サーマス・イニオン

「何か需要があればいつ！でも！声を掛けてくれたまえ!!……ンよろしく!!」

ここに来る前に抱えていた俺の中のちっぽけな不安は、目の前の巨大な不安に見事、塗りつぶされてしまったのだった。



「二年ぶりにこっちに帰ってきたからね〜!!今日はハッスルしちや……ムン!?!」

名刺に書かれている肩書と、貿易商を名乗ったところから恐らくは貿易会社の経営者なのだろう。

名刺を投げて渡してきたこのやたらにテンションが高い男、”サーマス・イニオン”というらしい。

ちなみに会社の本拠は”デリー”とある。これはたしか”インド”の大都市だったはずだ。

「おやおやおやおやあ……」

肩書と氏名の横に、男の顔がデカデカとインクか何かで描かれている。証明写真もないこの時代によくやるものだと感じはしたが憧れはしなかった。

「ちつくしよ、変なところ投げやがってこのやろお……ぐぬぬ、髪ん中入っちゃった」

「オオ〜君が天才ヴェイラ・ルヴァオークだね!?!いやあ〜まさかあの天才建築家がこんな若い女の子だったとはねえ〜!!ハハハハハ……予想外だあ」

「うおおう!?!」

そしてぬるりとヴェイラさんに近づいて彼女の正面で膝をつき、真剣そうな面持ちでそう語りかけた。

「な、なんだよお!こっち来んなよお!」

「女史!」

「んひい!」

「早速だけど月末の予定は空いてるか!?!」

「んー、せつかくの真ツピンク!普請するなら色がよく映えるスイスのツエルマツトなんかいいと」

「ぎゃあー!!冗談を本気にすんなあー!」

涙目になりながら、切実そうに答えるヴェイラさん。心中をお察し

する。

「おいよせよ！怖がってんだろーが！

何言ってるかわかんなかったけど、なんとなくナンパっぽいこと  
言ってるんだろ？外でやれよ外で」

お、筋肉バカが珍しくカッコいいことしてる。

「おおっと失礼……フフ、ワタシとしたことがつい嬉しくって……ム  
ン？」

「あん？……うわ今度はこっちかよ！」

ずずいつと早足で万丈に近づく褐色ノツポ。

おいおいただの筋肉バカに何の用が……

「キミ、もしかしなくてもあの……」 Dragon☆Banjio⇒  
「じゃないかい!?」

「……なんつってんの？」

お、意外だな。

『「お前は”Dragon☆Banjio⇒”か？」って訊いてる」  
「あー……そうだぜ！」

「オオ!?」

「イエス!!アイアムバンジョー!!」

「オオ~~~~!!」

ロンドンのボクサーとして万丈に興味があったのか。

「いやあハハハ!!ドアの名前を見た時からそうじゃないかと思っ  
たんだよねえ~~~~ツ!!」

万丈にイニオン氏の言葉を通訳する。

ちなみにビルドフォンの翻訳機はやっぱりこういう不特定多数の  
大人数がある場所で使うのは失礼かもしれないとベアトリスに言わ  
れたこととあとドロシーがそうしたように色々訊かれたりしてごた  
つくだろうということ、チーム白鳩の子たちしかいない場所でのみ  
使うことにしてあった。

「なんだよ俺のファンならさっさと見えなあ！ワハハハハ!!」

「オツホホウ！いやゴメンネ！ほらワタシ、人見知りだからフツハハ  
ハハハ！」

「どの口が言うんだどの口があ」

苦手なのだろう高身長の子とのコミュニケーションから開放されたことで緊張が解けたからか、ヴェイラさんはまるで夏場の動物園のパンダのような雰囲気醸し出しながらソファにぐったりしている。無防備すぎて、とても28の女性が人前でしている姿ではない。

もしかしなくてもこの人、自分から危険な状況を作り出してしまいうタイプなのではなからうか。変な男にモテる女の子ってこういうところあるよな。

「オ、そして君は……」

うお、俺か。やっぱ俺もそこそこ知られてきて……

「んどちら様？」

……ないよなあやっぱ。

はあ、まあしようがねーか。対して名が売れるようなことまだしてないもんな俺。

「えーゴホン、初めましてMr. イニオン。俺は天ツツ才物理学者の、桐生戦兎です！」

「オオ学者!! そりゃあスゴいなあ、キリユー氏!! いやあ、お会いできて光栄だ!! 改めて……ンよろしく!!」

固く握手を交わす。しかしインドの貿易会社の代表取締役か……これまたすごい人と知り合いになっちゃったな。しつかしインドといえは紅茶大好きなこの国の人たちにすれば本気で国家レベルに重要な……

「おっ菓子いおっ菓子い……をほう! チョコチップクッキーだあ! いただき!!……うつを、んーまい!!」

って放課後の小学生か!

いや見た目と言動がまんますぎてガチに見えちやうぞヴェイラさん。

「……ていうかもうすぐパーティーなのに今そんな食べちゃっていいんですか?」

思わず日本語で問いかける。

「んう? だめなん?」

「いや駄目ってわけじゃないですけど……」

「食べたいときに食べる、それがボクの流儀さあく♪ばくり」

「お、だよなあ！」

「ういええす♪」

おおう、食いしんぼ同士で共感してやがる……

「お、いい食いつぷりだね女史イ!!」

「……んく、話しかけんなっつのお！」

「オ、そうだ——ヘイ! ヴィナスファアアイブ!!」

すると突然、イニオン氏は部屋の外に向かって声を上げた。

「はあくいサー様!! いかがいたしましたかー?」

「!?!」

え、誰かいんの!?

「チヨコチップクツキーに合うドリンク……キャモン!!」

「かしこまりましたー!!」

「……おい、今のだ」

「お持ちしましたー!!」

「早ツ!」

勢いよく扉は開かれ、そこから現れたのは——

「えええ!」

「なんだただのメイ……うオオ!」

一人……ではなく五人のかわいらしいメイドだった。だが真に驚くべきはそこではない。

『淹れたてほやほや、ロンネフェルト紅茶でございまーす!!』

19世紀がなんぼのもんじやいと云わんばかり。五人全員、もれなく「ミニスカ黒ニーソ」だったのである。

「なん……だと……!?!」

これにはヴェイラさんも目を丸くしてビックリ。

常識を疑うその視線は当然だろう。俺だってそうだ。まるで意味がわからない。

「い〜〜ね! センキューベリベリマッチだよヴィナスたちイ〜〜ツイ!!」

……ア!!ン~~~~…最ツ高の香りだア!イヤッ!

パチパチと手を叩きながら五人に駆け寄り、手で仰いで紅茶を香りを吟味するイニオン氏。

そして五人のすばやい動きにより俺たち四人にカップが行き届いたのを見届けて、とりあえず一口。

「あ、美味しい!」

聞いたことのない名前の紅茶だったが、ほんのちよっぴり舌尖に触れただけでその洗練された味がわかった。イニオン氏はこんないいものを毎日この子たちに淹れてもらっているのだろうか……いや別に羨ましくねーけど。

「……俺よりバカな奴がここにもいやがった」

「くう!……こ、このやろお、なんつう権力の使い方をしやがるんだあちくしよおめえ!」

五人とも上半分は本当にオーソドックスなメイド服なのだが下半分がなんというか……未来を先取りしてると言えばいいんだろうか。

まさかこの時代のこの国で、某電気街のアトモスフィアを味わうことになるとは思わなかったな……

「紹介しよう!!彼女たちはワタシの専属メイドでね!!その名も——」

「はい!18歳長女、アニーです!」

つと、間違えないようにちゃんと覚えとかねえとな

ショートボブでハキハキ活発そうなこの子が長女……と。

「ベニーです。あ、次女ね。年は17です」

エアリーウルフのテンション低めな子が次女ね。

「三女!ケニーっす!!……16っす!!」

サイドテールでめっちゃ元気もりもりな子が三女……うんうん。最後年言うの忘れてたのだろうか。

「四女♡デニーです♡あ、ねえそこのお兄様あ♡」

「はい?」

「デニー、いくつに見える?」

「……15?」

「きゃー♡せえかあい♡」

問題になってたんだらうかこれは……えつと、見事な縦ロールで艶っぽ喋りの子が四女か。

「……エニー……五女です14です」

最後の一人、ワンレンで片目が少し髪に隠れているこの子が末妹、と……人見知りするタイプだろうか。

そして五人とも桃色の髪に碧眼。顔はよく似ていて、まるで同じ人間の顔を身長順に並べたよう、服装も相まってかなり印象的な女の子たちだった。

「五人そろって！」

「うおお!」

長女アニーの掛け声、そして整列する五人。

『我ら、サー様専属スーパー親衛隊!!』

……《ヴィナスファイブ》!!』

ドカン!と、何故か五人のバックで爆発が起こったような幻覚が見えた。

”スーパー親衛隊?”」

「そう!スーパーです!!」

「ただのメイドじゃあないんだなーこれが」

「ごほーしはモチロン、ごえーもしちやう!」

「特別な親♡衛♡隊、なの♡」

「ごー、ごごー……五女だけに」

お、おかしい……何が間違っているのかわからないのに何もかもが間違っている、そんな気がするのなぜだろう……

「パねーなコイツら……逆に世界救えるんじゃないやね?」

筋肉バカはまるで何も考えてない顔でポリポリとクッキーをぼりぼり。ホント美味しい性格してるよなこいつ。

「そしてこの方々こそ!今日!ワタシの友となった世紀の傑物たち!

手前から、”ダ・ヴィンチの再来”!ヴェイラ・ルヴァオーク女史!!」

「なんだその異名!?初耳だぞお!」

”大天才物理学者”!セント・キリユウー!」

「以後、お見知り置きを!……大?」

”マケルキガシネエゼ”でお馴染み!!我らが!!Dragon☆Banjo⇒オオオオオオオ!!」

「万丈龍我だ!!……あれ、俺にはイミヨーねえの?」

「そしてワタシこそ!!黒曜石の貴公子!!サアーーマ」

「いやもう知ってるわあ!!」

「ン女史イ!!」

なんでこんな躁100%なんだこの人……

”キコーシ”……おお、ヒビきいいな!」

いや参考にしてんじゃないよ、後で俺が恥ずかしいことになるからやめろ!!

「おい……サー様よう」

「ン?なんだい?」

お、ヴェイラさん、苦手そうにしてた割に意外とすんなりコミュニケーションが取れ……

「アニーちゃんとエニーちゃん、よこせ。」

「(紅茶を吹き出す音)」

「オーウ……そうきたかあ……」

「家建ててやるから!!」

「ちよ……ちよつ、ヴェイラさん!」

「なんだよお」

いやなんだじゃねえよ!!

何あんた、そういう人だったの!?

「ああん!?キミなあ、こんな趣味にぶつ刺さる女の子がいたら……欲しいと思わないのお?」

「思わねーよ!!あんた昼間になんのがわしいパーティーをおっぱじめようとしてるんですか!!」

「う、うるせ……ッ!!ボクにもあの流線美を堪能させろお……!!至近距離で見せろお……!!」

思わぬ人の思わぬ性癖が露になってしまった……。

「おー告白じゃん。どーすんの?お二人さん」

「女の子どうかあ……さすがアニ姉!大人だな!」

「やーん♡この人こわあい♡」

「もー！みんなからかわないでよー！」

いや余裕なのかよ！

図太いなキミら！

「あー……ハハハ!!さすがは僕のヴィナスたち!!シン〜！チョコチップがテイステイイ〜〜〜ツイ!!」

……なんか他の部屋から苦情が来そうだなこれ……。

いやしかし今日だけで濃い人たちにめっちゃ会うな。さすがは国のトップが主催するパーティーってところか。

「バンジョー様……あーん」

「うめえうめえ。ほらお前も食べよほら」

「あむ……おうひいでふ」

こいつ満喫してやがる……ま、でも。

「なんか、人がいっぱいいると楽しいよな。やっぱ」

パーティー前だけど、俺もクッキー食べよ。

コンコン。

「お待たせしました！会場の方、準備が整いましたのでお知らせに参りました！」

ミニお茶会を楽しんでいると、不意にドアを叩く音が聞こえた。

「これより開場のお時間となります、ご用意のほどお願い致します！」

いよいよだな。さて、ここからだ……気を引き締めていかねえと。

「万丈、わかっていると思うけどもう一度言うぞ」

「んだよ」

「絶っつ対に！偉そうな人にナメた口利くんじゃねえぞ」

「わあかっつるって!!何回言うんだよそれ！」

「ホントだな？絶対だぞ!!」

「おう！」



返事はいいんだけどなあ……いや、もう心配しても仕方ねえんだけど……

「フンフン、二年ぶりのこっちのパーティー……いやあくく楽しみだなア!!ハハ!!」

「ふああくくああ……あれなんか眠い……」

「ヴェイラ様大丈夫ですかあ!?!」

「寝る……」

「ダメよお♡」

「うおわ!!ちよ、どこ触ってんのお!?!」

「起きた……ちよろいつすね……ぶふっ」

むしろ心配すべきなのはこっちか……大丈夫かよこの人。

部屋から会場までのこの道、他の参加者たちから奇異な目を向けられまくるな。俺がしつかりしとかねえと……!

「こちらになります!」

「ありがとうございます!」

案内人さんに挨拶をして会場入り。

さてどんな感じなのか……おお!!

「うお、きれーだな……」

まず目に飛び込んできたのは、外壁と同じく真珠のように美しい壁と床の白色。

そして瑠璃色と茜色を基調としたステンドグラスの窓、窓、窓。差し込める日の光がカラーライトとなって場内に煌びやかな光のモザイクを映し出している。

「オオくくく!!流石は女史!!素晴らしい作品だア!!」

「たはは!だしよお?ナガサキの教会から着想を得たんだあ。飛びつきりのいい子だよおこの子はあー!」

そういえばそうだったな。このパーティー会場になつてる建物はヴェイラさんが建てたものだった。

「わあいもつと褒めてえく!」

「ヴェイラ様の作品、すつごく綺麗です!」

「ヴェイラ様スゴイっ!!」

「たっははは!! やっぱ好みの子に褒められると違うなあ! ……ふとももきれいだね触っていい?」

傍目じやとてもそんなすごい人には見えねーけど……。

「——あら、皆さんごきげんよう!!」

ん? ……うおお。

「ヒメさあん! ちわす!」

プリンセス。それに、

「お久しぶりです。キリユーさん、バンジョーさん!」

「おう! リス子も一緒か!!」

「ベアトリス!! デス!! 呼べ!! ナマエちゃんト!!」

「あー、悪……あれ日本語しゃべれんのお前!」

「ふん! チョトダケデス」

おお!! すごいなあ!!

「オソワりました。ちせサン、カラ」

「あー、なるほどなあ!」

「日本語はどう?」

「む、む……ムズカシイデス! ……ヒラガナ、カンジ、モジ! オオスギ!!」

あー……確かに。アルファベット26文字と比べたら日本語って常用漢字も入れたら2000文字以上あるからな……。やっぱ外国人にはそこがネックになるのか。

「でもちゃんと勉強してんだからすげえって!! お前頭良さそうだし、今度は英語も教えてくれよ!」

「〜!! ……アツカマシイ!!」

「おい、戦鬼。今のどういう意味だ?」

「デリカシーがないってことだよ。」

お前英語の前に日本語勉強しなおした方がいいぞ?」

「……うそーん」

嘘じゃねえよ。バカ語で言うとりアルガチだよ。

っっておしやべりしてる場合じゃねーな……この二人がいるってこ

とはもちろん……

「プリンセス！そろそろ壇上の方に……！」

「やっぱりだ。思ったより早く……」

「おーひさしじぶ」

「あ……！あなたがバンジョー様ですね!？」

「おおん!？」

「……え？」

「初めまして！わだす”アンジエ・ル・カレ”といいます！

町のスターにお目にかかれるなんて……嬉しいですう!!」

「お、おう。……よろしく?」

「あれキミそんな……わかりやすく明るいキャラだったっけ？」

「……少し訊いてみるか。」

「(えっと……それは、スパイのカモフラージュなのか?)」

「(わかってるならちゃんと言を合わせて。今の私はインコグニアから来た田舎娘。そういうカバーなの)」

「(……なるほど)」

「冷静沈着なスパイ、感情豊かな普通の女の子、そして今のアンジエ。」

「……それも君の、”仮面”の一つなのか。」

「あ、そうだ行かなきゃ……また後程お話ししましょうね、キリユーさん」

「!!」

” お話 ……まあそうだよな。

「……はい」

「それでは皆さん、失礼いたします。」

「プリンセスとベアトリスは会場の奥へと戻っていく。」

「……何から話せばいいんだ」

「キリユーさん!!」

「!!」

「あ、アンジエ……の田舎娘フォームか。」

「バンジョーさんも一緒に、色々お二人のこと知りたいです!……お

聞かせくさいませんか？」

——『洗いざらい全部話せ。』

そう聞こえたのは気のせいでは……ないよな。これ……